
アリーシャ ～王殺しの娘～

RINA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリーシャ ～王殺しの娘～

【Nコード】

N0508X

【作者名】

RINA

【あらすじ】

10年前、エストレア国王を殺してしまった王の乳母の孫娘。乳母は呆然とする少女を山奥の集落に逃がし、少女の身代わりとして処刑される。王の息子は真相を知らずに育つが、王妃の遺言で少女はまだ生きていると知り、復讐を誓う。しかし成長した少女と共に時を過ごすうちに、いつのまにか彼女に惹かれている自分に気づく。シリアスですが、最後はらぶらぶでハッピーエンドな恋愛小説に出來たらと思います。お付き合いいただけたら幸いです。

プロローグ（前書き）

この小説は横読み推奨です。

ブローグ

少女は一瞬、何が起きたかわからなかった。

両手に重く響く感触。寸分の狂いなく急所を貫いた確信。

そう、この人に教わった通りに。

呆然としたのは一瞬。

自分が何をしたかに気づき、頭が真っ白になる。

体中がガタガタと震え、涙が滲み始める。

それでも、ねじ込んだ刃物を握る手の力を緩めることはしなかった。涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔をあげると、男は眼を見開いて自分の横腹に刃を突き立てる少女の顔を見つめていた。

数瞬ののち、苦しげに顔をしかめて目をきつく閉じると、白く染まり始めた土の上にどつと膝をついた。

せわしなく白い息を吐き出しながら呻く。

「……………何という……………ことを……………」

少女の両目からさらに涙があふれ、嗚咽が漏れる。

その通りだ。…本当に、本当に、自分は何ということかを。なぜこんなことになってしまったのだろう。

静まり返った血の海の中で、少女は一人、泣き続けた。

第1話 ニース村の少女

あたりが段々と明るくなり始め、目の前の岩壁に光が射したので振り向くと、遠くの稜線を縁取るようにして日が昇り始めたところだった。

「……3日前より日の出の時間が早い……もう春だなあ……」

眩しさに思わず目を細めてひとり言をつぶやく。

アリーシャは現在、垂直の断崖絶壁の斜面を、自分の両手と両足だけで登っていた。

腰までの真っ直ぐな黒髪を青い飾りひもでくくり、背中には今日の収穫である山菜と薬草、ケナガ鳥の卵が入った大きな籠を背負っている。

服装はいつも通り、薄物の半袖の上にゆったりとした膝までの上着を重ね、ズボンの裾は布製の長い編み上げ靴の中に入れ、両手には指先の出る皮手袋をはめていた。腰には狩猟や採取に必要な道具の入った小さな物入れを巻いていたが、今使われている道具は、崖縁の木の幹とアリーシャの胴をつなぐ長いロープだけだった。下を向けば谷底は深すぎて底が見えない。上を見れば、崖の縁に生えているのであろう木々がぼんやりと見える。

おそらく、太陽が完全に山の上に出るくらいまでには、上までたどり着けるだろう。

アリーシャはそうあたりをつけた。そして再び斜面に向き直ると、一手一手、一步一步慎重に登り始めた。

アリーシャの住む村は、ファーディラム大陸にある4つの国の一つ、西のエストレア王国シェットクライド州のニース村という小さな村である。

エストレア国の都ベルファールから、隣国レスランカとの国境に位置するシェットクライド州の州都ドーラムまでは馬車で6時間、さらにドーラムからニース村まで徒歩で1時間かかる。

国の端の州だが、5年前に現エストレア国王がレスランカの王族の姫を正妃に迎えてからもともと盛んだった両国の貿易、交流はますます栄えた。

両国間の全ての物流は必ず一度ドーラムを通る。そのため、州都ドーラムからベルファールまでの道路は念入りに整備され、2つの大荷馬車がすれ違えるほどに道幅は広がった。

またこの町には国境警備隊の駐屯所も設置されており、昼夜見回りの兵士が巡回しているため治安もよく、ドーラムは今では立派な宿場町として国の外貿の要になっていた。

「……よい、しゅつと」

両の手のひらで少し湿った雑草をしっかりと掴むと、アリーシャは腕の力で体を引き上げ、無事に崖上の地面に両足を着けた。

と、同時に鐘の音が聞こえる。回数は1回。

この国では、1日に5回教会が時刻を知らせるために鐘を鳴らす。日が昇りきった早朝に1回、日の出と正午のちょうど中間で1回、正午に1回、正午と日没の間で1回、そして日が完全に沈んだところで1回である。

それぞれの鐘の回数は早朝の鐘が1回、次が2回と1つずつ増えていき、日没の鐘が5回で最後だ。

だいたいの人々は自分で空を見れば今が1日のどのあたりのか見当がつくが、雨の日など天候が悪く太陽が見えない時には鐘の音を頼りにその日の仕事の割り振りをする。

ほぼ予想通りの時の経過にアリーシャはわずかに笑みを浮かべ、森に向かつて歩き出した。この森を抜けるとすぐにアリーシャの暮らす小さな小屋があり、ニース村の人々が暮らす集落がある。

アリーシャは普段、村人には入ることの難しい山の奥深くや崖の斜面に生えている珍しい植物や薬草を採集し、それらを州都で売って暮らしている。

まれに食糧的価値の高い野生の動物も狩るが、そのほとんどが何か特別な行事や儀式のためだった。

彼女が9つの時、アリーシャはニース村に住み始めた。

最初の1年は村長夫妻に養われるだけだったが、10になる頃にはただ世話になることがとても居心地悪く感じられるようになり、仕事を見つけたいと思うようになった。

この村でできて、他の人の商売の邪魔をせず、元手がかからず、自分にできること。

必死に考えた結果浮かんだのが、自らの身体能力を生かした貴重な動植物の狩猟採集だった。村で1年暮らしながら周囲の子供たちを見るうちに、自分の体は彼らのそれとは違うことにぼんやりと気づいていた。

彼らは狙った川の魚に石を当てて気絶させることもできなかったし、遙か上空を飛びまわる鳥を射落とすこともできなかった。

底の見えない谷底に生える薬草を取ってくることも、力任せに突進してくる熊を一撃で仕留める技も知らなかった。そもそも彼らは毎朝裏手の山の頂上まで駆けたりせず、木の幹に印をつけて跳躍力を

はかることもしなければ自分で的を作って石を飛ばし命中の精度を上げる訓練をするようなこともない。

そしてそれは、子供だけでなく周囲の大人にもあてはまることを学んだアリーシャは、ある日から早朝に出かけて、手に入りにくい薬草や山草を取ってくるようになった。

村の人々は初めこそ驚きアリーシャにどうやって手に入れてきたかを聞いたが、その度「偶然生えているのを見つけた」「森の神さまがくれた」とうやむやに返され、何となく聞くのを躊躇うようになり、やがて自然に受け入れるようになっていった。村人はみな身寄りがないアリーシャの今後を心配していたし、彼女が自分で生計を立てる道を見つけられたならそれで充分だと思っていたからだ。

そうしてアリーシャがニース村に溶け込んでから10年の月日が経った。

アリーシャは今年で19歳になり、今は村長の家を出て森の入口の小屋で一人静かに暮らしているのだった。

第2話 メリーベルの願い

「……こうして生活ができるのも、グリエルさまとおばあさまのおかげ……」

家に帰りつき、州都に向かうための荷造りをしながら、アリーシャはこの10年、数えきれないほど口にした言葉を呟く。

誰にも裁かれない自分への断罪のように。

犯した罪を、片時も忘れないための、戒めのように。

物心つくまえから自分を鍛え、一流の戦闘能力を身につけさせてくれたグリエル。アリーシャの罪を被り、アリーシャのかわりに処刑された祖母のアーシェ。

2人とも、アリーシャが殺した。

5年ほど前までは、何度も死を考えた。

しかしその度、アリーシャが生き延びることを願って死んでいった祖母の顔が頭をよぎる。

そうして結局、アリーシャは消極的に生を選んだままここまで来てしまった。

かたく目を閉じる。外から村の子供たちのはしゃぐ声が聞こえる。目を開き、荷物を持って立ち上がる。

それでも最近、やっと前向きに生きられるようになってきた気がする。

このままここで、お世話になってきた村の人たちに少しでも恩返し

ができたら。

コンコン。

入口の扉を控え目に叩く音がする。

「はい？」

あわてて駆け寄り、戸を開ける。

「あ、おはよう、アリーシャ。ごめんね。もう出るところだったよね？」

そこには頬を少し染め俯き加減の幼馴染のメリーベルが立っていた。

「おはようメリー。ううん、大丈夫だよ。どうしたの？」

「あの……あのね……」

もじもじと落ち着きなく視線をさ迷わせるメリーベル。アリーシャは黙って次の言葉を待った。

「あ、あのね、アリーシャ。ドラムの州立図書館の隣に、レスランの布専門の織物屋さんがあるでしょう？で……でね、明日、その……ナイジェルの誕生日なの。それで欲しい膝かけがあるんだけど、前回行った時はお金が足りなくて買えなくて、でも今日は私どうしても弟たちの面倒をみなくちゃいけなくて、お店まで行けないの。だからアリーシャ、代わりにお店から膝かけをもらってきてくれない？」

そこまで一気に喋ると、メリーベルは必死の形相でアリーシャの顔

を見つめた。

ナイジェルは村長の息子で、メリーベルの婚約者だ。村で子供たちに文字を教えている。温厚で聡明な青年だが生まれつき足が悪く、いつも杖をついて歩いている。春になりかけたとはいえ、朝晩はまだしっかりと冷え込む。

そんな彼を気遣ったの贈り物なのだろう。

メリーベルの気持ちを思い、さきほどまでの暗い気分が消え、胸に温かいものが広がる。

ほんとうにこの村の人々には数えきれないくらいたくさんのもをもらった。

アリーシャは微笑んで答える。

「もちろんいいよ。帰りは鐘が4つ鳴るのを少し過ぎるくらいだと思うけど、大丈夫?」

メリーベルが満面の笑みを浮かべ、何度も首を縦に振った。

「うん、うん、平気!じゃあそのころ取りに来るね!あ、これお金!お釣りはとっておいてね!本当にありがとう、アリーシャ!」

慌ただしくお礼を言いながら50レニール紙幣を渡して去っていくメリーベルに手を振りながら、お釣りで彼女に何かお土産を買っていいこうと思うアリーシャだった。

第3話 セルフィエルの出立

アリーシャがメリーベルに頼みごとをされていた時刻とほぼ同じころ、エストレア国首都ベルファールにある王宮の廊下を、王弟セルフィエル・シャノン・エストレアは足早に歩いていった。

すれ違うたびに臣下に会釈をされ、それに目礼で答える。

向かう先は現国王であり兄でもあるザフィエル・ステファン・エストレアの執務室である。今の時刻、ザフィエルは朝議から戻ったばかり、仕事を始める前に一息入れている時間だった。いつもなら王室師団長として兄と共に朝議に出席したあと、セルフィエルは通常の任務や訓練に勤しみ、次の日の朝まで兄の顔を見ることはない。

しかしこの日は事情が違った。

執務室の前にたどり着く。

一つ深呼吸をして、扉をノックし、名を名乗る。

入室許可の声とともに中に入る。

よく整理された真正面の机では、すでに兄のザフィエルが今朝届いた封書の確認をしていた。入ってきたセルフィエルを見て、その手を止める。

「セルフィエル。お前を朝議以外で見るのは珍しいな」

相変わらずの仏頂面での発言だが、皮肉ではない。ただの感想である。

それをわかっているセルフィエルは、にっこりと笑顔で返した。

「そうですね、兄上。お互い忙しくてなかなか話す機会がなくて寂しいです」

ザフィエルの無表情がわずかに変化する。

「……そ、そうか。今、ジャクリーンが茶を準備してる。たまには一緒にどうだ。ベルベットも喜ぶ」

ジャクリーンは5年前に隣国から嫁いできたエストレア国の正妃である。ベルベットは第一王女で、先月4歳になったばかりだ。多趣味なジャクリーンの趣味のひとつが茶を淹れることで、夫の分は使用人に頼まずいつも自分の手で用意している。魅力的な誘いだが、今のセルフィエルにはそれに応じている時間がなかった。

「すみません、とても残念なのですがまたの機会に。……兄上、俺は今からシエットクライドに発ちます」

ザフィエルは申し出を断られてわずかに悲しそうな顔をしたが、次の瞬間はつと顔を上げた。

「今からか？」

「はい。この2週間で準備は整えました。今は静かな時ですし、王室師団も2カ月程度ならば副団長に任せても問題ありません。何かあれば直ちに戻ってまいります」

表面上穏やかな微笑を浮かべてはいるが、セルフィエルの目は暗く強い意志にきらめいていた。ザフィエルはふつと視線をそらす。

自分の小麦色のものとは違う紅茶色の瞳。

……父上と、同じ色。

「……何もお前が行かなくてもいいんだぞ。遣いをやってもいいし、捕らえようというのではない、本人の意思次第なのだから、文を出したっていいんだ」

セルフィエルは笑みを深くした。いくら隠そうとしても、おそらく自分の本当の目的に兄は気づいている。

この10年間、明るくふるまっても心の奥底にはずっと父の存在があったセルフィエルに、2週間前母が残した真実。

それを聞いた時から弟の目に宿った暗澹とした喜びの感情。父の仇を、自分の手で討てるかもしれないという希望。

だが、遠まわしにセルフィエルを止めるザフィエルが心配しているのは山奥で生きている娘の命ではない。

セルフィエルのことだ。

ザフィエルが案じているのは、その娘に相對した時の、弟の精神だった。

セルフィエルは三兄弟の中で父親を一番愛し、尊敬している。その強い思いは今もおそらく、衰えることなく。もう父のことは過去になりつつあるザフィエルや妹のヴァージニアほどには、まだ彼の中で10年前の出来事は薄れてはいない。

「ありがとう、兄上」

それがわかるから、セルフィエルは礼を言った。いつも自分を心配してくれる不器用で優しい兄のことが、セルフィエルは好きだった。だから、笑顔で嘘を吐く。

「大丈夫です。必ず無事にその娘を連れて戻ってきますから」

「……わかった。気をつけてな」

一礼し、セルフィエルが退室する。それと入れ違いに、隣の給湯室からジャクリンが静かに現れた。居た堪れなさそうに佇む妻に、ザフィエルは小さく苦笑して声をかける。

「聞いていたのか」

「ええ、すみません……出るに出られなくなってしまっ……」

ジャクリンが長く波打つ金髪を揺らして俯く。そして夫にティーカップを手渡しながら、控え目に尋ねた。

「……行ってしまったね。よろしいのですか？」

王太后が他界したその日に、ジャクリンには遺言のことを話してあった。

「そつだな……止めても、どちらにせよあいつは行ったと思うからな……」

あの父を一撃で殺したのだ。年齢は明らかではないが、当時すでにそれほどの手練れ。返り討ちにされる可能性は低くない。しかし弟は全て覚悟の上で行ったのだろう。ならば、もう何も言うことはない。

「……セルフィエルも、そろそろ前を向いてもいい頃だ」

カップの中の紅茶を見つめながら、ザフィエルはひとり言のように呟いた。

第4話 王太后の遺言

2週間前、長年病床に伏せていた王太后がついに他界した。葬儀には1週間にわたり供花のために国民が押し寄せ、彼女の死を悼んだ。

王太后がエストレアに嫁いできた当時、エストレアは領土の拡大と自国を豊かにするために常に戦争をしている状態で、彼女は敗戦した軍事国家から属国になる証として献上された姫だった。

嫁いだ当初は自室に引きこもり泣いて暮らしていたが、夫であった先王グリエルが時たま漏らす敵国の情報から、ぼつぼつと作戦の案を出すようになった。

戦時代の真つ只中にあつたエストレアで、軍事国家の王族として育った王妃の意見は貴重だった。

グリエルは王妃の才を喜び、積極的に意見をもとめた。

ただ王妃の才は軍事作戦のみに特化したもので、政治的才能はない。王妃自身も夫である先王グリエルもそれをよくわかっていた。

戦争の時代が終わりとつある頃には、王妃は政治や軍事に介入することはなくなり、王宮の女官の教養面の教育に尽力した。

戦の時代が終わりと、グリエルは荒れた国の再建を図った。

強引なグリエルの政策に反感を持つ者がいたが、そういった者たちはことごとく左遷、もしくは暗殺されていった。

しかしその一方で政策は優れ国民の生活水準は向上していったので、国民の大部分はグリエルに畏怖の感情を抱きつつも、同時に賢帝として崇めていた。

時代の変わり目には、多少の犠牲はしかたがない。みな、そう思っていた。

しかしようやく安定し始めたグリエルの治世が、唐突に終わる時が来た。

王妃の故郷へ妻と幼い長女を迎えに行き、王都に帰った翌日のできごとだった。

翌朝、まだ夜も明けきらぬ王宮の庭で、血まみれになって死んでいるグリエルが発見されたのだ。不幸なことに、第一発見者は妻である王妃だった。身体の数か所を無残に抉られ絶命している夫の前に、彼女は顔色を真っ青にしながらも気丈に近衛士官に知らせに行き、その直後力尽きたように気を失った。

宮内は一時騒然となったが、王の乳母が凶器の小刀とともに自供したため、一応の解決を見た。

誰が指示したのかを突き止めるべきだという声も挙がったが、まだ混乱の残るエストレアにとって事態を早急に収束させることが第一だと判断した宰相の決断により、翌日の乳母の処刑を以て王殺害の真相は闇に葬られることになる。

グリエルの崩御後、第一王子のザフィエルが15歳で王位に着いたが、若くしての即位に初めは臣下に見下され苦しい時を過ごした。しかし、ザフィエルの生来の真面目で勤勉な性格、また有能な宰相の輔けもあり、20歳になるころには臣下国民からの尊敬と信頼を確固たるものに始めていった。

そのころから、王太后が体調を崩した。もともと得意でない政治ごとだったが、息子が地位を確立できるまではと無理をして補助を続けた結果だった。夫の死から溜まってきた心労も、ついに限界が来たのかも知れなかった。ザフィエルが不

調に気づき無理やり医師の診察を受けさせた時にはすでに遅く、過労で心身ともに弱り切っていた。

そしてさらに5年後、ついにその時が訪れる。

亡くなる直前にふと意識を取り戻した王太后は、震える声で三人の子供を枕元に呼ぶようと主治医に頼んだ。そうしてやってきた、長男であるザフィエル、次男セルフイエル、そして長女のヴァージニア。

王太后は最期に子供たちと水入らずの時を過ごしたいと、医師団に退室を命じ、主治医は何かあったらすぐに呼ぶようとザフィエルに頼むと、3人を残して部屋をあとにした。

王太后は床に伏したまま、目線だけで息子たちの顔を順々に見上げると、誇らしげに微笑んだ。

「……みな、大きくなりましたね……」

そうして話した。彼女の知る限りのことを。

先王を殺したのは彼の乳母ではなく、乳母の孫娘だということ。

その孫娘は生まれた直後に乳母に引き取られ、密かに暗殺者として先王に直々に訓練を受けていたこと。

刺した理由は定かではないけれど、当時はまだ幼く、今は国境の山奥の村で隠れて暮らしていること。

この10年ずっと彼女を見守るうちに、憎しみが薄れ代わりに憐憫の情が湧いてきたこと。

そうして王妃は3人の子供に遺言を遺した。

もしできるなら、彼女に会いなせ王を刺したのか理由を聞いてほしい。

そしてもし彼女にその意思があるなら、国外で新たな仕事と住居を与え、自由に生きられるように取り計らってやってほしいと。

その翌日の朝早く、王太后は静かに息を引き取った。

葬儀の済んだ夜、王太后の3人の子供たちは母の遺言について話し合った。しかし長女のヴァージニアは当時4歳であり、父の記憶は全くないといってもいい。

「お兄様方にお任せします」そう言っ、自室に戻っていった。残されたザファエルは、弟のセルフィエルに尋ねた。

「どうする？」

するとセルフィエルは笑顔で答えた。

自分が行きます、と。

その後、何か言いたそうな兄を残し、セフィエルは寝室に戻った。扉を閉め、寝台に腰掛ける。心臓が早鐘を打ち、胸に暗い興奮が渦まく。

父を殺した相手に、会えるかもしれない。

自分の手で、復讐が遂げられるかもしれない。

「……大丈夫です、母上。ちゃんと、父上を刺した理由は聞きます」

とりあえず、そのためには親しくならなければいけない。少し長い期間が必要になりそうだ。

明日からさっそく準備をしなければ。脳がめまぐるしく回転する。近づいて、親しくなつて、理由を聞き出したら。セルフィエルは、暗い瞳で、薄く笑った。

思い切り裏切つて、絶望させて、この手で必ず、殺してやる。

第5話 出会い

必要最低限の荷物を持ち、平民の衣服に着替えると、セルフィエルは騎馬で王宮をあとにした。この国で騎乗が許されるのは原則貴族か兵士のみだが、それでも大きな都市では珍しいというほどのこともないのでドーラムまでは馬でいくことにする。首都からシェットクライド州の州都までは大きな馬車道の隣に、騎乗者と歩行者用にそれぞれ細い道が併設されていた。

やや早足で馬を駆け、馬車で行く半分の時間でドーラムに着いたのは、正午を少し回ったあたりだった。

（ここがドーラムか……）

隣国レストランカと文化が混ざり合っているせいか、首都ベルファールとだいぶ雰囲気が違う。より庶民的というか、活気があるように思う。様々な種類の飲食店や服飾店が軒を連ね、道をゆく人々も肌の色はそう変わらないものの髪や目の色、顔立ちなどは多様である。

到着してまず馬を手放した。彼女が暮らしているというニース村を馬で出入りする人間はほぼ皆無に等しい。年に1、2回、国の役人が視察にくる程度である。

昼時ということで飲食店はどこも混み合っていた。セルフィエルはざっとあたりを見回し、ドーラムの郷土料理の店に入った。

「いらっしゃーい！」

給仕の娘の元気な声に迎えられ、騒がしい店内に入る。家族連れと仕事の休憩中と思われる男たちの集団が半々だ。厨房に近い一人掛けの席に座る。

50半ばほどの体格のいい店主が、調理の手を休めることなく注文を聞いてきた。

「いらつしゃい、お兄さん、初めてだね。何にする？」

「そうですね……おすすめは何ですか？ここでしか食べられないものが良いですね」

セルフイエルは王室師団長として、城下町もよく巡回する。そのため、10代前半からこういったところにはよく出入りしていた。

「そうだなあ、今日はケナガ鳥の卵が手に入ったんで、鶏肉とキノコと一緒に煮込んでシチューを作ったんだ。それはどうだい？ここでしか食べられないし、滅多にお目にかかれないよ」

「じゃあそれにします」

しばらくして料理が運ばれてくる。ケナガ鳥の卵は濃厚で、少し甘味があった。

「おいしいです。でも名物なのに滅多に食べられないんですか？」

「ああ、名物というか……知る人ぞ知る、という感じかな。ケナガ鳥はこの町の近くの谷にしか巣を作らないんだけど、谷底近くに作る癖があつてね、なかなか獲ることが難しいんだよ」

「ケナガ鳥の卵専門の狩人でもいるんですか？」

「うん、ケナガ鳥専門というわけではないんだけど、手に入りにくい薬草や山草、料理の材料全般の採集を生業にしている人ならいるよ。まだ若い娘なんだけどね」

規則正しくスプーンを動かしていた手が一瞬止まる。

「……へえ、すごいですね。どんな娘なんです？」

「いい子だよー、ここから少し離れた二ース村っていうところで暮らしてるんだけど、一日おきに町に降りてきて、注文しておいた食材を届けてくれるんだ。いつも笑顔でなあ、身寄りがないから、俺たちみんなの娘みたいな気がしてんだ」

「生まれた時からその村に住んでるんですか？」

「いや？確か…何年か前に一人で村長を訪ねてきたんだよ。何でも唯一の肉親が亡くなったらしくて、その人が村長の知り合いだったんだって。詳しくは聞いたことねえけど、あの危険な仕事を身一つでやってるからね……雑技団が狩猟の民出身なんじゃないかって、みんな何となく思ってるけど」

「……そうですか」

「お兄さん、学者さんの見習いか何かかい？いろんなところ回ってその土地の風土を研究しているとか？」

「あはは、そんなところです。ここには2カ月ほど滞在しようと思っています。ところで、その娘さんのいる村にはどう行けばいいか教えていただけますか？」

「え！会いに行くのかい？」

「ええ、何か興味が湧いてきました。一度会ってみたいです」

「そうか……じゃあ地図描いてやるよ。だけどな、お兄さん」

「はい？」

店主はセルフイエルを軽く睨む。

「……あの子に会っても、変な気起こすなよ。俺たちの大事な娘だからな」

セルフイエルは思わず目を見開いた。そして思った。

そんなこと、あるわけがない。

いや、別の意味での変な気ならあるが、店主の心配している意味とはほど遠い。

「大丈夫ですよー、俺、国にちゃんと婚約者がいますから」

都に最賈の娼婦は何人かいるから、嘘ではない。店主の顔に笑顔が戻る。

「なーんだ、悪かったな、変なこと言っちゃって。また食べにきてくれよ、安くするから」

「いいえー、ではご馳走さまでした」

金を払い、地図が走り書きされたメモを受け取って店を出る。その

あと少し町の中を歩き、ニース村に到着したのは4つ目の鐘がなった頃だった。

「こらー！もう、一緒に遊んでてって言うてるでしょ？」

村に入ったところで、小さな男の子たちを追いかけてまわしている20歳ほどの少女にぶつかりそうになる。

「うわ、……っと、すみません、弟たちしか見てなくて……」

そう言いながら顔を上げた少女の頬が真っ赤に染まる。そしてはつと我に返ると、「いけないいけない、ごめんなさい、ナイジェル……」と呟く。

「だいじょうぶ？」

「はい！すみません……。あの、町の方、ですか？村長にご用でしょうか？」

「いえ、諸国を旅して風土や文化を研究している学者で、セインといます」

昼に店の主人に言われたことをそのまま使い、偽名を名乗る。少女も慌てながら、メリーベルです、と名乗った。

「今日ドーラムに着いたばかりなんだけど、そこで興味深い娘さんの話を聞いて。なんでも大人でも躊躇うような危険な場所に入ったりして薬草や料理の材料を調達しているらしいんだけど、知ってるかな？」

メリーベルの顔がぱつと輝いた。

「アリーシャのことですね！幼馴染なんです。でも、今は町に出ていないんですけど……。もうすぐ帰ってくると思って、わたしここで待ってたんです……」

言いながら、メリーベルの視線が青年の背後に移動する

「あ、帰ってきた。アリーシャ！お客さんよ！」

メリーベルが手を振って叫んだ。セルフィエルが振り返る。

視線の先には、大きな籠を背負って山道をゆっくりと登ってくる、黒髪の少女の姿があった。

黒髪の少女もメリーベルに気が付き、手を振り返す。

そしてふと、セルフィエルの顔を見る。
心臓が一度、どくん、と脈打った。

2人の視線が交錯する。

その瞬間、少女の瞳がわずかに細められた気がしたのは、セルフィエルの気のせいだったのだろうか。

第6話 風土学者セイン

「……どうぞ」

アリーシャはセルフイエルとメリーベルのぶんのお茶を淹れると、それぞれの前に置いた。

「ありがとう、アリーシャ」

「すみません、突然押し掛けて」

恐縮するセルフイエルに、アリーシャはにっこりと微笑みかけた。

「いいんですよ、滅多にお客さんは来ませんし、嬉しいです。シェルドンさんのお料理、美味しかったですよ?」

「はい、とても。それに彼に釘を刺されてしまいました。アリーシヤさんに変な気を起さないように、と」

冗談めかしてそう言うと、アリーシャが苦笑しながら「すみません」と言った。

メリーベルが笑う。

「気にしない方がいいですよ、セインさま。あの人アリーシャに近づく若い男性みんなに言ってるから。アリーシャのこと大好きなんです」

「そうなんだ。大丈夫ですよ、って返しておいたけど、でも」

セルフイエルの紅茶色の瞳が、しっかりとアリーシャの鳶色の瞳を捕らえる。

「アリーシャさんがこんなに魅力的な女性だってわかっていたら、安易に返事しなかったのになあ」

その言葉の意味がわからず、アリーシャが固まっていると、横からメリーベルにつつかれた。

「やだ、アリーシャ、口説かれてる！きゃー！」

口説かれている……のだろうか。

町の薬屋や食堂の店主とばかり交流があり、あまり若い男性と話す機会がないアリーシャと違って、メリーベルは恋人であるナイジェルや彼の友人などとよく一緒にいるところを見かける。外見からは想像がし辛いが、アリーシャよりもだいぶ若い男性と会話をすることに慣れているのだろう。

「……それで、セインさま。わたしに何のご用でしょうか？」

気を取り直して尋ねる。

「うん。郷土料理屋さんのおじさんが、アリーシャさんのことをべた褒めでね。まだ若い娘さんなのに、大人でも躊躇うような危険な仕事を、今まで特に大きな事故もなく続けてるって。この地方の植物や動物、普段どんなものを食べているのかもわかるし、できればしばらく傍で見学させてもらえないかと思って」

「……、そうですね、でも朝がだいぶ早く家を出ますし、もし何かあったら申し訳な……」

やんわりと断りかけたアリーシャにかぶせて、メリーベルが顔を輝かせて言った。

「それはいい考えだわ！アリーシャ、1カ月後に町でミモザのお祭りがあるでしょう？外からの観光客でどっと人が増えるから、そのぶん材料の注文も増えて……毎年大変そうじゃない。セインさまに手伝っていただいたらどうかしら？」

「お祭りがあるの？それは楽しみだなあ。荷物持ちくらいしかできないけど、喜んでお手伝いさせていただきますよ」

アリーシャが何か言葉を発する前に、とんとん拍子に話がすすんでいく。

「あの、でも、わたしが町に行くのに同行するとなると一日おきになるので、セインさまがご自分の調査のために遠出ができなくなると思うんですが……」

セフィエルはアリーシャを見て、首を傾げた。

「一日おき？何のこと？」

「え？」

「もちろん明日から毎日来るつもりだよ」

「え……！？毎日……？」

「よかったわね、アリーシャ！あ、セインさまこの村の酒場の二階

が宿屋になっっていますから、そこに泊るといいと思います。わたしの祖父母がやっているの、少しお安くできますわ。さっそく今から一緒に行きましょう」

「助かるなあ、ありがとう、メリーベルさん」

「メリーで結構ですわ、セインさま。アリーシャのことも同様に……アリーシャさんだなんて、他人行儀ですわ」

正真正銘、今日会ったばかりの他人だよ、メリー。アリーシャが心中で突っ込み、胡乱な目でメリーベルを見つめると、意味ありげなウインクが返ってきた。

動かされた唇を読むと、「チャンスよ、頑張つて、アリーシャ！」。

一つ小さくため息を吐き、町から持ち帰ってきた少し大きめの麻袋を取り出した。

「メリー、これ、今日の朝頼まれたもの。これでよかったかな？」

メリーベルは歓声をあげて、袋の中身を確認した。

「うん、これ！本当にありがとう、アリーシャ！お金は足りた？」

「足りたよ。それからこれ、メリーにお土産」

そう言つて、白い小花の細工があしらわれた小さな髪留めを差し出す。

「え！わたしに？いいの？」

「うん、明日、ナイジェルとデートでしょう？この間メリーと一緒に町に降りたとき、気に入ったって言ってたから」

「嬉しい！アリーシャ、ありがとう！明日はこれをつけていくね！」

メリーベルは麻袋と髪留めを大事そうに抱えると、席を立った。

「じゃあ、セインさんを酒場に連れて行っておじいちゃんに紹介してくるね。ほんとにありがとう、アリーシャ。おやすみなさい」

「おやすみなさい。明日楽しんでね。セインさまも、長旅でお疲れでしょう。ゆっくり休んでくださいね」

「うん、ありがとう。ゆっくり休んで、明日の朝に備えるよ。それじゃあおやすみ、アリーシャ」

「……」

さらりとかわされた。そうして二人は、アリーシャの家をあとにし、酒場へと向かっていった。一人になってカップを片づけながら、アリーシャは呟く。

「メリー、あんなに滑らかに人と話せるんだなあ……」

自分にはできない芸当である。経験の差が主な理由だろうが。

「……しかしあんなに積極的に人の世話を焼きたがる子だとは知らなかった」

おそらく今までアリーシャの前では発揮できずにやきもきしていた

に違いない。

「……でも……」

さきほど出て行ったばかりの、背の高い青年を思い浮かべる。

うなじと耳、目を隠すくらいの赤味があった栗色の髪。

端正な顔、優しそうな紅茶色の目。やわらかな物腰。

自分がそういうことに疎くても、さぞ女性にもてるだろうと容易に予想がつく。

明日、本当に手伝いに来る気だろうか。

しばらく思案するが、それは今考えても仕方がない。

アリーシャはいつも通り道具の点検を終えると、夕食の準備に取り掛かった。

第7話 夜の山道と懷中時計

暗闇の中、アリーシャはふと目を覚ました。窓の外を見上げ、月の位置を確認する。ちょうどいい時間だ。体を起こし、身支度を整える。今日の目当てはいつもとほぼ変わらず、幾種類かの薬草、香料、そして見つけることができれば、シカイノシシを1頭。

アリーシャは考えながら家の外に出て、ぎょつとした。家の外壁に、風土学者のサインが寄りかかっていた。アリーシャを見てにっこりと笑う。

「おはよう」

「……おはようございます。ずいぶん早いですね、夜明けはまだだいぶ先ですよ」

「メリーにアリーシャさんがいつも何時頃出かけるのか聞いたんだ。おいて行かれないように少し早く来たんだけど、正解だった。山に行くんだよね？では、出発しようか」

そう言つて上機嫌に山の方に向かい出す。アリーシャはため息をついて、「本気だったんですね……」と呟きながら、自分も彼を追いかけて歩き始めた。

二人で真つ暗なケモノ道を早足でぎくぎくと歩く。セルフィエルはアリーシャのあとに続きながら、彼女の全身をしげしげと観察した。細身だが、しなやかで無駄のない動きから相当鍛えているのだろうと判断できる。アリーシャの長い髪を束ねた青い飾り紐が、背負った籠の上で動きに合わせて左右に揺れている。

「どのくらいまで深く入るの？」

アリーシャが前を向いたまま答える。

「今日はだいぶ歩きますよ。川の音が聞こえますか？」

耳を澄ますと、わずかに水の流れる音が聞こえる。

「あの川の源流に滝があるのですが、そこまで行きます」

「どのくらいかかる？」

「そうですね、夜明けまでには着くと思います」

「うわあ……まだ2時間くらいあるよね」

アリーシャが暗闇の中でわずかに微笑んだのが気配でわかった。

「都会の方は常に時を刻むものを携帯されていますね。ここでは鐘によって時間が管理されますから、その単位を聞くのは新鮮です。セインさまも持っていていらっしゃるのですか？」

セルフイエルは思わず舌打ちをしそうになった。迂闊だった。これからはもっと気をつけなければ。

「……うん、持っているよ。土地によって時の数え方がまちまちだね。違うところに行くたびに時間がわからないのは不便だから。見る？」

そう言いながらシャラリと音をたて、懐から細い鎖の付いた懐中時

計を取り出す。王都では常に時間に追われて生活しているため、いつも持っていないと落ち着かずここまで身に着けたままで来てしまった。

「よろしいのですか？」

アリーシャが振り返りながら受け取る。セルフィエルは小走りに彼女の横に並んだ。

その時だった。突然足元の地面がずるりと滑り、セルフィエルの体がぐらりと傾く。

その瞬間、強い力で二の腕を掴まれ、引き戻された。

足を踏み外したのだと気づいたのは、両の足が地面をしっかりと踏みしめてからだった。

「危ないですから、気をつけてください」

アリーシャがセルフィエルの腕から手を離しながら言う。

「暗くてわかりづらいですが、私たちの今歩いているこの細いケモノ道からずつと深く降りたところには、さっきの川が流れています。流れの速い溪流です。足を踏み外したら川まで転がり落ちて、まず助かりません。だから、私の歩いたあとを違わずに付いてきて下さい」

「うん……ごめん、ありがとう」

「いいえ、無事でよかったです」

アリーシャが笑ったのがぼんやりと見えた。

……それにしても。

再び彼女の後ろについて歩きながら、セルフィエルは思った。あの暗闇で、よくセルフィエルが足を滑らせたのがわかったものだ。

そして掴まれた腕の力。王室師団の部下を相手にしている気分になる。

(……まともにやり合ったら……果たして勝てるだろうか)

もつとも、正々堂々と勝負を挑む気などないが。

そう考えている間に、すでにアリーシャの興味は懐中時計に移っていた。歩く速度は緩めずに、そのまま興味深げにしげしげと眺め始める。

「へえ……数字が細かいんですね、この2本の針が指す位置で、時間を判断するのですか？もう1本、細い針が常に動いていますね。数字と数字の間の細かい線を、小刻みに……。これは何です？」

楽しそうに聞いてくるアリーシャに、セルフィエルはまた驚いた。アリーシャに追いつき、背後から文字盤を見つめる。兵士であるぶん常人よりは夜目が利くが、目を凝らしても数字と2本の針がぼんやりと見えるだけだった。

「よく見えるね？俺も暗闇には強い方だけど、そこまでは見えないよ」

「仕事柄よく夜道を歩きますから……。長年続けていれば誰でもこうなります」

アリーシャは、一種の職業病ですね、と言って笑った。

(……嘘だな。おそらく)

王宮にいた頃に身につけた能力だろう。身につけさせられた、言った方が正しいか。暗闇の中でもしっかりと利く夜目を持つことは、暗殺者の必須条件だ。

他愛ない会話を交わしながら、夜が明ける頃、2人は川の源にたどり着いた。

第8話 祖母の形見の飾り紐

森を抜けると、源流があつた。その流れが少し先の方で滝となり、遙か下の川に流れ落ちていた。絶え間なく水のぶつかり合う音が響いている。

滝の流れ落ちるところに生える薬草を採るためにアリーシャの選んだ方法は、自分の腰と太い木を長いロープで結び、滝壺に飛び込むことだった。アリーシャ曰く「ここは何度も挑戦したことがあるから大丈夫、帰りはきちんと岩壁をよじ登って帰ってきます」だそうです、その直後本当に飛び込んでしまった。

セルフィエルはさすがに付いていけないので、近くの木の根元に座り、おとなしくアリーシャの帰りを待つことにする。ニース村よりも標高が高いせいか、空気は澄んでひんやりとしていた。

遠くで鳥の鳴き声が聞こえる。よく晴れた青い空にゆったりと白い雲が流れていく。それをぼんやりと見つめながら、セルフィエルはぼつりと呟いた。

「……普通の娘だなあ……」

第一印象は、目鼻立ちは整っているがこれといって特徴のない、ただの村娘。年齢を尋ねたところあっさりと言えが返ってきた。今年で19歳になるという。父を殺した時にはたったの9歳だったというのか。

（そういえば俺、どんな女の子かなんて想像していなかったな）

その必要も感じていなかった。ただぼんやりと、残忍で救いようのない極悪人を思い浮かべていた。セルフィエルが同情する余地など

欠片もなく、躊躇うことなく命を奪えるような。

しかし当たり前だが、実際に会ったアリーシャは表情も感情もある一人の人間だった。生きるために仕事をし、周りの人間と助け合い、村の一員として、今を生きている。セルフイエルはその事実、今更ながら戸惑いを感じていた。

手のひらの上の青い髪紐を見つめる。滝壺に飛び込む前のアリーシャに、失くすといけないから持っていてくれと頼まれたものだ。聞けば亡くなった祖母の形見らしい。幾種類もの青色の糸で丁寧に織られた髪結び紐は、見る角度によって微妙に色を変える。昨日も身に付けていたところを見ると日常的に使われているはずなのに、それにしては傷みが少なく丁寧に手入れされていることが窺える。

（祖母……父上の乳母だった人か）

孫のアリーシャの代わりに王殺しの罪を被り、処刑された女性。

（……どんな気持ちだったのだろう）

憎悪の対象でしかなかった父の仇の心情に、初めて漠然とした興味が湧いた。

この10年、アリーシャはどんな思いで生きてきたのだろう。常に肌身離さず形見を身につけるほどに愛していた祖母。たった一人の肉親。

どんな気持ちだろう。

最愛の肉親に罪を押し付けて生き延びるというのは。

命を絶とうとは、考えなかったのだろうか。そうでなくても、悲し

みに暮れて、自分を責め続けるものではないのだろうか。
しかし、彼女は笑っていた。

常に穏やかな表情を浮かべ、メリーベルに礼を言われたときに見せた笑顔は、本当に幸せそうだった。

（なぜあんな風に笑えるのだろうか）

最愛の祖母を犠牲にして、10年という長い年月を隠れ住んで。

それとも、先王を殺したことも祖母が身代わりになって死んだことも彼女にとっては何でもないことで、暗殺者にならずに済んだ幸運な過去の出来事に過ぎないのだろうか。

だからあんなに屈託なく、幸せそうに笑えるのだろうか。

（……………）

正直、そうであってほしいと思った。もしそうなら、セフィエルは何の躊躇いもなく彼女を殺すことができる。

しかし、そうでないなら。

セフィエルは目をきつく閉じて、思考を中断した。

これ以上考える意味はない。

（……………いずれにしても）

彼女が父を殺した仇だという事実には違いはないのだから。

第9話 ローズマリーとセージのパン

「……インさま、セインさま。起きてください、お待たせしてしまつてすみません」

声が聞こえる。うつすらと瞼を開き、自分を見下ろす若い女の顔を見上げる。彼女が微笑んで再び口を開く。

「セインさま、旅の疲れが残っていたんですね。お休みになっていればよかったのに、無理して一緒にいらっしゃるから」

セイン？誰だ？

……ああ、俺のことか。

「……いや、大丈夫。目当ての薬草は見つかった？」

少々の気まずさを感じ、アリーシャから視線を外しながらセルフイエルは尋ねた。彼女の前で呑気にも眠りこけてしまうとは。セルフイエルは自分の神経の太さに少々嫌気がさした。

そんな彼の心中を知らないアリーシャは、得意気に薬草の入った籠を見せる。

「はい、見てください、たくさん採れましたよ！それと髪紐、どうもありがとうございます」

自分の右手を見ると、アリーシャの青い髪紐が握りしめられていた。

「ああ……うん。どういたしまして」

アリーシャは髪紐を受け取ると、何度か手櫛で髪をとかしたあと器用にまた一つに結ぶ。

「午後はシカイノシシ探しなので、お昼ご飯にしましょうか」

そう言つて、持ってきた布の包みを開く。ふわりといい匂いが漂った。

「ああ、よかった。ゼンマイの葉で包んできたおかげでまだ少し温かいですね」

「なんだい、これ？」

「小麦粉と水と塩を練って窯で焼いたものです。美味しいですよ」

「ところどころ見える黒い点は？」

「細かく刻んだローズマリーとセージの葉です」

「……」

パンならば王宮で毎日食べていたが、外見がこれとはだいぶ異なる。王宮のものはもっと全体的に均等に焼き目がついていたし、もう少ししっとりとしていたように思う。同じ製法でこうも違うものか。

「召し上がらないんですか？」

差し出された物体とにらめっこを続けるセルフィエルに、アリーシヤが声をかけた。

「いや……いただきます」

受け取り、一口かじる。小さな驚きとともに、香草の香りが口の中に広がった。

（なんだ、思ったよりも普通じゃないか）

もちろん味は王宮のものに劣るが、どことなく懐かしい味がした。

「美味しいよ」

素直に感想を告げると、アリーシャは嬉しそうに微笑んだ。

「それは良かったです」

そう言って自分も食べ始める。2人はしばらく無言で昼食を頼張り続けた。

「……セインさまは本当に祭りまでわたしの手伝いを？」

アリーシャがぽつりと尋ねる。

「うん、そのつもり」

「でも、あんまりおもしろくないと思いますよ。このとおり、やっていることは毎日山で薬草や山菜を採集して、町に出て売っているだけですからね。なんというか、1カ月も付き合っていたくのは申し訳ないというか、セインさまの研究のお役に立てるとは思えないのですが」

正論だった。セルフィエルは心の中で同意する。
確かに、この単調な行動に1カ月も付き合うのは時間の無駄だろう。
もしセルフィエルの目的が本当に、風土調査であったとしたら。し
かし生憎、そうではない。

（どうしようかな……）

うまい返しが見つからない。答えに困ったセルフィエルは、しばらく悩んだ。そして数秒後、おもむろに並んで座っていたアリーシャとの距離を少し詰めると、地面に置かれたアリーシャの手の甲に自分の手のひらをそつと重ねた。
アリーシャが驚いてセルフィエルを見つめる。

「セインさま？」

「ごめんね、君が迷惑だって感じているのは知っていたんだけど」
アリーシャが少し慌てたような素振りで、視線をそらす。

「……いえ、別に迷惑では……あの、手を」

アリーシャの言葉にかぶせるように、セルフィエルは声にほんの少し甘さを含ませて囁いた。

「でも、研究も大事だけど、それ以上にアリーシャ自身のことが気になる。何で君みたいに華奢で可愛い女の子がこんな危険な仕事をしているのか、あんな小屋で一人で暮らして寂しくないのか、とか」

困ったように俯いたアリーシャの顔を、セルフィエルは覗き込み、

続ける。

「昨日初めて会った時から、君のことばかり考えてる。……何でだろうね？」

「……さあ……わかりません……」

「一カ月後の祭りが終わるまで、でいいから。もっと君のことが知りたい。そしてできるなら、少しでも君の助けになりたい。できたら、嬉しい。……そばにいちや、だめかな？」

少し困ったように微笑んでみせた。そんなセルフイエルを、アリーシャは遠慮がちに見返す。鳶色の瞳が、わずかに潤んでいる。

(……なんとか誤魔化せた……かな?)

自分の紅茶色の瞳が、どんな表情の時どう見えるか、セルフイエルは熟知していた。幼いころからそういった感情の駆け引きには不向きな兄の代わりに、王宮内でも城下の町でも、自分の外見と話術を最大限に生かして情報収集や人脈作りをしてきた。その才能はとくに、女性相手には如何なく発揮されている。王都で名を馳せる百戦錬磨の高級娼婦や、自分を最大限に魅力的に見せる術を知っている上流貴族の令嬢を日常的に相手にしているセルフイエルにとって、アリーシャのような全く男慣れしていない一介の村娘をその気にさせることなど造作もないことだった。

しばらく見つめ合ったあと、アリーシャがふと目を伏せる。セルフイエルの手の下から自分の手を抜きとり、手早く荷物をまとめるとさっと立ち上がる。

「……そろそろ行きましようか。シカイノシシが出るのはもう少し

「下った辺りです」

背けた頬が少し赤く染まっている。セルフィエルも腰を上げ、満足そうに笑った。

「うん、行こうか」

第10話 相反する感情

朝登って来た道を、今度は下る。同じ道でも昼間の太陽の下なので、足を踏み外す心配もない。道幅が少し広くなってきたところで、セルフィエルはアリーシャの隣に並んだ。

「シカイノシシ、よく狩りに来るの？」

「そうですね、春の間は町の食堂のメインメニューになっていますよ。獐猛だけど脂がのっていて美味しいから人気があるんですね。だからよく頼まれます。いつもってわけではないんですが、春は繁殖期で比較的に見つけやすいんです。普通は地面についた足跡を辿って探すんですけど……」

だいが下ってきたのだろう。遠くで正午を知らせる鐘の音が聞こえた。

アリーシャが苦笑する。

「駄目ですね、今日は。シカイノシシはここまで人里近く下りてくることは滅多にありません。今まで足跡を見つけられなかったということは、今日はこの辺りにはいないということ……」

と、突然表情をこわばらせ、地面の一点をじっと見つめた。呆然と呟く。

「まさか……」

緊張した表情を浮かべ、忙しなく周囲の気配を探り始める。アリー

シヤの纏う雰囲気が一変した。

「……………？どうしたの？」

セルフィエルの問いに、早口で答える。

「シカイノシシです」

屈んで、地面を指差す。そこには薄らとイノシシの蹄のあとが見えた。

「こんなところまで下りてくることなんて普通はないんです。理由はわかりませんが……………早く見つけないと、村人が遭遇したら大変です」

アリーシャは立ち上がると、切羽詰まった面持ちでセルフィエルを見た。

「セインさま、この道は一本道です。できるだけ急いで山を下りて、村の人たちに避難するように伝えていただけませんか？」

「アリーシャはどうするの？」

「わたしはなるべく早くシカイノシシを探し出して仕留めます。お願いします、本当に危険なんです。繁殖期のシカイノシシは、常に興奮状態にあります。人間を見つけたら、見境なく襲いかかるのです。それで毎年何人が命を落としています。お願いします、一刻を争うんです。村の人たちに、知らせてくれませんか？」

「わかった、わかったけど……………一人で大丈夫なの？」

アリーシャはきょとんとして聞き返した。

「……わたしのことですか？」

「そう」

頷かれ、思わず微笑む。

「大丈夫ですよ、いつもやっていることですから。さ、行ってください」

「……わかった。気をつけてね」

セルフイエルは踵を返してアリーシャに背を向けると、小走りに道を下り始めた。走りながら考える。いくら慣れているといっても、わざわざアリーシャに依頼がくるほどだ。常人には捕獲できないほど危険なのだろう。

(……………)

アリーシャはもうシカイノシシを見つけただろうか。無事に仕留めることができただろうか。

脳裏に、さきほど間近で見た澄んだ鳶色の瞳が蘇る。

そのまま村に向かい続けるべきだとわかっていても、背後が気になる。

……村人に知らせた後、再び戻るべきだろうか。

そこまで考えてからふと我に返り、浮かんだ考えを打ち消す。

俺は何を考えている。彼女は父の仇だ。死んで喜びこそすれ、安否を気遣う理由はない。

（これは……あれだ、仇を討つ前に勝手に命を落とされては困るから）

だから、気になるのだ。胸のつかえに納得のいく理由を見つけれ、セルフィエルは安心する。

そうだ、万が一にも、今命を落とされては困る。まだ何も聞き出せていない。

走っている途中、何の気配も感じなかった。村はすぐそこだ。静かで、何かが起こったような騒ぎも聞こえない。足を止める。下ってきた道を振り返る。

（今ここで、死なれるわけにはいかない）

殺すなら、自分の手で。

セルフィエルは自身に言い聞かせるように心の中で呟くと、もう一度、元来た道を戻り始めた。

第11話 応急手当と戦利品

(……いた……)

先ほど別れた場所から少し外れた茂みの中で、小刀を構えてシカイノシシと向かい合っているアリーシャを見つけた。まだセルフィエルの存在には気が付いていないようだ。

(どうするかな……)

このまましばらく傍観するか、加勢するか。逡巡していると、その瞬間、シカイノシシがふと鼻をならし、セルフィエルの方を向いた。

(……！気づかれたか)

シカイノシシが猛然とセルフィエルに突進する。アリーシャも気づきすぐに地面を蹴ってあとを追うが、間に合わない。セルフィエルはとっさに右手を腰にやり、剣がないことに気づく。

(しまった、今は丸腰だった)

仕方がないので腰をかがめて重心を下げ、眼前に迫ったシカイノシシの鼻面を思い切り蹴り飛ばす。自身の勢いの反動で大きく飛ばされたシカイノシシを身軽に避けながら、アリーシャがセルフィエルに駆け寄った。

「大丈夫ですか!？」

「うん、平気。何か心配になって、戻ってきちゃった」

笑顔でそう言うセルフイエルを見て、アリーシャが軽く眉根を寄せ
る。

「シカイノシシを見つけられてたからよかったですけど……村に知
らせに行つて下さったんじゃないんですか」

「いや、近くまで下りたけど何も騒ぎになっていなかったみたいだ
し、君を一人残してきたのが気がかりで」

アリーシャがなおも何か言いかけた瞬間。

セルフイエルの目に、アリーシャの背後から飛びかかるつとするシ
カイノシシの姿が映った。

「……………っ！」

アリーシャも気配を察知し振り返りながら、左手が懐からすばやく
何かを取り出す。セルフイエルは咄嗟にアリーシャの腕を引き、自
分の胸に抱き込んだ。背中中に鋭い痛みが走る。

直後、アリーシャの右手が放った小刀がシカイノシシの眉間深くに
突き刺さり、どっという轟音を辺りに響かせ、シカイノシシは絶命
した。

「……………」

森に平和な静寂が戻る。しばし時間が停止したのち、アリーシャの
小さな声が沈黙を破った。

「……………あの、」

「あ、ごめん」

腕の中から聞こえた声に、セルフィエルは我に返りアリーシャを解放する。立ち上がる彼女を見上げながら尋ねる。

「だいじょうぶ？」

アリーシャは、セルフィエルを軽く睨みながら返した。

「大丈夫ですよ、セインさまが かばってくださいましたから」

「……怒ってる？」

アリーシャはしばらく無言でセルフィエルを見つめると、ため息を吐き、彼の背後に膝を付いた。

「……怒ってませんよ。一度引き受けて下さったことを反故にしたことは少し怒っていますけど。……それ以上に、あなたに怪我を負わせてしまった自分の不注意さに腹を立てているだけです。……すみません、八つ当たりですね。助けて下さって、ありがとうございます。……しました。服を脱いでください。背中の傷の手当てをしましょう」

背中に薬を塗られながら、セルフィエルが口を開く。

「……でも、正直俺が かばわなくても、何とかできたよね？」

背後から襲われたアリーシャの左手に、吹き筒が握られていたのが見えた。おそらく、毒を塗った矢が仕込まれていたのだろう。

「正直、何とかはできましたけど怪我はしたと思います。だから、

「こうして無傷でいられるのはセインさまのおかげです」

「……そう」

会話をしながらアリーシャは手際よく薬を塗り終え、包帯を巻き終わった。

「はい、おしまいです。応急手当ですから、あとでちゃんと町のお医者さんに診てもらってくださいね」

「傷の手当も手慣れているんだね」

ゆつくりと上着を羽織りながら言う。

「小さな怪我はよくあるんです。いちいち誰かにやってもらうより、自分でできるようになったほうが便利ですからね」

淡々と返すアリーシャを見つめ、セルフィエルは思った。

（全く何でもないことのように言うんだな）

セルフィエルが今まで出会ってきた女性たちは、少し指先を擦り剥いただけで大騒ぎだったというのに。

「……セインさま？痛みますか？」

彼の視線を疑問に思ったのか、アリーシャが心配そうに尋ねた。セルフィエルは笑みを浮かべて首を振る。

「いや、たいしたことないよ。ありがとう。さて、こいつを村まで

運ぼう。やっと荷物持ちとして役に立てる時が来た」

「いえ、わたしが運びます。傷に障りますから」

「うーん、じゃあ俺はその籠を持つよ。入っているのは薬草だけだし、そんなに重くないだろう。勝手にお願いして付いてきた拳句に邪魔だけして手ぶらで帰るんじゃ、何をしに来たかわからないからね。アリーシャに対して申し訳ないというより、俺が嫌なんだ。せめて、それだけでも持たせてくれないかな？」

アリーシャはしばらく考え、背中の籠を下ろした。

「わかりました。ただし背負わずに、前に抱えて歩けますか？」

「うん、了解」

そうして、一応その日の目的を全て果たしたアリーシャとセルフィエルは戦利品をそれぞれに抱え、ニース村へと戻った。

第12話 店主の誤解と背中への傷

次の日の朝は少し遅く、アリーシャは夜明けとともに起床した。今日は昨日の収穫を持って、町に下りる日である。身支度を整えて準備をしていると、ノックの音が聞こえた。

「はい」

返事をして扉を開けると、笑顔のセルフィエルが立っていた。

「おはよう」

…本当に毎日来るつもりなのだろうか。アリーシャはそう思いながらも笑顔で挨拶を返す。

「……おはようございます。背中への傷の具合はいかがですか？」

「うん、昨日お医者さんのところに行っただけ、君の処置のおかげで何もやることがないって言われた。アリーシャにやってもらったって言ったら納得していたよ。そんな深い傷ではなかったし、もう痛みもほとんどない。2、3日で治るらしいから。心配かけてごめんね」

アリーシャはほっとした表情を浮かべた。

「それは良かったです。……でも、これからも危険なことがあるかもしれません。山に行くのはやめて、町に下りるときだけ手伝って

いただくというのはどうでしょう?」

アリーシャの提案に、セルフィエルは首を振った。

「それじゃあ意味がないよ。植物がどこにどういう風に生えて、どんな動物が生息しているのか、きちんと自分の目で観察しないと。それに、俺は昨日アリーシャと一緒に山を歩いて楽しかったよ。だから、今日は町で何か武器を探すことにする。ちゃんと自分の身は自分で守れるようにね」

どうやら気が変わる様子はないらしい。アリーシャは諦めた。

「わかりました……。さて、ではそろそろ町へ出発しましょう。今日の昼の仕込みに間に合うように届けられないといけませんからね」

そして1時間後、2人はドームにいた。アリーシャは薬草の入った籠を、セルフィエルはシカイノシシをまるごと1頭抱えている。傷を心配するアリーシャを、大丈夫だから持たせてくれと説得した結果だった。

「たしか、セインさまは一昨日もいらしたんですね」

シエルダンの郷土料理の店の前で足をとめ、アリーシャはセルフィエルを振り返った。

「うん。ここに偶然寄らなかつたらアリーシャに会うこともできなかった。店主のおじさんには、本当に感謝してるよ」

「……………」

アリーシャはどう返事をするか迷い、結局無言で受け流した。店の扉を叩いて声をかける。

「おはようございます、シエルダンさん。シカイノシシー頭、お届けにあがりました」

しばらくすると階段を下りてくる大きな足音が聞こえ、扉が勢いよく開かれる。大柄な店主のシエルダンが、満面の笑みで姿を現した。

「おはよう、アリーシャ！ いやあ、今日は寝坊しちゃって……そろそろ仕込み始めねえと昼に間に合わねえ。おお、これはでかいのが獲れたなあ！ 仕留めるの苦労しただ……ろ……？」

シエルダンの視線が、シカイノシシからそれを抱えるセルフフィエルに移る。

「に……兄ちゃん。……確か2日前、店に来た……」

セルフフィエルはにつこりと笑って頷く。

「セインです、一昨日は美味しいシチューをご馳走様でした」

セルフフィエルの言葉を最後まで聞かず、シエルダンは顔を真っ赤にしてセルフフィエルに詰め寄った。

「おい、何であんたがアリーシャと一緒にいるんだ！」

「いや、ご主人に話を聞いたあと彼女に会いに行つて会話をするうちに、ますます興味が湧いてきまして。それで、一カ月後のお祭りの準備でこれから忙しくなるって聞いたものですから、それまでお

手伝いをすることにしたんです」

「一カ月！？そりゃあ、ちょっと長すぎやしないか。……まさか兄ちゃん、俺の忠告を無視してアリーシャに……いや、待て、お前言つてたよな、国に」

セルフィエルは慌ててシエルダンの口をふさぎ、小声で耳打ちする。

「嫌だな、決まってるじゃないですか、俺が興味を持ったのは、純粹に彼女の仕事とこの近くの山の動植物の生態系だけです。もちろん、故郷の婚約者一筋ですからね」

シエルダンもつられて囁き返す。

「……ほんとだろうな？」

「ええ、本当です。だいたい、疾しいところがあつたらこうして堂々と彼女と一緒にここに来られませんよ」

「そうか、それもそうだな」

「……あの、どうかしました？」

怪訝そうなアリーシャの声に、2人は同時に振り返る。

「いやいや、何でもねえよ。この兄ちゃん……セイン、だっけか？セインに、大事な材料をここまで運んでくれた礼を言っただけだ」

「……？そうですか。ではシエルダンさん、注文の品はこちらですよ」

ろしいですか？」

シエルダンはセルフィエルからシカイノシシを受け取ると、ぐるりと回して全身を確認する。

「ああ、こりゃあ上物だ。ありがとな、アリーシャ」

そう言って、シエルダンはアリーシャに50レニール紙幣を4枚手渡した。アリーシャはそれを大事そうに懷にしまう。

「いえ、こちらこそです。ではまた明後日伺いますが……何かご注文がありますか？」

シエルダンは少し考える素振りを見せてから答えた。

「そうだな、ケナガ鳥を5羽ほどお願いできるか？祭りに向けて新メニューを開発するんだ」

アリーシャは微笑んで頷く。

「いいですね、この時期、ケナガ鳥は雛の餌を探して活発に動きまですから、きつと身が締まっていて美味しいですよ」

「そうだな、期待できそうだ。じゃあ俺は、そろそろ仕込みに入る。また明後日だな。……セインも、山に入る時は気をつけるよ」

背中傷に気づかれていたらしい。セルフィエルは苦笑して頷いた。シエルダンの姿が店内に消える。

「では、行きましょうか。次は薬屋さんです」

「うん」

青い髪紐を靡かせて踵を返したアリーシャのあとに、セルフィエルも頷いて続いた。

第13話 武器屋のターニャ

薬局に行くと、薬屋の主人のジェイにもシエルダンと全く同じ反応をされた。

「だ……だんな！見ない顔だけど、アリーシャとどういう関係だい！？」

「はじめまして、風土学者のセインです。いえ、彼女の仕事に大変興味がありまして。祭りまで手伝いをする事になったんです」

「……本当に、それだけ？」

薬屋の主人の狐のように細い目がセルフィエルを凝視する。

「……本当に、それだけです」

セルフィエルも真面目な顔をして返す。

「……そうかい。ま、とりあえず信用するが……アリーシャ、何かされたら、すぐに俺たちに言っただよ」

何かって、何だ。

セルフィエルは思わず心中で突っ込んだ。アリーシャは主人に薬草を渡しながら苦笑する。

「あはは、そんなことあり得ませんから大丈夫ですよ。でも何か困ったら相談に来ますね」

……あり得ないのか。まあ、あり得ないけど。

薬屋の主人はそれでやっと安心したのか、アリーシャから薬草を受け取って代金を手渡す。

「いつでも訪ねてきていいからね。あ、それから今回は何も頼まなくてもよさそうだ。明後日町に来た時に寄ってくれるかい？その時には何か要用かもしれないから」

「もちろんですよ。では、また明後日」

これで、今日の仕事は終わりだ。身軽になった2人は、ときどき大通りに面した店に立ち寄りながら、目的なくドラムの町を歩き回った。道すがらアリーシャは頻繁に声をかけられ、その度に同じ説明を繰り返した。

「……すみません、みんな珍しいんです。わたしが若い男性と歩いていることなんて今まで滅多になかったので……」

「いや、むしろ嬉しいよ。俺は別に勘違いされたままでもいいんだけど、それだと君が困るからね。それにしても、アリーシャは人気者なんだなあ」

アリーシャは俯いて、幸せそうに笑った。

「……みんな、本当によくしてくれるんです。……子供の頃にここに来てからずっと。まるで本当の子供みたいに可愛がってくれて……本当に、感謝しています」

（……それは、この人たちは君の過去を知らないからだ）

胸に黒い感情が湧き上がりそうになり、咄嗟にセルフィエルは話題を変えた。

「……俺、武器屋に行きたいんだけど、案内してもらってもいいかな？」

「あ、そうでした、武器を見るんでしたね。どうぞ、こちらです」

ちょうど差し掛かった十字路を右に曲がると、アリーシャは他と比べて少し大きめで頑丈な造りの店の前で立ち止まった。

「ここです。……こんにちは、ターニヤ、久しぶり」

アリーシャが店に入りながら声をかける。セルフィエルもあとに続いて店内に足を踏み入れた。四方の壁はぐるりと様々な種類の武器に覆われ、真正面の長机には、アリーシャと同じ年頃と思われる少女が座っている。癖っ毛の赤毛を三編みにした少女の大きな緑色の瞳がアリーシャを捉えると、嬉しそうに見開かれた。

「アリーシャ！最近来ないから寂しかったよ！」

「ごめんねターニヤ、仕事が忙しくて。今日は、この人に武器を見繕って欲しいんだけど」

少女——ターニヤの視線が初めてセルフィエルに注がれる。興味深げにじろじろと眺めると、にやにやと笑みを浮かべながらアリーシャに聞いた。

「……誰この人。アリーシャの恋人？」

「違うよ。風土学者のセインさま。お祭りまで二ース村に滞在して、この辺りの自然や動物の生態を調べるんだって。わたしがミモザ祭前は忙しいって聞いて、手伝ってくれることになったんだ」

今日1日でさすがに慣れ、アリーシャも答えに淀みがない。

「へー、ふーん、そう」

にやにや笑いを一層深くしながら、ターニヤはセルフイエルに向き直る。

「はじめまして、セインさま。あたしはこの店主のターニヤ。アリーシャはああ言ってるけど、本当にそうなの？」

「うん、その通りだよ、今のところはね」

わざと含みを持たせて答える。アリーシャの困惑したような視線を感じた。

「あはは、そつかそつか、今のところは、か。良かったじゃんアリーシャ、見込みありそうだよー。あんたずつとそういう話とは無縁でさ、メリーと一緒に心配してたんだから。それがやっと」

「ターニヤ、違うってば。セインさまも、冗談言わないでください」

「冗談じゃないよー。俺はもっと親しくなれたらって本気で思ってるよ」

「セインさま……」

「はいはい、ごちそうさまー」

ターニヤは嬉しそうに笑うと、店内を見渡した。

「さて、セインさま。こういった用途で武器がいるの？」

「うん、実は昨日アリーシャと一緒に山に入った時に、シカイノシを相手にして怪我をしまつてね。今後はそんなことにならないよう、護身用に何か欲しいんだけど」

「なるほどね。確かに山に入るんじゃ丸腰じゃ危ないからね……アリーシャも一通り持つてるし。どんな種類の武器がいい？ 剣？ 弓？ 斧も最近在庫が充実してきたんだけど」

「そうだな…… 剣がいいかな」

セルフィエルは王室師団長として、剣も弓も国内では五指に入る腕前だ。しかし剣の方が若干弓よりも得意であり、そのため微妙な力加減が可能だった。つまり、少し護身術を習った程度、という演技を、弓よりも容易にできるのである。

「へえ…… ま、弓は獲物にあたらないやしょうがないし斧は重いからね。結局剣が一番かもね…… わかった、予算はどれくらい？」

セルフィエルが希望の額を提示すると、ターニヤは店の壁から何本かを見繕ってくる。その中から一番細身のものを選ぶ。

「まいどありー。それは見かけは細いけど丈夫だから、手入れをきちんとすれば長い間使えるよ。それじゃあセインさま、怪我には気をつけて。アリーシャもね。また顔出してね。何も買わなくていい

からさ」

「うん、ありがとう、ターニャ。またね」

武器屋をあとにする。アリーシャがセフィエルに微笑みかけた。

「これでもう怪我をする心配はありませんね。迷わず剣を選ばれましたけど、セインさま、剣術の経験がおりなのですか？」

「うん、故郷で少し、護身術程度だけどね。……そうだ、アリーシャ、今度時間のある時に、軽く打ち合ってくれないかな」

アリーシャが現在どのくらいの実力なのかを、見ておきたかった。アリーシャは一瞬答えに詰まったが、笑顔で了承した。

「……ええ、いいですよ。でも怪我が治ってから、ですからね。……セインさま、他に寄りたいところあります？もしないようでしたら、材料を買って帰って、昼食はわたしが何か作りますよ」

「本当？嬉しいなあ」

「何か食べたいものはありますか？」

「そうだな……アリーシャの得意料理は何？」

「得意……と言えるかはわかりませんが、よく作るのは、キノコと木の実のシチューですね」

「じゃあそれで」

「わかりました。……あ、でもその料理だとお肉がないですね。何かいいお肉があったら買っていきましょうか」

市場で買い物をもたせたらセルフィエルとアリーシャがニース村に帰りついたのは、正午をだいぶ回った頃だった。

第14話 優しいひと

「……ご馳走さま。美味しかったよ」

「それは良かったです。お粗末さまでした」

遅めの昼食を終えた2人は、向かい合って食後のお茶を飲んでいた。窓から午後の穏やかな光が差し込む。

アリーシャの青い髪紐が陽の光を受け、きらきらと輝く。それをぼんやりと見ながら、セルフィエルは口を開いた。

「その髪紐って、お祖母さんの形見なんだよね？」

「はい」

「ご両親は？」

「父親は知りません。母はわたしを産んですぐに亡くなったので、唯一の肉親の祖母のもとに預けられたんです」

「お祖母さんは、どんな人だった？」

アリーシャは懐かしそうに目を伏せた。

「……優しく、厳しい人でした。礼儀作法や言葉遣いに厳しくて……でも祖母のおかげで文字も計算もできるようになりましたし、こうして生活ができるので、とても感謝しています」

「……………亡くなった時は、悲しかったね」

「……………そうですね。でもあの時は……………涙はあまり出なくて。しばらく受け入れられなくて、呆然としている間に慌ただしく新しい生活が始まって、その中で徐々に実感が湧いてきて、それからずっと今までできたので、結局……………ちゃんと悲しむ機会を逃してしまいましたね」

寂しげに微笑むアリーシャを見つめながら、セルフィエルは無意識のうちに、ぽつんと呟いた。

「……………いつか、きちんと泣けるといいね」

アリーシャは少し驚いたようにセルフィエルを見つめ、わずかに微笑んだ。

「……………そうですね。……………セインさまは、優しい方ですね」

「え？」

突然の言葉に、セルフィエルは面食らう。

「会ったばかりの私のことを かばってくれたり、祖母のことで慰めてくれたり」

「いや……………」

何だか居心地が悪くなり、ふいと顔をそむける。

「……………そんなことないよ」

かばったことも、慰めの言葉も、本心からではない。全て復讐のための計算なのだから。

優しいという形容は、自分ともっとも遠いところにあるとセルフィエルは考えていた。

今だって、自分の勝手な感情のために、母の遺言に背こうとしている。

優しい人間というのは、兄のザフィエルのような者のことをいうのだと、セルフィエルはいつも思う。

常に自分のことは二の次に、国民を、臣下を、家族を優先するような男。

今回のような事態でさえ、自分の意見は言わず、黙ってセルフィエルの好きなようにさせてくれた。

王太后の遺言は、兄にとっても、大切な母の遺した言葉に違いないのに。

そんな兄が王位についた日から、セルフィエルは彼が心配だった。

兄に、王など務まるだろうか。辛い選択を迫られたとき、どちらも選べなくて潰されてしまったりしないだろうか。そうなる前に、俺は気が付いて支えてやることができるだろうか。

兄の味方は多くない。自分と、母と、あとはわずかな側近だけ。もし母に、自分に、何かあつたら。誰が、兄の本音を、弱音を、受け止めて包んでやれるのだろうか。

王などという職業は、父のような人間にこそふさわしいのに。

自分に絶対の自信を持ち、権力で他人をねじ伏せられる強さと情に流されずに何かを切り捨てることができる冷酷さを持つ、父のような人間にこそ。

だから5年前、ジャクリーンが嫁いできて、彼女の顔を一目見たとき、セルフィエルは心の底から安堵した。

……この人なら大丈夫だ。兄を任せられる。

そう無条件に思わせてくれるような、強くて優しい目をしていた。そうしてその印象通り、ジャクリーンは不器用で優しい兄に惹かれ、兄もまたジャクリーンを愛し、2人の間に娘も生まれた。

これからはもう、心配はいらない。俺がいなくても、兄の傍にはジャクリーンがいる。

セルフィエルは、自分の役目が終わったのを実感した。

そしてそう自覚することは同時に、今まで目を背けてきた自分自身と向き合う時がきたことを意味した。

自分は、兄とは正反対の人間だった。

裏表が激しく、計算高く、我儘で。

他人を信用せず、利用することだけを考えて。

おそらくそれは死ぬまで、変わることはなくて。

しかし、それでもいいと思っていた。

すぐに人を信用する純粋で温かい兄が、そのままでいられるように。そのためなら、ずっとこのままでよかった。

だけど、兄にはもうジャクリーンがいる。

自分は今も、必要ない。

そう気づいた時、押し寄せたのは孤独だった。虚無感と、どうしようもない焦燥感。

それらを打ち消すように毎晩部下とともに夜の町に出た。

飲んで、騒いで、女を抱けば、この感情は薄れると思ったのに。

孤独感と虚脱感は、日ごとに強くなる一方で。

心が深く、深く闇に沈んでいく。

俺は一生、このままなのか。

誰も愛せず、誰にも愛されないままで。

誰も信じられないままで。

ずっと独りで、生きていくのか。

ずっと。……………ずっと。

「いいえ」

きつぱりとした声に、セルフィエルは はつと顔を上げた。

いつの間にか、アリーシャが真剣な顔で自分を見つめている。

暗い思考から一瞬で引き戻された。

そして慌てた。……………まさか、声に出していた？

「ご自分でどう思われているかは知りませんが、少なくともわたしから見たセインさまは、とっても優しい方ですよ」

セルフィエルはほつとした。どうやら違うらしい。

そんなセルフィエルの思いには気付かず、アリーシャは目線を合わ

せたままゆつくりと続けた。

「……わたし、お祖母さまのこと、大好きだったんです。死んでしまつて……本当に悲しかったんですけど、村の人たちの前では泣けませんでした。みんな、よそ者のわたしにとってもよくしてくれましたから……心配をかけたくなかったです。だから誰にも話さず来ましたし、それで大丈夫だと思ってました。……でも今日、セインさまに聞いていただいて、慰めていただいたら、ずいぶん気持ちが楽になりました。ちょっと大袈裟かもしれませんが、……何だか救われたような気持ちになったんですよ。だから、自信を持つてください」

アリーシャは、太陽の光を身に受けながら優しく笑った。

その笑顔に、思わず見とれる。

全てを許して包み込むような、あたたかな微笑み。

「……………」

ふいに、胸が苦しくなる。

……なぜだか、涙が出そうになった。

第15話 暗闇の中の幸運

セルフィエルがニース村に滞在し始めてから、半月が経った。季節はすっかり春になり、時折汗ばむ陽気の日もあるほどだ。最近では世話になっている宿屋の下の居酒屋の手伝いもしており、メリーベルの祖父母はセルフィエル目当ての女性客が増えたことを喜んでいった。

ドールラムの町もニース村も、祭りの準備がだんだんと慌ただしくなってきた。

毎日アリーシャについて回っているおかげで村人とも町の住人ともすっかり打ち解け、セルフィエルが一人で出歩いていても声をかけられるようになり、とうとう先日、郷土料理屋のシエルダンが言い辛そうに切り出してきた。

「なあ、セイン、お前に婚約者がいるのはわかってるけどよ……アリーシャのこと、本当に何とも思ってたねえのか？ いや、俺も、初対面の時はあんなこと言っちゃったけど、あんた見かけによらず真面目で働き者だ。アリーシャに対する態度も紳士的だし、薬屋のジェイとも話してたんだよ、その……悪くないよなって……」

セルフィエルは驚いた。実は流れて婚約者がいると言ってしまったことを少々後悔していたのだ。

もしもシエルダンがアリーシャにそのことを話してしまったら、アリーシャセルフィエルに対して必要以上の好意を抱かなくなってしまう。要するに、人当たりがよく親切な旅の学者さん止まり。

それでは困るのだ。もっと強く、セルフィエルのことを信頼してくれなくては。

信じて、好意を寄せて……それが嘘だとわかった時、裏切られたと

絶望できるくらいには。

そしてそうするためには、アリーシャに異性として好かれることが最適だった。

見たところアリーシャに恋愛の経験はなさそうだ。初めて異性として好きになった男性が、実は自分に復讐をするために近づいたと知ったら……。その時彼女は、どんな顔をするだろう。

自分のことを評価してくれているらしい善良な店主には罪悪感を感じないでもなかったが、これは願ってもない機会だった。少し深刻そうな表情を作り、セルフイエルは口を開いた。

「そのことなんですけどね、シエルダンさん。俺に婚約者がいるってこと、薬屋のジェイさん以外誰かに話しましたか？」

シエルダンは戸惑いながら答える。

「いや、言っただけだ。……あ、女房には言ったかもな、あいつがアリーシャとあの学者さんいい感じよねって言うから、でもあいつ国に恋人がいるらしいぞって」

「言い辛いんですけど。……それ、嘘なんです」

シエルダンが目を剥いた。

「はあ！？う、嘘ってどういうことだよ！？」

「すみません、初めてお会いした時、シエルダンさんがあまりに俺を警戒していらっしやっただので、誤解されたら困るなあと、咄嗟に……すみません。本当は婚約者なんていないんです」

しばらく目を見開いて呆けていたシエルダンだったが、やがて我に返ると洪面を作り腕を組んだ。

「なんだよ……そうだったのか……。いや、まあ俺も悪かったが……と、待てよ。面倒だから、そう言っただろ？誤解されたくないかったら、そのままそういうことにしときゃあ良かったじゃねえか。何で今俺に話しちまったんだよ」

さて、どう答えよう。

セルフィエルは数秒思索した。いくらただ手伝いをしているだけだと言っても、大半の町の住人にはすでに半分恋人同士のように思われているのは明らかだった。それはいい、セルフィエルがそうなるように仕向けたのだから。

問題はアリーシャの気持ちだ。いくら周りの人間にセルフィエルの恋人扱いをされても、当のアリーシャだけはセルフィエルに対して半月前と距離感を変えていない。セルフィエルが少し恋愛めいた言葉をほのめかしても、にこにこ笑って流されてしまう。その躲し方の技術だけは、出会った当初に比べて上達しているようだ。おかげでセルフィエルにも未だにアリーシャの本心が掴めなかった。

祭りまであと半月しかない。祭りが過ぎれば、セルフィエルがアリーシャの傍にいる理由がなくなってしまう。もう一カ月は王宮に戻らなくてもいいが、いつ何が起こるか分からないのであまりゆとりもしてられない。できるだけ早く、アリーシャの気持ちを自分に向けた上で、過去を聞き出す必要があった。

(……………よし)

セルフィエルは自分一人でじっくりと攻めるよりも、周囲を味方につけて外堀から埋めることを選んだ。

「実は……最初は本当にそんなつもりはなかったんですが、だんだんとアリーシャのことが気になるようになってきまして」

「なんだと……？そ、それはつまり……」

身を乗り出してくるシエルダンに向かって、セルフィエルは照れ臭そうに告げた。

「はい、今は彼女に、一人の女性として好意を持っています」

シエルダンは数秒制止すると、小刻みに首を縦に振りながら言った。

「そ、そうか、そうか……その、もうアリーシャとは……」

「いえ、彼女が俺の気持ちを知っているかどうかも、俺のことをどう思っているかもわかりません。みんなに冷やかされても笑顔で否定していますし」

「そうか……まあ、なんだ、……応援するぞ。滅多な奴にアリーシヤはやれんと思っていたが……、うん、お前なら、安心だ」

シエルダンの笑顔に、セルフィエルの良心がちくりと痛んだ。そして自分にもまだそんな気持ちがあったことに、密かに驚いた。

半月ここで生活を送ってみてわかったが、この町の人々は、本当にいい人ばかりだった。アリーシャが感謝していた理由がよくわかる。国境という立地で人の出入りが激しいからだろうか、他の州に比べ、外から来た者に対してとても大らかだった。ずっと付き合っていくわけではないから親しくなる必要はない、という姿勢ではなく、いつか別れるからこそ、一つ一つの出会いを大切にしようとしているように見えた。

ふと、アリーシャの陽だまりのような笑顔が頭に浮かぶ。

ある日突然ふらりと現れたまったく身寄りのない少女。この町でなかったら、この村でなかったら、彼女はあそこまで真っ直ぐに育つことができただろうか。

ここに来る以前に彼女が生きていたであろう世界の暗さを考えると、それはとても困難なことのように思えた。暗い場所からさらに深い闇に堕ちることは簡単だが、その逆は比べようもないくらいに難しいことを、セルフィエルはよく知っている。そう考えると、今を穏やかに生きている彼女が奇跡のようだった。

「……アリーシャは……幸運だったな」

店を出て青い空を見上げながら、セルフィエルは小さく呟いた。

第16話 はじめての分担作業

「さて、今日はちょっと別行動しましょう」

その日もいつものようにセルフィエルはアリーシャと連れ立って山の奥深くまで来ていた。祭り前ということで、ここ数日は薬草よりも動物を狩る方が主になっている。

町にある飲食店の数々が、こぞって祭り当日のために仕込みを始めているためだ。数日をかけてスープや燻製を作り置きし、当日に備えるのである。

本日の消化分は、ケナガ鳥20羽、シカイノシシ2頭、タマゴタケ30本とクレソンを一籠分だ。クレソンはすでに採り終わり、タマゴダケは半分採り終わった。残り半分は時間に余裕があったら片づけることにして、先にケナガ鳥とシカイノシシ狩りに移ることにした。

半月経ち、アリーシャもだんだんとセルフィエルを頼るようになってきていた。

祭りの前でいつもより依頼が多いということもあったが、それ以上にセルフィエルの腕を信用したのだろう。護身術程度だと言っていた彼の剣の腕前は、アリーシャの予想を遥かに上回るものだった。

今は木の下の日陰で昼休憩中である。セルフィエルはすっかり慣れたアリーシャ手作りのパンを頬張りながら尋ねた。

「それは良いけど、なんで？」

今までにアリーシャが別々に仕事をしようと言い出したことはなく、セルフィエルは些か驚いた。アリーシャもパンを咀嚼し、飲み込ん

でから答える。

「単純に効率の問題です。今日は少し山菜採りに時間を取られましてからね……このまま2人一緒にシカイノシシとケナガ鳥を狩りにいくより、手分けをした方が早く終わります」

至極当然の提案に思えた。だがそれ以上にセルフィエルは意外な気持ちだった。アリーシャがセルフィエルに完全に仕事の一部を任せるのは初めてだったからだ。

(……だんだんと、信頼されてきているのかな)

演技とはいえ、自分の力が認められるのは純粹に心地よいものだ。

「……そう。で、どういう分担にするの？」

アリーシャはしばし考えてから答える。

「そうですね……セインさま、シカイノシシをお願いしますか？その間にわたしはケナガ鳥を狩りますから。今ちょうど正午を回ったあたりですから……セインさまがお持ちになっている懐中時計で、短針がちょうど2を指した頃に、ここに集合でどうでしょう」

確かにセルフィエルの武器を考えると、それが妥当だった。剣は接近戦専門だ。シカイノシシを狩ることは難しくはないが、空を予測不可能は動きと速さで飛びまわるケナガ鳥を30羽射落とすのは不可能だろう。

「でも、その時間は厳しくないか？俺は……たぶん間に合うと思うけど」

シカイノシシ狩りの時間配分は、その9割が見つけることに費やされる。倒すのは残りの1割だ。初日は要領が掴めずに下手を打ったが、コツがわかれば単純な動きしかないシカイノシシを狩るのは別段難しいことではなかった。

問題はアリーシャのケナガ鳥狩りである。ここ半月彼女の仕事をしていたが、アリーシャもまたセルフィエルと同じく接近戦を得意としているように見えた。

力はセルフィエルに劣るが、彼女にはそれを充分に補う瞬発力と跳躍力がある。

一度近づいたらそのまま微妙に力の向きや角度を変えながら戦い続けるセルフィエルとは対照的に、アリーシャの戦い方は相手の隙を見て一足飛びに近づき、一撃を与えまた跳んで後退し、それを繰り返して徐々に致命傷を与えていくというやり方だった。

もっとも大抵の場合は、一撃で仕留めることに成功していたが。

「そうですね……」

アリーシャが空を見上げ、思案する顔を見せた。

地上での接近戦に引き換え、弓矢を使う遠隔戦での能力は自分の方がやや上だと、セルフィエルは分析していた。

何度か2人で一緒に鳥を射落としたことがあったが、命中率はセルフィエルの方がわずかに上だ。もちろん半分以上を故意に外しているのが正確なところはわからないが、本気で競ったらセルフィエルが8割、アリーシャが6割といったところか。もっともこの数字は大空を縦横無尽に飛び回る標的を相手にした時の話で、おそらく純粹に動かない的を使い勝負をしたら、お互い外さずに決着がつかないに違いない。

その経験から、たった2時間で30羽を仕留めるのは難しいのではないかと思つての発言だった。

しばらく考える素振りを見せたあと、アリーシャはにつこりと微笑んでセルフィエルを見た。

「じゃあこうしましょう。セインさまの時計の短針が1を指す頃に一度ここに帰ってきていただけますか？その頃わたしがまだ半分も落とせていなかったら、手伝ってください。シカイノシシの方は…そうですね、正直なところ、セインさまなら1時間もあれば2頭狩ることも可能かもしれません。会ったときの成果によってその後の行動を決めましょう」

1時間もいらない、とセルフィエルは思った。おそらく本気を出せば、30分で済む。

まあ早く終われば適当に時間を潰したあと、アリーシャを探して合流すればいい。

「ん、了解。心配だけど、俺はお手伝いだしね、大人しく従うけど、気をつけてね」

心配そうな眼差しを向けてみる。

アリーシャは嬉しそうな笑みを返した。

「だいじょうぶですよ、セインさまがいなかったときは全部一人でやっていたんですから。気遣って下さってありがとうございます」

「うん……あ、アリーシャは時計持っていないけど時間わかるの？」

「太陽の位置でわかりますから、心配しないでください。じゃあ、1時間後にここで」

そう言うと、アリーシャはケナガ鳥の群集が現れる場所に向かって

森の中に消えていった。

第17話 不器用な気遣い

それからきっかり30分後、セルフィエルは2頭目のシカイノシシを仕留めるのに成功した。つがいらしく、2頭同じ場所にいたのが幸いだった。

（さて……）

獲物を担いでアリーシャと別れた場所に戻る。当然のことながら、彼女の姿はまだそこにはなかった。

数秒考え、アリーシャを手伝いにいくことにする。2頭のシカイノシシを地面に横たえ、鳥や獣が嫌う匂いの薬草をその上に散りばめてから、セルフィエルはケナガ鳥の群集地に向かった。

（……………あ、いた）

森の中から、茂みを抜けたところにある開けた岩場に、アリーシャが立っているのが見えた。何も遮るものがなく明るい彼女の立ち位置と違い、こちらは薄暗い森の中だ。彼女はまだこちらに気づいていないらしかった。普段の穏やかな笑みは消え、真剣な表情で上空を見上げている。

セルフィエルが声をかけようとしたその時、アリーシャが突然右手を大きく振りかぶった。

（ん？）

そのまま勢いをつけ、びゅっと何かを真上の空に放つ。数拍置いて、何かがぼたっと落ちてくるのを、アリーシャが受け止めるのが見えた。

「……………!!」

目を凝らすと、それは一羽のケナガ鳥だった。ぐったりはしているが、小さく痙攣しているのが見てとれることから、死んではいないようだ。

その後もアリーシャは、足元の小石を拾い、目にもとまらぬ速さで上空に投げ、そして落ちてくる獲物を受け止めるという動作を淡々と繰り返した。

その的中率、百発百中。一度として空振りはない。

そんな異様な光景に、セルフィエルは呼吸も忘れて見入った。

やがてアリーシャは、弓矢を一度も使わず瞬く間に30羽を落とすのに成功した。おそらく10分もかかっていない。彼女は一度太陽を見上げると、まだ集合まで時間があると判断したのだろう、獲物を籠に入れ、残りのタマゴダケを探しながら徐々にセルフィエルから離れて行った。

セルフィエルはしばし呆然としたのち、ようやく我に返る。

(……………何だ今の……………え、ということとは……………)

考えるまでもなく明らかだった。

つまり、セルフィエル同様、アリーシャも実力は見せず、手加減していたということだろう。

笑いがこみあげてくる。純粹に、可笑しかった。

どうやらとんでもない誤解をしていたらしい。

「……………っ、ははっ……………」

アリーシャが完全に姿を消したのを見届け、堪え切れずに声を漏らす。

遠隔戦では自分の方が上？

大空を予測不可能で飛び回る的本気で狙ったら、自分が8割、アリーシャが6割？

……とんでもなかった。

アリーシャの的中率は間違いなく10割だろう。弓を使っても小石を使っても、それはおそらく変わらない。それに比べ、セルフィエルは弓を使用して8割、小石だったら、たぶん5割に届かない。そして何よりも驚くべきなのは、その力加減だった。30羽のケナガ鳥、そのすべてを殺さず、気絶だけさせて落とすなど、人間技ではない。

そういえばアリーシャに、鳥を落とす時には極力殺さず捕らえるだけに、と言われていた。できるだけ鮮度を保つため、生け捕りにしたまま買い手に売り渡すのが理想らしい。

もつとも当のアリーシャが気絶させたり殺したりとむらがあつたのでセルフィエルもあまり気にしていなかったが、あれも十中八九、故意にやっていたのだろう。

（このぶんだと、剣の方も認識を改めないとなあ……）

なぜ隠したのか。アリーシャはセルフィエルの素性を知らない。とすれば、理由は単純かつ明白だ。

おそらく、気を遣ったのだ、セルフィエルに。

想像するに、アリーシャは護身術程度と言いつつ基礎がしっかりと

したセルフィエルを見て思ったのだろう。

自分の身を守るためだけにではなく、かなり真剣に剣術に取り組んでいるようだ。

そんな彼が、女のくせに剣術も弓術も彼より上な自分を見たらどう思うだろう。

きつと、気を悪くするに違いない。

せっかく手伝ってもらっているのに、不愉快な思いをさせるなんて申し訳ない。

もしかしたら、怒って手伝いをやめてしまつかもしれない。

そして、セルフィエルの自惚れでなければ。

彼女は彼がいなくなることが、寂しかったのだ。

それは、なんの計算もないただ純粋な、人間らしい気持ち。嫌われたくないから、気を遣う。ごく当たり前の機微。

ここ半月毎日一緒にいたせいで、あまり感情を面に出さないアリースアの心の動きが何となくわかるようになってきた。

思わず苦笑とともに呟く。

「……ばかだなあ……」

普段町や村の人々と接するのを見ても思うが、彼女は。

「……他人のこと、気にし過ぎなんだよなあ……」

その性格は多分、身寄りのない彼女がここで生きていくための処世術。

不思議なことに、全く腹は立たなかった。

それどころか、その不器用な気遣いが微笑ましくすら思えてくる。

「……はは、」

また笑い声が漏れた。そして心の中で、自分自身に両手を挙げた。

（……仕方ない、いいよ、認める）

いい子なのだ、あの娘は。

過去のことはさておき、今だけを見れば。

いや、何があったか知っているから、余計にか。

あんなことがあったにもかかわらず、彼女は暖かく、純粹で、そして要領が悪くて。

（戦闘能力は申し分なく、協調性も悪くない。……まったく）

こんな状況でなかったら、是非とも王室師団に欲しい人材だった。

第18話 曖昧な関係

「……で、アリーシャ。セインさまと、どこまでいつてるの?」

「え?」

意味深な笑みとともに唐突に投げられた問いにアリーシャは驚き、メリーベルとターニヤを交互に見返した。

今朝の狩りは予想以上に首尾よく進み、正午には村に帰り着いた。そしてアリーシャの家の前で待ち構えていたメリーベルの祖父に、セルフイエルはそのまま連行されてしまった。祭りが近付くにつれてドーラムに外からの観光客が増え、町の宿屋が満室になりとうとうニース村にも客が流れてきたらしい。

メリーベルの祖父母の経営する酒場も昼間から大繁盛で、給仕の人数が足りなくなったらしかった。

セルフイエルが村に溶け込み始めているのを見て、アリーシャも嬉しかった。だから微笑んで見送ると、彼らと入れ違うようにメリーベルが訪ねてきた。

「アリーシャ!お祖父ちゃんがセインさまを引っ張って酒場に行くのが見えたから、もう帰っていると思って来ちゃった。今日は早かったのね」

「こんにちは、メリーベル。うん、今朝は順調に終わったんだ。セインさまのおかげだよ」

メリーベルの家はニース村にあるが、他のほとんどの村人と同じく彼女も普段はドーラムの町の一画にあるブティックで働いていた。今日は祭り前最後の定休日らしい。

伝統をより大切にした王都の流行とは違い、様々な文化を取り入れ、斬新な造りの服飾が今のドーラムの流行りだ。

彼女の店は常にその最先端をいき、そのせいかメリーベルも常に自分の外見に気を配っていた

（今日も可愛い格好だなあ……）

にこにこ微笑みを浮かべるメリーベルを見ながらアリーシャは思った。

今日のメリーベルは、春らしい鮮やかな若草色のドレスに身を包んでいる。襟元からは華奢な鎖骨が覗き、その周りを白いレースが縁取っていた。

毎日同じ格好、しかもズボンの自分には、一生縁のない服装だろう。

「アリーシャ、今日はもう予定ないでしょう？お互いお祭り終わるまで忙しくて時間が合う時がないかもしれないから、今から町までお出かけしない？」

確かに、最後の息抜きの機会かもしれない。アリーシャはその言葉に笑顔で頷くと、メリーベルと共にドーラムへ向かう道を歩き始めた。

町に着き、まずターニヤのいる武器屋に寄った。店主の少女は大喜びで外出の誘いを承諾し、店の外に準備中の札を出した。いくら観光客が増えようと、武器屋にはたいして影響はないらしい。

それから3人は連れだって小さな喫茶店に入った。

昼時を少し過ぎていたので待たずに席に着くことができ、飲み物を

注文した直後、ターニヤとメリーベルが口をそろえて尋ねた。

「で……アリーシャ。セインさまと、どこまでいつてるの?」

「……どこまでって……」

アリーシャはここ半月の記憶を辿る。そして大真面目に答えた。

「……一番遠くまで行ったのは、たぶん初日かな。川の源流の滝壺まで行ったから。でも明後日は野生のブタやウサギを探して山の向こうまで行くから、もしかしたら最長記録に」

「違うわよ!!」

メリーベルが大声で遮った。怒りに満ちた表情に、アリーシャは思わず口をつぐんだ。

「なんなのアリーシャ、マジなの、マジで言ってるの?それともウケ狙い?」

「ご、ごめんメリー、落ち着いて」

わけもわからず謝るアリーシャを横目に、ターニヤが「いや、メリー、私たちが悪いわ。こんな聞き方でアリーシャに通じるわけなかったのよ」とメリーベルの肩を叩いて宥める。

「そ、そうね。今は私たちの落ち度よね。ごめんなさい、アリーシャ」

「う、ううん……気にしないで」

今度はいきなり謝られ、再び理解できないままアリーシャは答えた。
ターニヤが咳払いをする。

「じゃ、改めて。アリーシャ、セインさまと、もう2人でデートには出かけた？口付けは済ませたの？それとも、もう床を共にしたのかしら？」

あまりに直接的な表現に、今度はメリーベルが目を剥いた。

「タ、ターニヤ……」

さすがのアリーシャも何を問われたのかを理解する。数瞬絶句したのち、戸惑いながら口を開く。

「な、何もないよ。みんなが誤解してるのは知ってるけど……わたしとセインさまは恋人とか、そういう関係じゃないよ。ターニヤもメリーも、わたしがそう言われる度に否定してるの知ってるでしょう？」

「うん、知ってる。でも、セインさまは違うでしょ？」

メリーベルに即答され、アリーシャは何も言えなくなった。

第19話 幸せになる権利

「それは……」

「あのね、アリーシャ。百歩譲って恋人同士でないとしても、セインさまはどう見てもアリーシャのことが好きよ。そんなの、町中の人間が知ってるわ。アリーシャ、あなたの気持ちはどうなの？毎日毎日一緒にいて、優しくされて、何も感じないの？」

ターニヤに冷静に問い詰められ、アリーシャは困惑した表情を隠せなかった。

「……わたしは……」

黙ってしまったアリーシャに、ターニヤとメリーベルは顔を見合わせて溜息を吐いた。

「アリーシャ、別にあんたを苛めたいわけじゃないのよ。あたしたちみんな、あんたのことが好きだもの。でもね、あんなに毎日健気にあんたを手伝って、あからさまに好意を寄せながら報われないセインさまが不憫でしようがないのよね……」

憐憫の表情を浮かべるターニヤに苦笑しながら、メリーベルが言う。

「と、いうのは建前……まあ半分本音だけど。もう半分は、じれったいのよね、要するに。嫌いなら、きっぱりと手伝いを断る。それが親切だと思うわ。でも好きなら、思い切って付き合っちゃってもいいと思うの。彼、お祭りまでって言ってるけど、アリーシャがお願いしたらお祭りが終わっても留まってくれると思うわ。付き合っ

て、もし最終的に結婚ということになったら、彼の国に嫁げばいいことだし。寂しくなるけど、アリーシャの幸せのためだと思ったら、我慢できる」

ターニヤが真剣な表情で、メリーベルの言葉を引き継いだ。

「メリーの言う通りよ。アリーシャ……おせっかいかもしれないけど……。あんたにこんなにはつきり好意を示した男性って、今までいなかったじゃない。だから嬉しいのよ。アリーシャが、幸せになれるかもしれない機会が巡ってきて」

メリーベルがアリーシャの両手をぐつと握った。

「アリーシャがニース村と、この町を好きなのは知ってる。わたしたちもアリーシャのことが大好きよ。でもね、一生今みたいな危険な仕事を続けていくわけにはいかないでしょう？ やっぱいつかは好きな人を見つけて、結婚して、子供を産んで育てていくっていうのが、幸せな人生っていうんじゃないかと思うの。……愛する人とずっと一緒にいるって……すごく幸せなことなのよ」

メリーベルの言葉には感情がこもっていた。きっとナイジェルのことを思い浮かべているのだろう。

「セインさまは、アリーシャのことを大事にしてくれると思う。あの頑固な親爺どもの眼鏡にかなったのよ。……アリーシャは……セインさまのこと、どう思ってるの？」

しばらく黙ってから、アリーシャは口を開いた。

「……セインさまのことは……好きだよ。……正直、ただ人間

として好きなのか恋愛として好きなのかわからないけど……一緒にいると楽しいし、いなくなったら……きっと寂しい」

2人が身を乗り出す。

「じゃあ」

「でもね。……でもやっぱり、セインさまと、恋人同士には……なれない」

「何だよ!？」

「うーん……わたしが、セインさまに……ふさわしくないから、かな」

アリーシャは自分の過去を忘れたことなどない。

その罪の重さも。

2人の言葉はとても嬉しかったけれど、それでも自分には幸せになる資格などない。

……絶対に。

メリーベルが泣きそうな表情で言い募る。

「そんなの……そんなことないよ、何でそういう風に思うのか知らないけど、恋愛にふさわしいとかふさわしくないとかないよ。それは、アリーシャが決めることじゃない」

「うん、わたしもそう思うけど……でも、無理なものは、無理なんだよ」

3人の間に沈黙が落ちる。

重くなった雰囲気は誤魔化すように、アリーシャは明るく言った。

「でも、2人の気遣いは本当に、本当に嬉しかったんだよ。ありがとう。わたしも2人のこと、大好き。シエルダンさんも、ジェイさんも、ニース村の村長さんも、みんな大好きだよ。……セインさまには、次に会ったときにもうお手伝いはいいですって言うね。メリーのお祖父さんの酒場も忙しくなってきたし、いい機会……」

「わかったわ、アリーシャ」

アリーシャの言葉は、メリーベルによって唐突に遮られた。

「……メリー？」

「いいの、わたし、もう決めたから」

「……何を？」

「わたしにはアリーシャが何でそこまで意地になるのかわからない。好きなら好きでいいじゃない、何が問題だって言うの？」

「いや、意地ってどうか」

「だから、もうアリーシャの意見は聞かない。もしアリーシャがセインさまのこと嫌いなら、わたし反対するつもりだったの。でも好きなら、いいわよね」

「……何の話？」

困惑する2人に向かって、メリーベルはきっぱりと言いつつ放った。

「お祖父ちゃんの酒場の2階の宿屋ね、ミモザ祭の観光客で満室になりそうなの。だから、もしできればセインさまに出てもらって、アリーシャの家に滞在してもらえないかなって言ってたのよ。セインさまはアリーシャに聞いてみないとって難色を示してらしたけど、相思相愛なら問題ないわよね。今から村に帰って、お祖父ちゃんにいいって言ってくるわ」

「ちょ、ちょっと待ってよ、メリー！」

鼻息荒く席を立てて出口に向かい始めたメリーベルと慌てて彼女を追いかけたターニヤの背中を、アリーシャは呆然と見つめた。

第20話 寝台上的攻防

「……なんか、ごめんね」

「……いえ……、謝らないでください。わたしの方こそ、すみませ
ん」

その日の夜、セルフィエルはアリーシャの家にいた。

あのあと勢いのついたメリーベルが酒場に寄って事態が把握できな
いセルフィエルを引っ張り、2人を無理やりアリーシャの家に放り
込んだのだ。

去り際に残されたメリーベルからの言葉は、「セインさま、多少強
引でも構いません！アリーシャをモノにしちゃってください！」。
ちなみにアリーシャ宛には、「もう何も考えずにセインさまに任せ
なさい！」。

足音荒くメリーベルが去った後、2人の間に気まずい沈黙が下りた。

「あー……どうする？もしあれなら、俺は外で寝ても良いよ。近頃
暖かいしね、風邪は引かないと思う」

セルフィエルが自分の荷物を抱えたまま言う。

アリーシャは弾かれたように首を振る。

「だめです！そんなことはできません」

「でも……じゃあどうしようか」

アリーシャの家は非常に簡単な造りだ。家の中に仕切りはない。同

じ空間に台所、寝台、椅子とテーブルがある。
そして当然だが、予備の布団はない。

「……メリーは……どういっつもりで……家に寝具が一つしかないのを知っているはずなのに」

呟くアリーシャに、セルフィエルはやや呆れたように返した。

「そりゃあ……俺と君の関係を進展させるためでしょ。一線を越えさせるため」

あけすけで冷静な物言いに、アリーシャは戸惑いを通り越し逆に感心しながらセルフィエルを見返した。

「なんというか……落ち着いてますね、セインさま」

「まあね……俺の方は全く慌てる理由がないから。むしろ喜ぶべき事態？……でも」

荷物を床に置き、セルフィエルは楽しそうに笑いながらアリーシャに向かって一歩踏み出す。アリーシャは反射的に一歩後ずさる。

「でも、君にとっては困った状況かな？」

「……困るだなんて……ただ、恋仲でもない男女が同じ部屋で夜を過ごすのは、どうかと……。……2人で寝台を使う……のは、さすがに窮屈ですね。ではセインさま、寝台をお使いください。わたしはどこでも寝られますから」

考えながら言葉を紡ぐアリーシャをしばらく見つめ、セルフィエル

はため息を吐いた。
前髪を掻き上げながら言う。

「……アリーシャはさ、ちょっとずれてるよね。同じ部屋で過ごすなら、一緒に寝台で寝ても別々に寝ても変わらないって？……こんなことになっても、君が心配しているのは自分の身じゃない。この村とドールラムでの俺の評判だ。正確には君と一つ屋根の下で寝て、俺がみんなに噂されて嫌な思いをするんじゃないか、ってことでしょ。君にとって問題なのは同室で一晩過ごすことで、実際に何が起こるかじゃない」

「……そうなのだろうか。アリーシャは思案する。
きちんと論理的に考えていなかったからわからないが、言われてみればそんな気もする。」

少なくとも自分の身を案じているのではないというのは当たっている。たぶん彼の言うとおりなのだろう。

大体にしてアリーシャは、この村に来てから一度も、自分の身に何かが起こるのを心配する、という事態に陥ったことがなかった。

「……自分でもよくわからない、って顔だね。でも俺は間違っていないと思うよ。自慢じゃないけど この半月で、君のことはずいぶん理解できるようになったつもりだ」

「……」

セルフィエルは微笑んだまま、無造作にアリーシャに近づいていく。それに押されるように、彼の目を見つめたままアリーシャは後退を続け、やがて足が寝台に当たり、ぽすっと腰掛けた。

セルフィエルはアリーシャの目の前に立つと、腰をかがめてアリーシャの顔を覗き込む。そして、口角を上げたまま囁いた。

「……教えてあげる。普通、こういう場面で女の子が一番に心配すべきことはね、目の前の男に何かされるかもってことだよ。つまり、自分の身体の心配ってこと」

「普通……ですか」

「そう」

セルフィエルは目線を合わせたまま、アリーシャの横に腰を下ろした。アリーシャは自分をじっと見つめる熱のこもった瞳に耐えきれなくなり、視線を外す。そして呟く。

「わかりません……普通、は……。それに今までは……」

「困ったことなんかない？自分で何とかしてきた？……正直、今俺に押さえつけられても、振り払えると思ってるでしょ」

「……はい」

そんなことは想像すらしなかったが、もし実際起こったとしたら可能だろう。それは自信ではなく確信だった。アリーシャにとっては事実。それ以上でもそれ以下でもない。

「そう、じゃあ試してみる？」

「セ、セインさま！？」

ふいに、セルフィエルの両腕がアリーシャの背中に回る。そのままきつく抱きしめられた。頬が彼の胸に密着し、規則正しい心音が聞

こえる。顔がかあつと熱くなるのがわかった。

「セ……セインさま、あの、離してください……」

「いいから。押しのけられるかどうか、やってみて。……全力で、だよ。手加減なし」

「……っ」

耳元で囁かれ、息遣いを直に感じる。くすぐったくて、アリーシャは思わず首をすくめた。頭が混乱する。

「どうしたの？ほら、早く」

わずかに腕の力が増し、密着度がさらに上がる。それに比例し、アリーシャの心拍数も上がる。

「……っ！」

身体にうまく力が入らない。それでも懸命にセルフィエルの胸と自分の身体に挟まれた腕に力をこめ、なんとか隙間を空けようとする。そして愕然とした。

（……うそ……びくもしない……）

様々な角度を試すが、微動だにしない。

（……どうしよう……関節を外せば、抜けられるかも……）

思いつくが、実行するのは躊躇する。……それはたぶん、『普通』

ではない。

アリーシャは焦った。焦るとますます混乱する。するとますます焦る。悪循環だ。

セルフィエルがさらに小声で追い打ちをかける。

「……まさかこれが本気？……俺はまだまだ余裕なんだけど。ねえ、このまま押し倒されて純粋に力勝負になったら、敵わないのがわかる？男の腕力を見縊ったら駄目だよ、そもそも造りが違うんだから今俺がその気になったら、君がいくら本気で抵抗しても泣き叫んでも関係なく、最後までやられちゃうよ。……それがわからないほど、……相手との力量差を正確に計れないほど、君は未熟じゃないよね？」

「……っ……は……はい……っ」

やっとの思いで返事をする、セルフィエルが微笑むのがわかった。

「……いい子だね。じゃあ、約束して。こういう状況になりそうになったら、身体を押さえられる前に逃げることに……。わかった？」

故意なのか偶然なのか、そう囁くセルフィエルの唇がアリーシャの耳たぶを掠める。思わず「ひゃっ……」という声が漏れた。

一瞬、セルフィエルの腕の力が緩むのを感じた。その瞬間を逃さずに彼の腕から逃れ、ぱっと離れる。そしてその勢いに任せ、動転した頭で一気に喋る。

「わっ……わかりました……！わかりましたから……！わたしが悪かったです、すみませんでした……っ」

なぜ自分は謝っているのだろう。頭の片隅で思うが、今はどうでも

いい。

セルフィエルはその答えを聞くと、満足そうに笑って立ち上がった。

「うん。わかってくれたなら良かった。さて、じゃあ俺は行くよ」

再び荷物を担ぐと、出口に向かい始める。

「えっ……ど、どこへですか……？」

宿屋へは戻れないはずだ。セルフィエルは扉を開けながら答える。

「今日は村長の家の馬小屋で寝るよ。それで、明日になったら宿屋で余った布団を借りてくる。そうしたら、ここにお世話になってもいいかな？」

「もっ……もちろんです……！」

小刻みに首を縦に振るアリーシャを見て、セルフィエルはふっと笑った。

「もう、同じ寝台でもいいから一緒に寝ましょう、とかは言わないんだね。学んでくれたみたいで何より」

アリーシャは再び絶句して赤面する。

「じゃ、おやすみ」

固まったままのアリーシャを残し、セルフィエルは静かに扉を閉めた。

(……面白い子だなあ)

村長の家に向かいながら考える。

思わず苛めてしまった。

笑みが漏れるが、それはすぐに哀しみを含んだ微笑に変わる。
そして思う。

(……………殺すのは……………可哀想だな……………)

自然にそう思えた。

こんな風に出会っていなかったら、何かが変わっていただろうか。
空を見上げると、王都とは比べものにならない数の星が瞬いていた。

第21話 不測の事態

「……………ねえ」

ぞくぞく。

「……………ねえ、アリーシャ」

ぞくぞくぞく。

「……………何で無視するの」

ざく。足音が止まる。セルフィエルの前方を無言で歩いていたアリーシャがゆっくりと振り返り、にっこりと笑った。

「何でしょうか、セインさま」

2人の手には今日の収穫、ブタとウサギが抱えられている。今は山1つ越えた狩り場から村へと戻る途中である。時刻はそろそろ空が赤く染まり始める頃だ。

セルフィエルが小走りにアリーシャに追いつき、横に並んだ。

「あのさ、一昨日のことを怒ってるんなら、悪かったから。アリーシャがあんまり警戒心がないもんだから、つい心配になって」

「それはそれは、実践を交えたわかりやすいご講義、どうもありがとうございました」

声に皮肉がこもっている。

「いや、俺もやり過ぎた……とはあんまり思っていないけど、まあでも怖がらせちゃったことは謝るよ。ごめんね」

全く誠意が感じられない謝罪に、アリーシャが思わず声を荒げる、

「怖がつてなどいけません！……ただ、……その、口で説明して下さいでしょう。わざわざあんなことをしなくても……」

口籠るアリーシャに、セルフィエルが淡々と返す。

「うーん……でも、ただ力じゃ敵わないんだから気をつけろって言うっても、アリーシャは聞かなかったと思うよ。心の中では自分が負けるわけないって思いながら、笑顔で はいって返事をして終わり。それじゃ何にも変わらないでしょ」

アリーシャは思わずぐつと言葉に詰まった。……悔しいが、その通りだっただろう。

見透かされていることが不本意で、その表情を隠すように彼に背を向け また歩き始めようとするが、小さく聞こえた声に再び狼狽する。

「……だけど、アリーシャも悪いよ。反応があんまり可愛いからつい いじめすぎて、危うく止められなくなるところだった」

「……っ……そういうこと、言わないでください……っ」

赤面して睨みつけければ、予想外に真剣な瞳と目が合い、どきりとす

る。思わずふいと視線をそらし、一つ深呼吸をした。

昨夜は宿屋から布団を1組借りてきて、セルフイエルは床の上で、アリーシャは寝台で眠った。彼は一昨日の夜がなかったかのようにあっさりと寝入ってしまったが、アリーシャは彼が気になってなかなか寝付けなかった。

……どうも一昨日の夜から調子がおかしい、とアリーシャは思う。彼の顔をまともに見られない。ちよつとしたことで心拍数が上がる。こんなに自分の感情の制御に苦労するのは初めてだった。何とか切れ切れに抗議する。

「……セインさまは……慣れていらっしやるのかもしれませんが……。……こういうの、やめてください……」

「なんで？」

余裕に満ちた楽しそうな声が、真正面から聞こえる。

……いちいち間近で顔を覗き込むのは、この人の癖なのだろうか。

(……なんか……ずるい……)

アリーシャはだんだんと腹が立ってきた。悔しい。なぜ自分はこんなに動揺しているのだろう。

ここ数年、たいして怒りを覚えることもなく穏やかな日々を過ごしてきたアリーシャは、自分があまり感情の起伏がない人間だと思ってきたし、そんな自分に満足していた。

しかしそれは間違いだったらしい。

メリーベルとターニヤは彼が本気でアリーシャのことを好きなのだと言った。だが、少なくとも本気で好意を持っている相手にこんな意地悪はしないと思う。

黙り込んだアリーシャを見下ろしながら、セルフィエルは顔がにやけるのを抑えられなかった。

まず間違いなく、アリーシャは自分を意識している。

今までも嫌われてはいないと自負していたが、決定的だったのは2日前の夜。

ある意味賭けに近い強引な手段だったが、予想以上の成果を挙げることが出来た。

あの夜から、アリーシャの態度が目に見えて変化した。

まったく、機会を作ってくれたアリーシャの友人と酒場の主人には感謝しなければならない。

さらに、セルフィエルは思いがけず気持ちが高揚するのを感じていた。わずかだがこの状況を楽しんでいる自分がいる。

予想外だったが納得はできた。様々な女性の性格や経験を考慮してやり方に変化を加え彼女たちの心を陥落させていく過程には、どんな状況であれ快感を覚える。

とりわけアリーシャは、セルフィエルの嗜虐心を煽るのが上手かった。

「……アリーシャ？……どうして？」

俯いた彼女の反応に気を良くし、さらに顔を近づける。

しかし、その直後に真っ赤な顔で上目遣いにきつと睨んできたアリーシャを目にした瞬間、セルフィエルの顔から余裕の笑みが消えた。

「……かつ……勘違い、してしまいます……から……」

「……………」

顔を上げた勢いに頼って始まった発言は、だんだんと尻すぼみになる。それに従って、せっかく上げた視線もだんだんと下がっていく。それをセルフイエルは真顔で見つめた。

いつもの平然とした彼女の顔からは想像もつかない、紅潮した頬、情けなく下がった眉。

心なしか、瞳も自信なさげに潤んでいるように見える。

(……………あれ?)

彼女の動揺が移ったのだろうか。

セルフイエルの心臓の鼓動が、わずかに速まる。

そんなセルフイエルの様子には気付かずに、俯いたアリーシャは一度目を閉じ、深呼吸をした。

彼女の肩から、ふっと力が抜ける。

そして諦めたように一つ溜息を吐くと、ゆっくりと彼を見上げ、照れ臭そうに微笑んだ。

「…………勘違いして…………本気にしちゃいますから。…………だから、あんまりからかわないでください」

「……………っ」

どくん、と心臓が大きく一つ脈打った。

決まりが悪そうに苦笑する彼女の顔から、目が離せない。

黙ったまま静止するセルフイエルとは対照的に、アリーシャは何かがふっ切れた様子で空を振り仰いだ。

「あー、なんか……お腹空きましたね。早く帰りましょう。急がないと、日が暮れてしまいますよ」

セルフィエルを置いて再びざくざくと歩き始める。

その後ろ姿を見ながら、セルフィエルはしばらく動くことができなかった。

第22話 焦りと苛立ち、それから

「では、おやすみなさい」

「…………おやすみ」

アリーシャが枕元のランプの灯を吹き消す。そのまま寝台に横たわり、セルフィエルに背を向け、動かなくなった。

「……………」

寝入ったアリーシャの背中を、セルフィエルは暗闇でじつと見つめる。

アリーシャの家で夜を過ごすようになって2週間が経ち、ミモザ祭りはいよいよ3日後に迫っていた。

最初はセルフィエルが気になってうまく眠れない様子のアリーシャだったが、初日以来家の中で必要以上に接近してこないセルフィエルに安心した様子で、ここ数日は床に入ると同時に眠りについていくようだった。

同じ部屋で眠るようになって気付いたが、一度寝入ってしまったらアリーシャは目覚めるべき時間まで起きない。もちろんはつきりと物音がすれば目を覚ますが、セルフィエルが寝返りを打ったりそつと水を飲みますに台所に立つくらいでは熟睡したままだ。

長い間山の獣のみを相手にしてきたせいで人間に対する感覚が鈍ったのかとも思ったが、どうやらそうではないらしい。

ある夜、彼らが床に就いた後に来客があった。

明かりを消してほどなく経った頃、アリーシャが音もなく身を起きました。

まだ眠っていなかったセルフィエルが驚き「どうしたの？」と声をかけると、「お客さんです」と返された。しかしセルフィエルには何も聞こえない。「気のせいじゃない？」と言おうと口を開いた瞬間ノックの音が聞こえ、扉を開けると申し訳なさそうな顔で村長が立っていた。次の日の昼までに必要な山菜を頼むのを忘れたシエルダンからの伝言を持ってきたらしい。

「なんでわかったの？俺何にも聞こえなかったんだけど」

村長を見送った後、そう聞いたセルフィエルにアリーシャは扉を閉めながら返した。

「坂を上ってくる足音が聞こえましたから」

「でも……夜中、俺がちょっと物音立てても起きないよね？」

眠っているふりをしているとは思えなかった。
寝台に戻りながら、アリーシャが答える。

「セインさまのことは、家の一部として認識していますから。多少身動きされても大丈夫ですから、気を遣わないでください」

その身体はすでに布団に入っており、寝直す準備は万端だ。

「……家に近づいてくる村長の足音には気付いて目を覚ますのに、家の中で俺が立てる音では起きないの？」

自分の発言の矛盾がわかっているのだろうか。

訝しげなセルフィエルの視線に、アリーシャがやや面倒そうに眉をひそめる。こころなしに 半分閉じられた瞼が眠たそうだ。

「……ですから、セインさまの気配はこの部屋の一部として把握しているのです、セインさまがわたしに害意や敵意を抱かない限り目を覚ますことはありません。存在は知覚していますが、覚醒することはありません。でもそれ以外の生き物の気配には、それがどんな種類のものであっても気付いて、目が覚めます」

早口に言い終わると、セルフィエルの返事を待つように じっと見つめる。

「……………わかった、けど」

黙り込んだセルフィエルに一つ頷くと、アリーシャは彼に背を向けて さつさと布団に潜り込んだ。

「それでは改めて、おやすみなさい。セインさま、よい夢を」

「……………うん、アリーシャも」

セルフィエルが呟いた時には、彼女はすでに深い眠りに就いていた。

（……………なんか、アリーシャ……………雰囲気、変わった？）

その時の彼女の言動を思い出しながら、セルフィエルは考える。

（……………寝惚けていたのだろうか？）

考え難いが、そうかもしれない。

今までのアリーシャなら、少なくともああいう発言は控えたはずだ。…… ああいった、常人の範疇を超えた能力をほのめかすような発言は。

寝息は聞こえないが、向こうをむいたアリーシャの背中がわずかに規則正しく上下するのが見える。

2週間前のあの日、夕日に照らされたアリーシャに思わず魅入ってしまったあの時から、アリーシャのセルフイエルに対する態度が再び変化した。

ただし、以前とは違った方向に。

素を出すようになったというか、良い言い方をすれば取り繕わなくなり、悪い言い方をすれば雑になった。

それまでは常に穏やかな笑みを浮かべて柔らかな態度を崩さなかったが、どこことなく肩の力が抜け、自然体で過ごしているように見える。

(……いいこと、なんだろうか……)

彼女の中でどのような心境の変化があったのかはわからない。

しかし今は、はっきり言って彼女よりも自分の感情の移り変わりにセルフイエルは戸惑っていた。

2週間前のあの日から、彼女に会う度に胸中に嫌な感覚がくすぶるようになったからだ。

最初は憎悪が増幅されただけかと思った。彼女の笑顔を見て、過去を忘れ平和な暮らしの中で笑っている彼女に対する嫌悪感だと認識した。

だが、それだけでは説明がつかないことにすぐに気が付いた。彼女の笑った顔を見る度、一瞬胸が暖かいもので満たされる。しかしその直後に襲ってくる、手足が冷えるような感覚。

ひんやりとした、吐き気にも似た感情。苛立ち。ちぐはぐな感じ。脳の命令が身体にうまく伝わっていないような。歩き出そうとする足を踏み止まらせるために力を込め、結局がんじがらめになって動けなくなっているような。様々な感情が混じり合って、自分にもよくわからない。

しかし、一番強いのは焦燥感だった。渴くような焦り。混沌としている中で、しかし これだけは はっきりしていた。

このままでは、まずい。この状態を長く続かせることは、非常に良くない。

(……明日)

ミモザ祭りまであと3日。

自分の感情がうまく説明できず、ずるずるとここまで来てしまったが、もう時間がない。

(……明日、アリーシャに手合わせを申し込もう)

生死をかけて、本気で勝負をしよう。

そうすれば、彼女に対する自分のこの曖昧な気持ちは何なのか、答えが見つかる気がした。

第23話 手加減なしの、真剣勝負

次の日。

2人はいつも通り朝早く起き、身支度を整え、獲物を担いでドーラムの町に出かけた。

通りを歩く人の数が見えて多い。人数に比例し、町にあふれる熱気と活気も増していた。

何軒か飲食店や薬屋を回り、身軽になっていく。最後の1軒に立ち寄ったあと、アリーシャが笑顔でセルフィエルを見上げた。

「セインさま、とりあえず今日の仕事は終わりですけど、このあと村の酒場のお手伝いでしょうか？もしお時間があるようでしたら、少し町中を歩きますか？普段は見られない露店なども出始めますよ」

「いや……」

セルフィエルは口籠る。酒場の店主であるメリーベルの祖父には、今日が行けないと朝村を出る前に伝えてあった。息を吸い、吐いてから口を開く。

「……アリーシャ」

「はい？」

彼女の目を真っ直ぐに見つめて、落ち着いた声でセルフィエルは告げた。

「……約束、覚えてる？背中の怪我が完治したら、打ち合ってくれ
るって。傷、治ったから、お願いできるかな？……ただあの時は
軽くって言ったけど……できれば本気で。手加減なしで……真剣に
仕合いがしたい。……いいかな？」

「……………」

アリーシャが驚いたようにセルフィエルを見つめる。数秒後、わず
かに微笑んで答えた。

「……今日ですか？」

「うん。できれば今すぐ」

アリーシャが空を見上げる。

「……今日は、あんまり天気がよくないですね……風も出てきまし
たし、夕方から雨も降りそうですよ」

「アリーシャ」

普段よりも低めの声に名前を呼ばれ、アリーシャは笑みを浮かべた
まま再びセルフィエルを見た。

「……わかりました。とりあえず、村に戻りましょうか」

それから1時間。2人はその道中をほとんど無言で歩き、ニース村
に戻ってきた。

「……さて。……どこでやります？村の人たちから見えるところだと……心配かけちゃいますからね。喧嘩していると思われるでも困りますし。ちよつと山の中に入りましょうか。そう遠くないところに開けた平地がありますよね？あそこでいいですか？」

荷物を置きながら抑揚なく聞いてくるアリーシャに、セルフィエルは短く返した。

「いいよ。武器は……どうする？素手同士でも良いけど」

本来は、お互い剣で軽く打ち合うという予定だった。アリーシャも覚えているだろうが、そのことは言わず自分の腰の鞘を軽く持ち上げてみせる。

「わたしは小刀を使います。一番使いなれていますからね……。セインさまも、一番得意なものをお使いください。……でないと、納得できないでしょう？」

セルフィエルは はつとアリーシャを見た。普段通りの笑み。その表情から、彼女が何を考えているかを読み取るのは難しかった。

（……なんか、この顔を見るのも久しぶりだな）

最近は目にすることが少なくなっていた、無感情な微笑み。……セルフィエルはアリーシャを理解していた。少なくとも、彼女のその笑みが無表情と同じだと確信できるくらいには。掴んだ剣の柄を、ぎゅつと握りしめる。

「……行こうか」

アリーシャも頷き、小刀一本だけを手に、立ち上がった。

「……風が……強くなってきましたね」

「……………」

山の中腹、木々が途絶えて少し見通しの良くなった岩場に、セルフイエルとアリーシャは向かい合って立っていた。足場は円状で、だいたい20歩も歩けば端から端へ行き着けるだろう。

「……空も……いよいよ雲行きがあやしくなってきました」

「……………初めに言っておくけど」

天候ばかりを気にするアリーシャの言葉を、セルフイエルが遮る。

「一切手加減なしで、本気で来てね。……いつも一人で狩りをする時みたいに」

アリーシャが一瞬瞠目し、自嘲気味に苦笑する。

「……ばれてましたか」

「偶然見たんだよ。俺の前では完璧だったから、心配しないで。……でも、今からは、そういうのなし。真剣に、真面目に、容赦なく、殺すつもりで、かかってきて」

アリーシャの顔から笑みが消えた。数秒、その双眸を伏せて。
やがて顔を上げ、ゆっくりと、頷いた。

「わかりました。本気で、……命を奪うつもりで、いきます」

その言葉を合図に、2人の間の空気が変わった。触れれば切れそうなほどに、冷たく張りつめる。強まってきた風も、一瞬止まったように感じられた。

セルフイエルは静かに剣を構えた。腰をわずかに落とす。

対するアリーシャは自然体だ。右手に小刀を握ったまま、無造作にセルフイエルを見つめる。

先に動いたのはセルフイエルだった。剣を下段に構え、アリーシャに向かって疾走する。数瞬でアリーシャの目の前まで間合いを詰め、最後の一步を踏みこんだ勢いのまま、刀身を下から上へなぎ払う。

(……!?)

感触はなかった。切ったのはアリーシャの残像のみ。直後、背後に気配を感じ頭で考える前に横に跳んだ。小刀が、横腹の布を切り裂く。

「——っ！」

後ろに3歩跳躍し、距離を取る。アリーシャが間髪入れずに追ってくる。

と、突然目の前から彼女の姿が消えた。混乱する暇もなく、顎に衝撃が走る。岩場に手を付き、両足を振り上げて放たれたアリーシャの蹴り。鉛で殴られたような重さだった。痛みさえ感じず、脳天を芯から揺さぶられる。

思わず意識を飛ばしそうになるが、ぐつと堪えて目の前の足首を思い切り掴む。細い。先ほどの攻撃が信じられないほど。

逆手に掴んだアリーシャの足を軸に、遠心力を利用して彼女の身体を放り投げようと腕に力を込める。

刹那、アリーシャの顔が眼前に迫った。驚く間もなく目から火花が散る。腹筋のみで自らの上体を起こしたアリーシャが、勢いに任せて頭突きを食らわせたのだ。

セルフィエルが悶絶する。その拍子に緩んだ彼の手から足を引き抜くと、アリーシャは片手で足元を打ち、身体を半回転させて着地した。そして地を蹴ったその足で、即座にセルフィエルに向かってくる。

(……正攻法じゃ……敵わないか……)

セルフィエルも剣を構えなおす。その時、頬に冷たいものが当たった。とうとう降り始めたらしい。みるみる激しくなった雨で視界がぼやける。真正面から心臓を狙ってきた突きを上体を捻って躲し、返す刀で切りつける。アリーシャが一瞬で小刀を斜め上に振り上げて刀身を受け止める。

その一瞬を逃さず、セリフィエルは空いた左手の拳に渾身の力を込め、アリーシャのみぞおちを抉った。骨を砕いた感触が響く。

「……はっ……！」

アリーシャの口から空気が漏れる。かろうじて踏ん張り倒れこむことは避けるが、次の瞬間にはもうセルフィエルがアリーシャの背後を取っていた。

(……終わりだ……！)

アリーシャが振り向こうとするが間に合わない。セルフィエルが、アリーシャの首目掛けて剣を振り下ろした。

アリーシャの長い黒髪がぱっと広がる。
見開かれた鷲色の瞳。
そして。

セルフィエルの視界の端を、暗い雨の降りしきる中でも鮮やかな、青色が掠めた。

（――っ！）

腕の力に、刀身の速さに、一抹の躊躇が混じった。

アリーシャはその一瞬を見過ごさなかった。振り向きざまに重心を落とし肩からセルフィエルの胸に体当たりする。

そして仰向けに倒れた彼の上に馬乗りになり、首元にぴたりと小刀を押し付けた。

「……………」

「……………」

2人の間に沈黙が下りた。激しく降り続く雨音と、互いの息遣いだけが空間を満たす。

セルフィエルはしばし呆然としたあと、顔面を容赦なく打ちつける雨に目を細めながら、一つ深く溜息を吐いてアリーシャを見上げた。

「……………まいったよ。……………君の勝ちだ」

首元から小刀が退けられる。

アリーシャは無言でセルフィエルを見下ろすと、泣きそうな顔で笑った。

彼女の頬を流れ落ちる水が、まるで涙のようだと、セルフィエルは思った。

第24話 その感情の名前は

その日の夕方から降り始めた雨は、翌日夕方まで降り続いた。

「……………ん……………」

壁を打つ雨音に、セルフィエルはぼんやりと目を覚ました。視線だけを動かして窓の外を見ると、灰白く明るい。枕元の懐中時計を確認すると、短針は5と6の間を指していた。

「……………」

昨日、2人はずぶ濡れのまま無言でアリーシャの家まで戻ってきた。アリーシャがすぐにセルフィエルの顎と額を消毒し、薬を塗る。

額に包帯を巻かれるまで、セルフィエルはどこか虚ろな瞳で彼女にされるがままだった。

手当てが終わると、アリーシャが遠慮がちに沈黙を破った。

「……………もう今日は、寝ましよう。……………明日もありますから」

そう声をかけられても、どこか現実味がなかった。脳への衝撃がまだ残っているのだろうか。返事をせずに、のろのろと床に敷かれた布団に入る。

自分に注がれるアリーシャの視線を感じるが、正直どうでもよかった。

「……………おやすみなさい、セインさま」

囁くようなその声を合図に、セルフィエルは目を閉じた。

それから今の今まで眠っていたらしかった。

「……………」

寝台に目をやる。アリーシャの姿はなかった。山に狩りに出かけたのだろう。

今夜は前夜祭だ。町中の店が夜通し仕込みをするのと同時に朝まで開店するため、アリーシャの仕事は今日が一番忙しいと聞いていた。おそらく帰りは鐘が4つ鳴る頃、そして家には寄らずにその足でドラムの町まで獲物を卸しに行くのだろう。

（……………一人で出かけたのか）

起こされなかったらしい。

昨夜の自分の態度を鑑みると、当然と言えば当然かもしれない。眠っているセルフィエルを起こさないように、そつと起床し、身支度を整えて出かけたのだろう。

「……………はー……………」

仰向けに寝転がったまま、深くため息を吐く。交差した両腕を瞼の上に置き視界を塞ぐ。

包帯の巻かれた額と、布を当てられた顎がずきりと痛んだ。

（……………そういえば）

セルフィエルは打撲で済んだが、アリーシャは肋骨を骨折したはず

だった。

彼女の骨を砕いた感触が、まだ左手に残っている。

(……手当、したのかな……)

昨夜、帰ってすぐにセルフイェルの傷の処置をしてくれたことはぼんやりと覚えているが、彼女が自身の怪我をどうしたのか、うまく思い出せない。

セルフイェルが寝入ってから処置をしたのだろうか。

そして今日もまたいつも通り……いや、通常よりも労働量は格段に多い……獲物を狩り、担いで歩くのだろうか、雨でぬかるんだ歩き難い山道を。

そして休む間もなく町まで持っていき、礼を言われて、いつもの顔で笑うのだろうか。

負傷していることなんて、微塵も感じさせずに。

「……………」

そうなのだろう、と思った。彼女はそうやって生きてきたのだ。

苦しくても辛くても、それを絶対に表には出さず、自分の中だけに留めて。

それはきつと彼女にとって、息をするように簡単で、自然なことでも。

(……………痛くないわけじゃ、ないよな)

昨日の打ち合いを思い出す。アリーシャはセルフイェルの要望通り、本気で戦ってくれた。そしてその結果、自分は負けた。

しかし、何よりもショックだったのは勝敗ではなく。

自分が一瞬でも、アリーシャを殺すことを躊躇ってしまったことだ

った。

あの時。アリーシャの背後に回った時。

勝てていた。殺せていた。……あのまま逡巡せずに、刀を振り下ろしていれば。

だが、できなかった。一瞬でも、ほんのわずかでも、セルフイエルは迷ってしまった。

彼女の髪紐が目に入った瞬間。

あのまま行けば刃の軌道上にあった髪紐は彼女の髪数束とともにやすやすと断ち切られ、そしてその先にある首は落とされていただろう。

何も訊かずに殺してしまつては意味がない。時機ではなかった。そう言い訳することはいくらでもできる。

……だが。

「……っ」

唇を噛みしめる。

ずっとわからない振りをしてきた。だつて、認めてしまつたら、戻れなくなる。

なぜ自分はここにいいのか、それを忘れたことになつてしまう。尊敬する父を、敬愛する母を、裏切ったことになつてしまう。

だからずっと、目を背けてきたのに。なのに、あの一瞬で。

刹那だったが、理解するには十分な時間。彼女の大切な祖母の形見だという飾り紐を傷つけることを躊躇った、その意味を。

喉が、ひゅつと音を立てた。

腕をどけて、天井を見上げる。視界がわずかにぼやけた。

はつきりと自覚し、吐き気がするほどの罪悪感に苛まれる。しかし、それでも。

そんな今でさえ、一人で雨の降りしきる山にいる彼女のことが、気掛かりで仕方がない。

「……………」

両目をきつく閉じる。

もはや疑いようがなかった。

——セルフィエルはアリーシャに、本気で惹かれていた。

第25話 雨上がりの、夕焼けの色

だいぶ小雨になってきたとはいえ視界は未だ晴れず、3歩先は白く濁って判然としなかった。

濃い霧の中を、アリーシャは獲物を抱えて歩いていった。一步ごとにぬかるんだ地面から足を持ち上げようとすると、肋骨がずきりと痛んだ。

それでも休憩を取らず、一定の速度を保って歩き続ける。

髪と衣服が身体に纏わりついて体温を奪う。手足の先の感覚はとうになくなっていった。

骨折した個所には何の処置もしなかった。昨夜は彼の手当てをしたあと、濡れた身体のまま寝台に入った。

普段ならそんなことはしない。この仕事は健康が第一だ。身体を壊した途端に収入が絶たれ、生活が立ち行かなくなる。

だが、昨夜はひどく投げ遣りな気分だった。思考が停止し、今朝起きてからも気分はますます陰鬱に濁った。脳にも身体にも泥が詰まっているようだ。こんな気持ちは久しぶりだった。この村に来たばかりの頃を思い出す。

(……いま、何時くらいだろう……)

時間の感覚が掴めない。全てに対する感覚がおそろしく鈍っている。

(……まあ……4つ鐘が鳴る頃には村に帰りつけるだろう……)

そう思った、瞬間。

ぐっと踏みしめた地面の泥に、ずるりと足を取られた。

「……！」

歩き慣れた道で油断していた。咄嗟に獲物を山側に投げ、重心を移動して体勢を立て直そうとする。が、無意識に折れた肋骨を庇いうまく力を込めるのに失敗する。治療を怠った、自業自得。なんて滑稽な。思わず自嘲の笑みが浮かぶ。

本当は、こうなることを望んでいたのではないのか。

(……ああ、そうだったのか)

得心がいった。

些細な自暴自棄の果ての偶然の事故を、自分はいつも待っていたのかもしれない。なんと他力本願なことか。いつも、いつだって……自分では、何も決められない。

ふいに、すべてが面倒になった。目を閉じ、両足の力を抜く。落ちる。

「——うえ!？」

喉の奥から奇声が漏れた。突然誰かに襟首を引っ掴まれ、強引に引き摺り上げられる。

「……っ、ごほっ、はっ……、っ……」

気道を急激に締め付けられ、そして解放されたせいで呼吸がうまくできない。

咳き込むせいでみぞおちが痛む。なぜか先ほどよりも痛みが鮮明だ。涙ぐみながら背後を見やると、こちらも若干息を弾ませ、ぎゅっと眉根を寄せたセルフィエルが見下ろしていた。

「……セ、セインさま……」

戸惑いと共に弱弱しく呼びかけると、怒ったような顔のまま無言で睨みつけられる。

「……………」

その迫力に何も言えず戸惑いながら見返していると、セルフィエルはしばらく言葉を探すように視線を彷徨わせた後、結局諦めたように小さく息を吐いた。

「……探し回って見つけたかと思えば……。……まったく……。こんなに霧が濃いんだから、もっと気をつけなくちゃ危ないでしょ」

いつかの自分の台詞をそのまま返される。思わず眉根を寄せ、目線を逸らしながら小声で礼を言う。

「……すみません。ありがとう……。……ございます」

「……はー」

すると彼は片手で顔を覆って深く溜息を吐き、その場に座り込んでしまった。

「……！？セインさま……。？」

アリーシャも慌てて地面に膝を付く。ぬかるんだ土がぐちゃりと音を立てた。

なぜ彼がここに。いや、それよりもなぜ俯いたまま動かないのだろう。アリーシャはセルフィエルを正面から窺い、遠慮がちに声を

かけた。

「……あの……大丈夫ですか。……あ、傷の具合はいかがですか？ お疲れかと思つて今朝は声をお掛けしなかったんですが……今日一日は、お休みになつていた方がいいですよ。わたしも町に獲物を届けたら家に帰りますから。明日はいよいよお祭りですからね。ミモザの花で、町中が黄色く飾り付けられるんです、とっても綺麗ですよ……。……ええと、雨も もうすぐ上がりそうですし、良かったです、明日はきつといいお天気に」

「ちよつと黙つて」

沈黙が居た堪れなくて喋り続けていると、突然セルフィエルが動き、ゆるく抱きしめられた。

彼の肩口に顔を埋める格好になり、アリーシャは驚いて口を嚙む。以前と同じ状況だ。ただし、あの時の何倍もアリーシャを包む力は弱く、みぞおちが痛むことはなかった。

（……気遣つて、くれてるのかな……）

自分勝手な願望だろうか。しかし、彼の腕からは優しさが感じられ、それがアリーシャを落ち着かせた。

とりあえず指示された通り黙つたまましていると、セルフィエルの指がゆるゆると動いてアリーシャの髪を梳き始めた。耳元でわずかに惘然とした声が囁く。

「……それは、アリーシャの癖なの？」

「え？」

「なんか……困ったり動揺すると、脈絡なく天気の話始めるの……それ、癖？」

言われて、アリーシャはしばし考え込んだ。……そうなのだろうか。……そうかもしれない。

彼は何故か、アリーシャ自身でもわからなかったり気付かなかったりしたことを突きつけるのがうまい。だからきつと、これも当たっているのだろう。

そう思っていると、しみじみとした呟きが耳に入る。

「……………あー、なんか……こういう、小さなことが いちいち気になって指摘して確かめて、自分だけが知ってるんだー、とか……優越感に浸りたくなるのって、典型だよね……」

「はい？」

突然始まったわけのわからない独り言に、アリーシャは戸惑いの声を上げた。そんな彼女を尻目にセルフイエルは立ち上がり、彼女に向かつて手を差し伸べる。

「なんでもない。……じゃあ行こうか」

「……………？ ……はい」

差し出された手のひらに素直に縋り、腰を上げる。そのまま獲物に手を伸ばそうとすると、アリーシャの手が届くよりも早くセルフイエルが全て担ぎ上げた。

「俺が持つ。祭りまで手伝うって言ったんだから、責任持つて最後までやらせて。……今朝、一人で行かせてごめんね。家に帰って、

まずアリーシャの怪我の手当てをしよう。大丈夫、まだ時間はあるよ。今2時を回ったところだから。それから2人で町まで下りよう。……いいよね？」

「……はい」

アリーシャのまだ少し呆然とした返事を聞いて、セルフィエルは満足気に笑った。懐中時計に目をやる。

「じゃ、行こうか」

歩き出し、彼女が一拍遅れて後を付いてくるのを横目で確認してから、セルフィエルは空を仰いだ。

告げなければならない。そして訊かなければ。

最初は、親しくなって、あわよくば惚れさせて何気なく聞き出そうなんて思っていたけれど。

それももう無理だ。全く修正不可能なほどに計画は狂ってしまった。自覚してしまった今となつては、そんな余裕はかけらも残っていない。

半日考えて、考えて……考え抜いて、覚悟ができた。

彼女に聞こう、真正面から。一体何があったのか。なぜ父を刺したのか、その理由を。

きっと彼女なら答えてくれる気がした。

それを聞いた後、自分の心に従おう。彼女を殺すのか、それとも母上の遺言の通り外国へ逃がすのか。

頑なに認めることを拒んで、目を逸らし続けて。

しかし一度認めてしまえば、それはすたと胸に落ちた。

とても清々しい気分だった。楽になった胸で、ゆっくりと深呼吸を

する。

空を見上げると、わずかに夕日の色が透けて見えた。
いつの間にか雨は上がっていた。

明日は、ミモザ祭りだ。

第26話 ミモザ祭りの夜

ミモザ祭りの朝がやってきた。雨はすっかりと上がり、空はきれいに晴れ上がった。

セルフィエルは朝早くに訪ねてきたメリーベルの祖父によって酒場の応援として駆り出され、アリーシャは久しぶりにいつもよりもだいぶ遅く起床した。

今日はまる一日休暇だ。正午近くにターニヤと待ち合わせて町をまわる予定である。メリーベルはナイジェルと約束があるらしく別行動だ。

正午まではまだ時間がある。アリーシャは部屋の掃除を済ませ、洗い終わった洗濯物を干すために外に出た。

強い日差しに思わず目を細める。そのまま瞼を閉じてゆっくりと息を吸った。

春の匂いがした。雨上がりの土の香りも。

今から町へ下りるのだろっ、家族連れのはしゃぐ声が聞こえる。

目を開けて、空を仰いだ。雲一つない、真っ青な快晴。

少し視線を下ろせば、見慣れた村の風景、人々、緩やかに町へと下る坂道。

「……………」

心の底から愛しさがこみ上げ、笑みが漏れる。

絶望の只中にいた自分を掬い上げて、優しく包みこんでくれた場所。ゆっくりと時間をかけ、癒してくれた。アリーシャが自分で居場所を見つけられるようになるまで。

この村が、ドールの町が大好きだった。

ここで暮らしていきたい。許されるなら、年老いて死ぬまで、ずっと。

(……だけど)

今朝、家を出て行く時のセルフイエルを思い出す。何かを決意した顔で話があると言っていた。彼の顔を見たときから、胸の奥がざわめきが消えない。

「……………」

その時、鐘が2回鳴るのが聞こえた。考え込んでいたアリーシャは我に返り、地面に置いた洗濯籠を抱えて家の裏手に回った。

ミモザ祭り当日はその名の通り、町中にミモザの花が溢れる。

目に入る全ての建物の壁がミモザの黄色で覆い尽くされ、女性たちは皆思い思いに編んだミモザの花冠で髪を飾っていた。町中が鮮やかな黄色に染まり、太陽の光を反射して輝いている様は圧巻だった。正午過ぎにターニヤと合流し、露店をまわり始める。いつもと変わらない服装のアリーシャと違い、ターニヤは膝丈の明るい山吹色のドレスを着ていた。髪にはもちろん手作りの花冠である。「アリーシャの分も作っておいたわよ！」と言われ、断り切れずにアリーシャも頭にミモザを飾った。少々照れ臭いが、今日は特別な日だ。他の大勢の女性たちと共に自分も楽しむことにする。

日が暮れる頃、ターニヤの店の前で彼女と別れた。手を振って見送ってから視線を感じて振り向くと、微笑みを浮かべたセルフイエルが立っていた。

「セインさま。酒場のお手伝いは終わられたのですか？」

アリーシャが走り寄りながら聞くと、セルフィエルが首を鳴らしながら答える。

「うん、これから夕食時なのにつて引き留められたけど、アリーシヤと約束があるって言ったら快く送り出してくれたよ。……今町に来たところだけど、すごいね。町中黄色一色だ」

感心したように言われ、アリーシヤは自分のことではないのに何故か誇らしい気持ちになった。

「きれいでしょう？ 昼間の太陽の下のミモザも素敵でしたけど、こーうやって夕日を映して橙色に染まっているのも良いですよね……。毎年本当に楽しみなんです」

わずかに胸をそらしてそう言うと、セルフィエルが微笑んでアリーシヤの髪に手を伸ばした。一瞬どきりとしたが、彼の指はアリーシヤには触れず、花冠の花びらをちよんと摘まんだ。

「これ、今日は町の女の人みんな頭に乘せてるね。アリーシヤも被ってるなんて思わなかった。……似合ってるよ、可愛い」

「……ありがとうございます。ターニヤがわたしの分も作ってくれて、せっかくだし、年に一度だからと思って……」

言われ慣れない言葉に動揺し、口調が少々言い訳がましくなる。そんなアリーシヤを見下ろしながら、セルフィエルが静かに言った。

「……アリーシヤ。君に話したいことがある。だから迎えに来たん

だ。でも今すぐじゃなくてもいいよ。君がもう少しここにいたいと思うのなら、帰りたくなるまで付き合う」

居心地悪げに彷徨わせていたアリーシャの視線の動きが止まる。鳶色の瞳がセルフィエルを見上げ、やがて細められる。アリーシャは嬉しそうに笑い、しかしゆっくりと首を振った。

「……いえ、もう充分です。今日一日、すごく楽しくて、とっても幸せでしたから。……家に帰りましょう」

「……わかった」

町中の喧騒を抜けて、ニース村へと続く道に入る。いつもは静かなこの道も今夜は人通りが多い。１時間ほど歩いて２人はアリーシャの家へ辿り着いた。

「今お茶を淹れますね。セインさまは１日働いてお疲れになったでしょう。座って待っていてください」

「うん……ありがとう」

セルフィエルはどくどくと速まる心臓の音を感じながら、台所の椅子に腰掛けた。

そして卓子の上で手を組んで考える。

……どう切り出すべきか。

とりあえず、素性を明かさなければ何も話せない。騙していたことを謝り、名乗って、王太后の遺言を告げる。何故自分がここに来たのか経緯と目的を説明し、その上で尋ねる。王太后の言ったことは本当なのか。もしそうだとしたら、１０年前に何があったのか。何故父を刺し殺したのか。そして……そして。

思考が止まる。……その後は正直どうしたいのか、自分にもまだわからない。

しかし全てを打ち明ける前に、はっきりと伝えておきたいことがある。

アリーシャに対する自分の気持ちだ。

全てを話してしまったあと、何が起こるか分からない。理由次第で自分が逆上してアリーシャを殺してしまうかもしれないし、その逆だってないとは言い切れない。

ならばその前に、苦悩の果てにようやく認めた彼女への恋情を、アリーシャには知っておいて欲しかった。

「……お待たせしました」

ことり、という音と共に、セルフイエルの前に湯気を立てたティーカップが置かれた。

「……ありがとう」

「いいえー」

アリーシャは自分の前にもカップを置き、椅子に腰掛ける。セルフイエルは卓子の中央に置かれた灯りに照らされる彼女の顔を眺めた。アリーシャはお茶を一口啜ると、穏やかな微笑を浮かべて口を開いた。

「……それで、お話とは何でしょう、セインさま」

「……………」

唾を飲み込む。セルフィエルは深呼吸をするとアリーシャの瞳をじっと見つめ、ゆっくりと確かめるように口を開いた。

「……まず……アリーシャ、俺は君のことが好きだ」

アリーシャの目が見開かれる。

わずかに唇が動くが、彼女の言葉を待たずにセルフィエルは続けた。

「冗談だと思いかもしれない。……確かに出会った頃は、俺の知っている女の子達と違う君の反応を見て楽しんでた部分もあった。でもこの半月一緒にいて、君のわずかな表情の変化を気にするようになって、もっというんな顔を見たいと思うようになって……たまに見せる心からの笑顔を、心底愛しいと思った。……いつの間にか、どうしようもなく君に惹かれてる自分に気付いたんだ」

アリーシャは俯いたまま黙っている。表情は見えない。

セルフィエルは一息吐いてから、囁くように言った。

「……アリーシャ、俺は本気で君が好きだ。……これだけは、俺がこれから何を話しても変わらないから……信じてほしい」

口を閉じ、アリーシャの反応を待った。

アリーシャは俯いたまま動かず、前髪が影を作って彼女の顔は窺えなかった。

「……………」

予想していた反応と違うことにセルフィエルは戸惑った。……てつきり「からかわないでください」と苦笑されるか、真っ赤な顔で照れるかと思っていたのだが。

「……アリーシャ？」

あまりの無反応に、彼女の顔を覗き込むようにして小声で囁く。灯りに照らされたその頬が普段よりも青白く見える。返事はなく、しばらく重い沈黙が落ちる。

「……………」

セルフイエルがもう一度声を掛けようと息を吸ったとき、アリーシャがすつと顔を上げた。

その表情を見て、セルフイエルはどきりとする。彼女の表情は普段通りだった。いつも通りの、笑顔。

アリーシャが口を開く。掠れた声で問われる。

「……好き、のですか。わたしのことを、あなたが」

……………あなたが。

どういう、意味だろう。

セルフイエルの心臓が、どくりと脈打った。手にじんわりと汗がにじむ。嫌な感覚が胸を締め付けた。

「……そうだよ、アリーシャ。俺は君が好きだ」

一瞬、アリーシャの笑顔が泣きそうに歪む。そして、ゆっくりと言った。

「……………あなたは」

「あなたは……………わたしを、殺しにきたのでしょうか」

第27話 ああ、冬の日

あなたは……わたしを、殺しにきたのでしょうか。

時が、止まった。

セルフィエルは呼吸を忘れ、目を見開いたまま、動けずにいた。
それをアリーシャが黙って見つめる。

「……………どうして……………」

数秒後、セルフィエルがようやく言葉を発する。
アリーシャはわずかに微笑んだまま、淡々と返した。

「……………あなたは……………現国王陛下であらせられるザフィエル様の弟^{おとう}君^{ときみ}、先王グリエル陛下の第二王子……………セルフィエル・エスト
レア殿下ですね」

「……………！」

淀みなく本名を告げられる。

どうして。なぜ。いつから。

次々に溢れる疑問符は言葉にならず、代わりに見開いた目でじつとアリーシャを見つめる。

風いだ瞳。出会った時から変わらない、静かな鳶色の瞳。

(……………ああ)

ふいに気づいた。この娘は……………わかっていたのだ。

知っていたのだ。セルフフィエルの素性を。目的を。知っていてセルフフィエルと行動を共にすることを承諾し、家に滞在することを許し、……………そして周りの人全てがセルフフィエルの想いは本物だと思つ中、
当の彼女だけは——曖昧に笑って、否定していた。

少し困ったような、悲しそうな……………その表情の意味。

彼女だけは知っていたのだ。彼女への好意を仄めかすセルフフィエルの言葉が真実でないことを。

彼が本気でアリーシャに想いを寄せるなど、……………絶対にあり得ない
ということ。

セルフフィエルは、ふっと肩の力を抜いた。

「……………よくわかったね。言動も、作法も、ボロは出していなかった
と思っただけ……………。見事な庶民ぶりだっただろう?」

自嘲気味に言うと、アリーシャはまた泣きそうな顔をして笑った。

「……………わかりますよ。一目見た瞬間にわかりました。……………だってあ
なた、お父様にそっくりですもの。……………あのお方のお顔、この10
年、忘れたことありませんでした」

セインが瞠目する。そんなこと一度だって言われたことがなかった。
そう言われるのはいつも、兄のザフィエルの方で。

そんなセルフイエルを見て、アリーシャは懐かしげに目を細めた。

——そう、彼を初めて目にしたときのように。

「顔の造作はそんなに似ていないのです。おそらくあなたはお母様に似たのでしょうか。でも」

そう言って、何かを思い出すように目を閉じる。

「笑顔がそっくりなのです。笑った時に、瞳の色が光の具合で微妙に変化する……お父様そっくりに。あのとき……あなたが私の前に現れた時、ああ、とうとうこの時が来たと思いましたけど……わたしがこんなことを言う資格は絶対じゃないんですけど……」

「……………」

「……懐かしくて、あの方の笑顔をもう一度見られたのが嬉しくて……泣いてしまいそうでした」

大好きだった。先王のことも、祖母のことも。

ずっとそばにいられるのだと思っていた。

そしてその願いは、アリーシャが自分の手で壊さなければ、叶ったかもしれないもの。

「……本当に立派な方でした。自分の意見を通し過ぎるところがありました。多くの民に慕われて……ですから、いつかはこういう日が来ると、10年前に覚悟はすでにできていました。……………本当に、さぞや、お恨みのことでしょう。……………どうぞ、お気の済みますように、なさってくださいませ」

その言葉に、唐突に怒りが湧く。感情のままに絞り出すように声を出す。

「……立派、だと…慕われていたと思っっているなら、なぜ、殺した。父は……これからのこの国に、なくてはならない人だったのに」

アリーシャは一度唇を引き結び、そして開いた。

——寒い、真冬の日のことだった。

空気は凍えるように冷たく、昼を回ったあたりからどんよりと曇り始めていた。

ふわりふわりと白いものが舞い始めたエストレア国の首都ベルファールの小道を、一台の質素な馬車が走っていた。

ガタガタと音を立てて、馬車の窓が開けられる。紗幕が上げられ、黒髪の少女がひょこつと顔を出した。小さな手で窓枠を掴み器用に上体を空に向け、少女は歓声を上げた。

「うわあ、雪ですよ！どうりで寒いわけですね！風が顔にあたって冷たいです！」

さらに身乗り出そうとすると、馬車の中からぐつと足首を掴まれる。

「……落ちるぞ。おとなしく座ってろ、アリーシャ」

風に黒髪を靡かせながら、少女——アリーシャは、少々不満げに室内に頭を戻した。自分の足を捕らえている手の主を頬を膨らませ

て睨みつける。

「グリエルさまも見てみてください。すごくきれいですよ」

拗ねたように言われ、アリーシャの隣に座っている大柄な男がその紅茶色の瞳を細めて笑う。

「もう少しで城に着く。外に出たらいくらでも見られるから、今慌てて見る必要もない」

その言葉にアリーシャはおとなしく男——グリエルの横に座り直し、うつとりとした顔でふにやりと笑った。

「……それにしても、ヴァージニアさま、可愛らしかったです……4歳になられたばかりなんですよね？」

「ああ」

エストレア国国王グリエルと正妃メイシーラの長女ヴァージニアは生まれつき身体が弱く、一か月ほど前からメイシーラの生国で療養生活を送っていた。2人の息子は寄宿学校に入っており、今は王宮を空けている。

政務の合間に時間ができたグリエルはアリーシャを護衛に単独で正妃を迎えに行った。ヴァージニアの体調も良好とのことで、今夜中には王都に戻るらしい。メイシーラとヴァージニアを連れて帰途に着く予定だったが今日中に決済の必要な仕事が残っていたため、グリエルは一足先に王都へ帰還することにした。王妃の屋敷に滞在したのは1日のみだったが、その間アリーシャはおぼつかない足取りで懸命に歩く愛らしいヴァージニアの姿に終始釘付けだった。

「お前は赤ん坊を見るのが初めてだったからな……。しかし何で抱いてやらなかったんだ？メイシーラは良いと言っただろう？」

目を輝かせてヴァージニアを見つめていたアリーシャだったが、王妃が促しても指一本ヴァージニアに触れようとはせずに、「見るだけで幸せですから、いいんです」と笑顔で首を振るだけだった。問われたアリーシャは少し考え、呟くように答えた。

「……わたしなんかが触ったら、だめです。ヴァージニアさまは、わたしが今まで見たどんなものよりも真っ白で、きれいですから。……わたしの、血のにおいのする手でさわったら……よこれてしまいます」

「……………」

アリーシャはすでに、グリエルの命令で王に反感を持つ重臣を何人が殺めていた。彼女は9つにして人命を奪うことに一片の躊躇も感じず、どんな状況でも任務を遂行できる技術と柔軟性を備えていた。

「でも、わたしはわたしの手が好きです。この手のおかげで、グリエルさまやメイシーラさまのお役にたてます。もっと大きくなったら、王子さま方もおたすけできます。そうやって、ヴァージニアさまがずっと真っ白で笑っていられるようにお守りできたら、すごく……しあわせです」

アリーシャはそう言って、夢見るように笑った。

そんなアリーシャを見て、グリエルも満足気に頬を緩ませた。

「……そうだな、生まれたときから俺が直々に仕込んだんだ、お前の腕は信用している。だから今回も、護衛は付けずにお前だけを共

に出かけた」

暗殺者としての素質は申し分なく、王家への忠誠心は揺るぎない。一生表に出ることはなく、死ぬまで血に塗れた暗い道を歩むことに幸福を見出せるような——理想の娘に、育ってくれた。

「……帰ったら訓練だ。今のうちに身体を休めておけ」

「はい」

アリーシャは心から嬉しそうに笑って答える。

城の門が開けられ、馬車は静かに城内へと消えていった。

第28話 特別

「うあつ……！」

どしゃりと音を立てて、積もった雪で濡れた地面にアリーシャは力いっぱい叩き付けられた。だが痛みを感じている暇などない。すぐに追撃が来る。飛んできた拳を間一髪で躲し、即座に体勢を整える。そんな彼女を見て、グリエルはわずかに口角を上げた。

「いい反応だ。すでに反射のみで動いているようだな。速さは……まだ少し足りぬところはあるが、成長過程だ。これから筋肉も付いていくだろう。……さて、そろそろ切り上げるか。もうすぐメイシールとヴァージニアが帰ってくる頃だ」

その言葉にアリーシャは戦闘態勢を解き、顔に付いた泥を袖口で拭いた。

「はい！……！？」

その時だった。ふと、人の気配を感じる。近い。

「……グリエルさま……」

小声で王の名を呼ぶと、グリエルは無表情のままゆっくりと鞘から剣を抜いた。

「ああ……誰かいるな。隠れているらしいところをみると城の者で

はないか……。王宮の内部……。しかも王族しか入ることを許されないこの庭にまで侵入するとは、よほどの手練れだ」

「……………」

アリーシャもまた腰から小刀を抜き、腰を低くして構える。先ほどの気配は消えていた。

あたりに静寂が満ちる。

すばやく周囲に目を走らせる。いつも通りの光景。茂み。小さな池。枯れた井戸。

木々の陰に、子供がいた。

「——っ!？」

アリーシャは心臓が止まるかと思った。無表情にアリーシャを見返すあどけない顔の主は5つか6つほどの男児だった。ばくばくと鳴る胸を押さえ、安堵の溜息を吐く。

「……はー、びっくりした……。グリエルさま、いましたよ。男の子です。たぶん侍女さんか女官さんの子が迷って……」

「アリーシャ!」

グリエルを振り向きながら言いかけたアリーシャの言葉を、鋭い声が遮る。次の瞬間、アリーシャの脇を男児が一瞬ですり抜けた。その小さな手には吹き矢が握られている。

「——っ!」

無理やりに身体の向きを変え、その小さな身体を追いかける。状況

が把握できない。しかし確かなことは、彼の口にあてられた吹き筒の先は真っ直ぐ王を狙っているということだった。

吹き矢が放たれる。グリエルは剣を一閃してそれを叩き落とした。男児はそれを見ても無表情のまま、後ろに跳びながらまた吹き筒を構えた。

「グリエルさま！大丈夫ですか！？」

アリーシャの叫ぶような問いかけに、王は頷いて答えた。

「ああ。しかし……恨みを買ってどこの国の刺客かはわからんが、考えることは皆同じだな。あいつもお前と同じ……生まれた時から訓練を受けた暗殺者だろう。しかしあんな子供に一国の王の暗殺を任せるとは考え難いな……おそらく、指示した奴は最初からあの子供が返り討ちに合うことは想定済みだ。あいつを捨て駒に使うことで、俺の周りの情報をできるだけ集めるのが目的だろうな」

アリーシャの背に悪寒が走った。全身の毛が逆立つような感覚を覚える。

「おい、しっかりしろ。……来るぞ」

「は……はい」

かろうじて返事をする。しかしその胸は氷を飲み込んだかのように冷たかった。

……捨て駒。最初から、殺されることを想定して。頭の中で王の言葉が反響する。口の中が渴く。

（考えることは……皆、同じ？）

グリエルさまも、そう思っているのだろうか、……わたしのことを？

頭を左右に激しく振る。なんてこと、一瞬でもそんなことを考えるなんて。

そんなこと、あるはずがないのに。

顔を上げると、向かってくる子供に向かってグリエルが剣を構えるのが見えた。

アリーシャは思わず声を上げる。

「グ……グリエルさま！？ま、まさか、殺すつもり……」

「当たり前だ。どこの誰かは知らんが、これ以上諜報されるわけにはいかん。一刻も早く仕留める」

王は振り返らずに答える。冷静な声。言外に愚問だと言われた気がした。

アリーシャは思わず、自分の立場も忘れて食い下がった。

「でっ……でも、あの子は何もわかっていません！ただ……ただ指示をされた通りに、誰かの役に立ちたくて、それだけで……！」

きつと、自分のように。

しかし今にも泣き出しそうなアリーシャには一瞥もくれずに、グリエルは間合いに入った男児に向かい剣を振りかぶった。

刹那、無表情だった顔に一瞬恐怖の色が宿る。

「——っ！」

一瞬見えたその表情がアリーシャの目に焼き付いた。
男児の顔が、今日別れたばかりのヴァージニアの笑顔とだぶる。
同じくらいなのに。まだ、あんなに小さいのに。まだ真っ白で、きれいなままでいられるはずなのに、なんである子は、……………わたしは。

思考が灼き切れた。身体が勝手に動く。
逆手に小刀を持ちかえ、左の掌で柄尻を支える。
体中に響く、重い感触。

——気付いた時には、両手が真っ赤に染まっていた。

「……………何という……………ことを……………」

呆然とした声が耳に届く。頬につうつと水が伝う感触。視界の隅から男児が消える。予想外の事態に退くことにしたのだろう。アリーシャは震えて涙を流しながらも、わずかに安堵した。
しかし、見上げた先の見開かれた紅茶色の瞳と目が合い再び全身が恐怖に包まれる。熱い涙がとめどなく流れ、俯く。

「……………ごめ……………なさい……………」

口から漏れたのは謝罪の言葉。だがそれとは裏腹に、両腕にはさらなる力が籠った。

「……………お前……………わかっているのか。無事ではすまないぞ……………お前も……………アーシエも……………なんという……………ばかなことを……………」

苦しげに絞り出される言葉。
アリーシャを後悔が襲った。おばあさま。ああ、わたしは、何とい

うことを。

(……でも)

心の中で形にならない言葉が荒れ狂う。

ひどい。なぜ、そんなことができるの。同じ子供なのに、今日ヴァージニアさまをなでたその手で、なぜ……あの子を殺せるの。

みんな同じなのだろうか。わかっていた、グリエルさまにとって本当にたいせつなのは、2人の王子さまと、ヴァージニアさまと、メイシーラさまだけ。

わかってた、けど……もしかしたら、ほんのすこしでも、わたしもグリエルさまのとくべつになれるかもって……だから今まで、いっしょうけんめい………なのに。

だいすき、だったのに。

様々な思いは言葉にならなかった。

アリーシャは泣きながら、ただ壊れたように謝り続けた。
王が目を閉じて、動かなくなるまで。

第29話 夢の終わり

「……………ーシャ！アリーシャ！」

「……………？」

身体を激しく揺さぶられて目を覚ます。目の焦点をどうにか合わせると、目の前に真つ青な顔の祖母が見えた。どうやら泣き疲れて気絶してしまったらしい。

「……………おばあ……………さま……………？」

「ああ……………アリーシャ……………なぜ……………こんなことに……………」

祖母の両目からみるみる涙があふれ、強く抱きしめられる。目の端の雪が赤く染まっていて、さきほどのことは夢ではないとぼんやりと実感した。死に際の王の言葉を思い出す。

（……………わたしだけじゃない……………おばあさまも……………罰をつけるの……………？）

じわじわと恐怖が胸を這い上がる。何か言おうと息を吸った途端、ぐいと身体を離され痛いほどに両肩を掴まれた。涙に濡れた祖母の目に射抜かれ、動けなくなる。血と涙で汚れた孫の顔を見つめ、アリーシエはゆっくりと口を開いた。

「……………いいですか、アリーシャ。あなたは、今からここを出るのです。レスランカとの国境にある、シェットランド州の州都ドーラム

へ行きなさい。そこから一時間ほど歩くと、ニースという小さな村があります。わからなければ誰かに聞いて……。ニース村の村長は、わたしの古くからの友人です。彼を訪ねなさい」

アリーシャは弾かれたように目を見開き、思わず叫んだ。

「いけません！おばあさま。わたしはグリエルさまを殺してしまいました。罰はきちんと受けます」

「だめです。見つかったら確実に死刑です。あとのことはわたしに任せて、早く」

「できません！」

パン！

乾いた音と頬の熱さに平手を張られたのだと気づき、呆然とした。

「……お願いだから、言うことを聞いて……」

押し殺した泣き声混じりの声に、アリーシャはのろのろと祖母の顔を覗き込む。

「……おばあさま……」

「……ずっと、引き取ったことを後悔していました。陛下がお前を引き取るのをお許しになった時、嬉しかった……孫と暮らせることになるなんて思っていなかったから……。でもまさか、暗殺者になるために育てられることになるなんて……」

そう言って、泣きながらアリーシャを抱きしめた。アリーシャは不

思議だった。なぜそんなに悲しそうに言うのだろう。こんな風になつてしまったけれど、わたしは……あんなにしあわせだったのに。

「ごめんなさいね……家族らしいこと、何もしてあげられなかった……だから、せめて今、あなたを逃がすことを許して。お願いだから、ここから出て、生きて、幸せになつて。もう一生、人殺しなんてしないで」

アリーシャの目がみるみるうちに再び潤み始める。

それは大好きな祖母からの、紛れもない別れの言葉だった。

「アリーシャ、おばあさまは離れていても、ずっとお前のそばにいます」

そういうとアーシエは自分の髪を結びあげていた青い飾り紐を解き、アリーシャに渡した。

「これをおばあさまだと思って、大事にしてください」

しばし茫然としていたアリーシャだが、やがて唇を引き結んで小さく頷いた。乾いた涙の跡を、新たな雫が辿る。

アーシエは孫を見つめ満足気に微笑むと、そつとアリーシャの背中を押した。

「ゆっくりしている暇はありません。さあ、早く出るのです」

窓の隙間から風が吹き込み、灯りがゆらりと揺れた。

「……その後は……ただひたすら、祖母から聞いた地名を呟いていたことだけを覚えています。正直、どうやってニース村までたどり着いたのか記憶にありません。お金は全く持っていないませんでしたから、乗合馬車かどこかの商人の馬車にでも潜り込んだのでしょうか。」

……真冬の早朝、泥と血に塗れて突然現れたわたしを、村長さん夫婦は何も言わずに介抱してくださいました。そしてわたしに行く場所がないとわかると、この村で暮らしさないと行ってくださいました。自力で食べていけるようになるまで自分たちが面倒を見るから、と。……信じられませんでした。わたしに優しくしても、彼らには何の利もなかったからです。……でも一緒に暮らすうちに、彼らは……ここに住む人たちは、利害なんて考えていないんだ、ということに気付きました。……本当に、感謝しています」

アリーシャが言葉を切った。向かいに座るセルフイエルは両肘を卓子に付き組んだ指の上で額を支え、俯いたまま動かない。明るい栗色の髪が、灯りに照らされていつもよりも赤く見えた。

「……これで、わたしの覚えていることは全てお話しました。……気付かない振りをしていて、申し訳ありませんでした。最初殿下がいらした時、ついに10年前の罪が露見し、王弟殿下自ら捕縛にいらつしゃったのだと思ったのですが……なぜかわたしの仕事の手伝いを申し出て下さり、果てはわたしと恋仲だという噂がたつても笑っておられるので……正直とても混乱しました。顔に出ないようにするのが大変でしたよ」

セルフイエルがのろのろと視線を上げる。アリーシャはその顔を真っ直ぐに見つめて、わずかに微笑んだ。

「……でも今は……、なんとなく、わかる気がします。……間違っ

ているかもしれないですが」

もし、アリーシャがセルフィエルの素性に気付かず、ただの旅の風土学者の青年と思っていたら。いつも優しく気遣ってくれ、真つ直ぐな好意を向けられて、果たして自分はそれを少しでも疑ったろうか。

答えは明らかだった。恋愛経験など皆無なただの村娘である。おそらく微塵も疑問を持たずに、恋に落ちてしまっていたに違いない。そうなった時のことを想像し、アリーシャはぞっとした。

その後に待っているのが死であつても捕縛の末の尋問であつても、アリーシャには同じことだっただろう。

奈落の底に突き落とされる。そして思い知らされる。

誰かの特別になんてなれるわけがないって、わかつていたはずなのに、また同じことを繰り返して。

なんて滑稽で、浅はかで、醜いんだろう。

そしてたぶんもう2度と、暗闇から上がってはこられない。

——だって、最初からわかつていた今でさえ、こんなに心が痛い。

彼が自分のことを好きだなんて、一度として信じたことなどなかった。

でも笑いかけられたら嬉しかったし、甘い言葉を囁かれれば心拍数が上がって、抱きしめられたら……安心した。

こんな自分が誰かに愛されるわけがないことは、10年前にわかつていたはずなのに。

セルフィエルから優しくされる度、笑顔を向けられる度、裂けるように胸が痛んだ。そして気付いた。……ああ、これが、この人の復讐か。当たり前だが、どれだけ恨まれていたかを再確認した気がした。

目の前で呆然とアリーシャを見つめる男に目をやる。

自分の計画が最初から破綻していたことに対する衝撃から未だ立ち直れていないように、アリーシャには見えた。

だから、言わない。

全てを知っていて、なお、彼の言動に一喜一憂していたことも、さきほどの熱の籠った告白に今までで一番傷ついたことも……教えない。

「……………母が」

永らく黙っていたセルフイエルが、重い口を開いた。掠れた声。アリーシャは静かに深呼吸をして、彼の次の言葉を待った。

「母が……王太后が、他界したんだ。1カ月ほど前に」

「……………はい、町で人が話しているのを聞きました」

おそらく10年前も国王崩御の報がドーラムにも届いたのだろうが、二ス村に来てからの数カ月を死人のように過ごしていたアリーシャの耳には入らなかった。

「母は臨終間際に10年前何が起こったかを語ってくれた。……城に戻って休んでいたら、夜更けに嚙り泣く声が聞こえて窓から外を見たそうだ。そうしたら城門を飛び越える君の背中が見えて、不審に思い泣き声を頼りに庭に出た。そこで、父の乳母だった……君のお祖母さんが泣きながら父の亡骸の前に蹲っていて、王を殺してしまった、自分を処刑してくれと縋られたそうだ。母は彼女がそんなことをしたとはとても信じられなかったが、地面に落ちていた小刀と乳母の取り乱し方を見て何が起こったのかを悟ったらしい。……何故かはわからないが、暗殺者として育てられていた彼女の孫娘が

王を殺し、乳母は孫を逃がして身代わりになろうとしているのだと。……母は悩んだそうだが結局乳母の意思を尊重し、君のお祖母さんは翌日……処刑された。……王殺しの罪で」

アリーシャの全身が震えた。自分の喉を掻っ切ってしまいたい衝動にかられるが、膝の上に両爪を立ててなんとか堪える。

「母に……頼まれたんだ。君に会って、なぜ王を刺したのか、理由を聞いてほしいと。そして君が望むなら、国外で生きていけるように取り計らってやってほしいとのことだった」

アリーシャは驚いた。かつての王子たち以上に、王太后には恨まれていると思っていた。なのに、最期の時に自分のことを気にかけてくれるとは。

（……優しい人だった）

脳裏にかつての王妃の顔が蘇る。

アリーシャが暗殺者として訓練されていることを知っていても、「ごめんなさいね」と悲しそうに笑って頭を撫でくれるような、そんな女性だった。

「……俺は……ここに来て、君と直に会って話をして、想像以上に普通の娘で驚いた。……今日話を聞くまで、本当は心のどこかで期待していたのかもしれない。実は全部母の勘違いで、君は何もしていなかったんじゃないかって。……でも、どうやらその可能性はないみたいだ」

アリーシャには彼の言う意味はよくわからなかったが、突き放したような声音が胸に冷たく響いた。

セルフィエルが静かに立ち上がり、扉に向かう。

「俺は、王都に戻る。……まだ少し混乱しているし、兄と妹とも相談して……君の処遇を決めたいから」

「はい」

何か言わなければと思ったが、何も言葉が出てこなかった。しばし考え、結局ただ小さく返事のみを返す。座ったまま動けずにいるアリーシャに、セルフイエルは背を向けたまま告げた。

「……………君が、父を刺した理由は、……………正直、理解できなくもない。幼い君にとって、父は世界の全てだっただろうから……………。……………父に捨てられたと思った時の君の絶望を、想像するくらいはできる。……………でも」

扉に手を掛け、片足を外に踏み出す。

「だからといって、……許せるわけじゃない。理屈じゃないんだ。俺は、父を……先王を、とても尊敬していたから。……たぶん君と、同じように」

⌋
⋮
⌋

「……全部、話してくれたことには、感謝する。……ありがとう」

そうしてセルフィエルは、硬直したアリーシャを一度も振り返ることなく二丁ス村をあとにした。

第30話 星空の下の帰途

ドールムから王都へ向かい、セルフィエルは馬を駆っていた。

深夜だからだろうか、時折り馬車とすれ違うくらいで、徒歩や自分のように騎乗の人間は皆無だった。

いくら春とはいえ、飛ぶような速度で駆け抜ける夜道は冷える。顔に冷気を受けながら、セルフィエルはようやく自分が落ち着きを取り戻してくるのを感じていた。冷静になるにつれ、軽い自己嫌悪に陥る。

「……………何してるんだろう、俺……………」

思わず呟いた独り言は、一瞬白く漂うと瞬く間に後ろに流された。本当に、何故こんな夜中に王都に向かって馬を走らせているのだろう。

おそらく帰り着くのは午前3時頃。当然兄も妹も寝ている時間だ。3人で落ち着いて話ができるとしたら、どんなに早くても夕食の時だ。まだ丸一日ある。村で朝を迎えてから王宮に帰っても同じことだったのだ。

彼女の家で夜を過ごすことが困難ならば、酒場の主人に頼めば留めてくれたはずだ。

もう祭りは終わったのだ、空き部屋の一つくらいあっただろうに。

「……………はー」

そんなことにも思い当らなかったとは、どうやら自覚している以上に自分は動揺していたらしい。

しかし驚いたのは、この期に及んでもアリーシャに対して負の感情

が湧いてこないということだった。

話を聞く前は全てを語られた後怒りと憎しみに心が支配されて淡い想いなど吹き飛んでしまおうと思っていたのだが、思いのほかセルフイエルは冷静だった。

おそらくアリーシャが終始落ち着いていたことと、事の顛末が想定範囲内だったこと、そして ただどしく打ち明けられた理由に僅かでも共感してしまったことが原因と思われる。

しかし事実は変わらない。アリーシャは確かに父を刺して、逃げたのだ。

セルフイエルは陰鬱な気分になった。

王都を出た時は、こんな風に複雑な気持ちを抱えて戻ることになるなんて思いもしなかった。父の仇をとれると意気揚々と出かけたのに。

アリーシャの口から10年前のことを聞いた今、彼女を生かしておく理由はない。

なのに殺すこともできず、かと言って国外に逃がすこともせず、ただ迷って逃げるように村を出てきてしまった。

最後に自分が何を言ったのかもよく覚えていないし、アリーシャがどんな顔をして自分を見送ったのかも記憶にない。正直自分に手一杯で、彼女の様子を気にする余裕なんてなかった。

(……どうしよう……)

セルフイエルは空を仰いだ。満天の星空が視界いっぱいに広がる。

王都に帰って、兄と妹に会ってから自分は何を話すというのか。

本当は殺すつもりで父の仇に会いに出かけたが、気が付いたらその娘を好きになっていた。話を聞いたが命を奪う気にもなれず、どうしたらいいかわからなくなって帰ってきた。

(……………)

正直に要約するところなる。セルフィエルは目眩がした。間抜けにもほどがある。

これを打ち明けた時の兄と妹、そして兄嫁のジャクリーンの顔が想像できない。驚くところまでは予想がつくが、そのあとどう反応するのか三者とも全く読めなかった。

(怒りは……しない、とは思っけど……)

兄は無表情で頷いて終わりかもしれない。妹はわからない。空想癖があるから、もしかしたら兄の恋愛話、という観点から興味を持つかもしれない。ジャクリーンは……兄の反応によるか。

また溜息が漏れた。

2人は黙ってセルフィエルの好きなようにさせてくれたと言うのに、何という体たらくか。セルフィエルは未だかつて自分にここまで落胆したことはなかった。

(……………でも)

ほぐれてきた頭で考える。

アリーシャの話を聞いても変化のない彼女への気持ちに安堵している自分がいることも確かで、そしてその感情こそが驚きだった。

全てを聞いた後でも彼女を好きでいられたことにほっとしている。冷静になってみれば、全くひどい状況だった。父への尊敬と忠誠心が、彼女への想いに負けたということか。

(……………いや)

そういうことではないだろう、と思った。

父のことを今でも敬愛しているかと問われれば、セルフィエルは胸を張って是と答えることが出来る。父がこれからという時に命を絶たれたのは無念だし、それ自体には憤りも覚える。

しかしそのこととアリーシャへの気持ちは、もはやセルフィエルの中で完全に別物となっていた。

（まあ……だからこそやっかいなんだけど）

不思議と悪くない気分だった。

最近気付いたが、自分は存外に前向きな性格だったらしい。落ち込みはするが、そこからの浮上が早い。このひと月で見つけた己の意外な長所だった。

手綱をわずかに引き、少し馬の速度を落とす。直線に伸びる道。前後には自身の他に影も見えない。

「……………」

白い息を吐き、再び空を見上げた。空気が澄んだ春の夜空を見られるのもあとわずかだ。すぐに夏が来る。

ならば今のうちに眺めておこうと思った。

どのみち王都に着いたら、ゆっくり星を眺める時間などないだろうから。

第31話 食堂会議

その日夜明けとともに王宮に帰ったセルフィエルは、少し仮眠を取って兄に帰還の報告をした後、久しぶりに王室師団の訓練に参加して汗を流した。

食堂でザフィエル、ジャクリン、そしてヴァージニアと共に夕食を摂った後、内密の話があるからとセルフィエルは室内にいた給仕係を全員下がらせた。

4人だけになると、ジャクリンの淹れたお茶を飲みながらザフィエルが珍しくわずかな微笑みを浮かべて弟の帰還を歓んだ。

「……とりあえず、無事に戻ってくれて何よりだ、セルフィエル」

「本当に。おかえりなさいませ、セフィ兄さま」

長兄に続いて末の妹であるヴァージニアも微笑んで声を掛ける。美人だが少々気が強く、加えてとんでもなく理想が高いので、2人の兄にとって彼女の結婚相手探しは頭痛の種だった。セルフィエルは目を細めて答える。

「ただいま、ジーナ。一カ月ぶりだね。元気だった？」

「ええ、ジャクリン義姉さまにまた新しい小説をお借りしたの。今度は長編で、騎士と姫君のロマンスなのよ。今王都中の女性が夢中になっている傑作だそうで、わたくしも続きが気になって仕方がないわ」

その金色の瞳が輝き、頬も薔薇色に紅潮している。勝気ではあるがヴァージニアは素直で純粹、そして非常に夢見がちな性格だった。ジャクリーンを実の姉のように慕っている。おっとりとしたジャクリーンとてきぱきとした口調で話すヴァージニアは正反対の性格だが、だからこそ逆に相性がいいらしい。実際、金髪のジャクリーンと小麦色の髪のヴァージニアが仲睦まじく話している様子は本当の姉妹のようだった。

ジャクリーンは興奮気味に喋るヴァージニアを笑みを浮かべて見つめ、セルフィエルに視線を移した。

「おかえりなさいませ、セルフィエルさん。2カ月の予定でしたのに、ずいぶんお早いお帰りでしたのね。そういえばドラムのミモザ祭りは今週だったかしら？ご覧になっていらしたの？」

「ええ……昨日でした。天候が心配されましたが当日は快晴で、黄色いミモザの花で町中が埋め尽くされる様子は壮観でしたよ」

「まあ……わたくしも是非一度拝見してみたいわ」

朗らかにジャクリーンは笑ったが、その瞳には若干の憂いが見えた。このひと月の間に何があったかを尋ねたいのだろうが、迂闊に切り出せず迷っている目だった。兄を見れば複雑な表情を浮かべている。考えていることはジャクリーンと同じだろう。

何となく気まずい沈黙が下りたが、それはすぐにヴァージニアの能天気な声によって破られた。

「そういえばセフィ兄さま、1カ月も王宮を空けてどこに行つてらしたの？各州を視察にまわられていたとか？」

「……え？」

驚いてザフィエルを見つめる。目が合った兄は小さく首を振って答えた。どうやらヴァージニアには何も話していないらしい。そういえば彼女は母の遺言を聞いた後も、兄2人に任せると言って部屋に戻ってしまったのだった。

セルフィエルは深呼吸をした。予想外だったが、いい切っ掛けを作ってくれた妹に感謝する。

「兄上、義姉上。ご心配おかけしましたが、例の件でお話したいことがあります。ジーナ、お前にも聞いてほしい」

神妙な面持ちで居住まいを正す兄夫婦と、きょとんとセルフィエルを見返す妹。3人の顔を順々に見つめてから、セルフィエルは話し始めた。

母の遺言を果たすと言って出掛けたが、本心では父の仇を自らの手で葬ってやろうと思っていたこと。彼女により深い絶望を与えるためと親しくなって理由を聞き出すために、彼女の仕事を手伝うことにしたこと。彼女の口から聞いた10年前の顛末。先王を刺した理由。

……そして自分のアリーシャへの好意と、今なおその気持ちに変化がないこと。

最後の部分は手元のティーカップを見ながら努めて淡々と告げた。

「……………」

セルフィエルは顔が上げられなかった。しかしあまりに周りが静かなので、おそろおそろ視線を上げる。

すると三者とも目と口を見開いて、ぽかんとセルフィエルを眺めていた。

セルフィエルは再び俯く。これが当たり前の反応だ。

数秒ののち、最初に口を開いたのはやはりヴァージニアだった。

「……セフィ兄さま……間抜けなの？」

「……ジーナ」

自覚はあったが、他人に言われると腹が立つ。
ヴァージニアは慌てて口許を押さえた。

「あら、ごめんなさい。……でも兄さま、本気なの？ 惚れさせよう
と思ったら逆に惚れちゃったということ？」

「……ああ」

「何で……そんなことになるのよ」

「……俺にもわからない」

苦々しく正直に告げると、ヴァージニアは何やら納得した顔になった。

「……まあ……そうよね、わからないわよね。恋っていうのは気付
いたら落ちているものだって、昨日読んだ本にも書いてあったわ」

妙にしみじみと言う。そこでザフィエルがようやく我に返った。

「……セルフィエル。ヴァージニアがすでに聞いてしまったが……
その、本当なのか？ 本心から、その娘に……」

「はい、兄上。自分でも何度否定しようとしたかわかりませんが…

…認めるしかありませんでした。俺は、あの娘が……アリーシャのことが、好きです」

真っ直ぐなセルフィエルの瞳に、ザフィエルはまたしばし硬直した。……まさかこんなことになるとは。弟の精神や生命の心配などいくつか懸念は持っていたが、この事態は想定していなかった。混乱しつつ口を開く。

「そうか……。それで、お前はどうしたいんだ。まだその娘を殺したいと思うのか？」

「……いえ……。正直なところもう彼女の命を奪おうという気は失せてしまいました。しかしだからといってこのままというわけにもいかず、恥ずかしい話ですがどうすべきか判断に迷い一旦兄上方に相談しよう、こうして戻ってきたわけなのです」

「ふむ……。そうだな、どうしたものか……」

ザフィエルは腕を組んで天を仰いだ。そんな夫の様子を見て、今まで黙って見守っていたジャクリンが口を開いた。

「あの……ならばその娘……アリーシャといましたかしら？彼女をお嫁さんにもらったらいいのではありませんか？」

——きっかり3秒間、食堂を気味の悪いほどの静寂が支配した。

「そうだわ！さすがジャクリン義姉さま！何も悩むことなんてないわよね！大切なのは今よ！素敵。騎士と姫君の物語のよう……セフィ兄さま、わたくし全力で応援するわ！」

ヴァージニアの歓声が響き渡る。

瞳をきらめかせて見つめられ、セルフィエルは動揺した。

「……………」

揃って渋面を作る兄弟を尻目に、義理の姉妹は身分違いの恋の魅力について語っている。

「……いや、ジャクリン、事はそんなに簡単ではないと」

ザフィエルがやんわりと2人の間に割って入った。ジャクリンが夫に向き直って微笑む。

「どうして？理由は聞いたのだから、残る王太后さまの遺言は娘を国外に逃がして自由に生きられるようにしてあげること、なんでしょう。別に国外でなくても、彼女が幸せに暮らせるのであれば遺言に背いたことにはならないのではないかしら」

おっとりとしたジャクリンの物言いにセルフィエルが弱弱しげに反論する。

「でも……それじゃあ父を裏切ったことになりませんか」

「お父様もあなたの幸せが一番ですわ。あなたが父上への敬意を失くしたわけでもないですし、許して下さいます」

慈愛に満ちた微笑み。まるで聖母のようだ。この笑みに見つめられると、教会で懺悔をしているような気分になる。

セルフィエルは一つ溜息を吐いてから言った。

「……わかりました、とりあえずこの件は保留にします。兄上、実はもう一つ気になることが」

「なんだ？」

問われ、セルフィエルは考え込みながらゆっくりと言った。

「……アリーシャの告白を聞いた時から……わずかな違和感が消えないのです。何かが引つ掛かる。アリーシャの話と王太後の話のどこかに、齟齬があるような気がしてならないのです」

兄は弟をじつと見ると、大きく頷いて言った。

「わかった。もう一度、母上が亡くなる前に言ったことを細かく思い出してみよう」

第32話 消えない違和感

壁に掛けられた時計の針はそろそろ10時を回ろうとしていた。いつまでも食堂にいては給仕係が休めないなので、4人は国王夫妻の寝室の隣にある居間に移動することにする。ここならば気兼ねなく寛げ、そして誰かに話を聞かれる心配もない。

全員分の茶を淹れなおしたジャクリンが自分の隣に腰掛けるのを待ち、ザフィエルは口を開いた。

「さて、ではまず母上の行動から整理しよう。ジャクリン、なるべく時系列がはっきりするように書き留めてくれるか」

「わかりましたわ」

ジャクリンが羊皮紙と筆記用具を用意して頷く。

セルフィエルがそれを確認し、兄と妹の顔を見て言った。

「……あの日、母上はジーナと共に実家に帰っていた。訪ねてきた父上を見送って自分もジーナを連れて夜遅くに城に戻り、そのまま休むことにした」

「帰った時、父に挨拶しようと思わなかったんだろうか？」

ザフィエルが素朴な疑問を口にする。

セルフィエルは考えながら推測を述べた。

「おそらくですが……母上は、実家で父上を見送る時に待たずに先

に休んでいてくれるようにと言っていたんじゃないでしょうか？夜遅くなることはわかっていたはずですし。加えてジーナは当時4歳でしたからね……その日は休んで、翌朝改めて顔を見せる予定だったのでは？」

「ふむ……。そうかもしれない」

「では、続けますね。……母上が休んでいると、どこから誰かの啜り泣きが聞こえた。目を覚まして窓の外を見ると、乳母の孫娘が城壁を超える後ろ姿が見えた。不思議に思い泣き声を頼りに庭に出ると、身体を複数箇所刺され血塗れで倒れている父上と、その脇で泣き崩れている乳母がいた。……ここまでで何か付け加えることはありません？」

兄と妹を交互に見るが、2人とも難しい顔をして考え込んだ。

「いや……。それぐらいだったと思う。ああ、雪が降るような寒い日だったと言っていたな。うつすらと積もった雪に父の血が沁み込んで赤く染まっていたと」

ザフィエルはそこまで口にし、はっと女性陣を見て口を嚙む。しかしジャクリンもヴァージニアもけろりとした顔をしている。

「大丈夫よ、ザフィ兄さま。わたくしたちの読んでいる小説にはもっと残酷な描写も出てくるわ」

「……そうか」

ザフィエルは何となく複雑な気持ちになりながら、弟に話の続きを促した。セルフィエルは頷いて続ける。

「……そして乳母は母上に気付くと、自分が王を殺した、処刑してくれと縊った。母上は嘘だとわかっていたが、孫を庇う彼女の心を尊重し、その場で乳母を衛兵に引き渡し、夜明けとともに刑が執行された」

ジャクリーンが右手を羊皮紙の上に走らせながら呟く。

「夜明けとともにとは、随分と急ぎましたのね。それでは十分な審議がされる時間がなかったのではありませんの？」

ザフィエルが頷いて答えた。

「そうだな。だが何よりも犯人が自供していて、凶器もあったんだ。加えて10年前はまだ諸外国との関係も不安定だった。俺もセルフイエルも寄宿舎に入っていて城を空けていたから、当時の……現在も在職だが、宰相のノーワンが一刻も早い事態の收拾が第一だと判断したようだ」

「そうなんですの……でもそうですね、そういう状況であつたのならその決断が最適だったかも知れせんわ」

セルフイエルは兄夫婦のやり取りを黙って聞いた後にヴァージニアを見た。

「ジーナ、お前はどうか？何か母上の言ったことで俺たちが思い出していないことが何かあるか？もしくは……10年前のお前自身の記憶でも良いが」

振られたヴァージニアは苦笑して肩を竦めた。

「セフィ兄さま、わたくし当時4歳よ。覚えているわけがないじゃない。それに母さまの話だとその日は王都に帰り着く前から朝までずっと眠っていたらしいし……」

「……そうだな、すまん。……わかった、では母上の見たことについては思い出したら追加するでしょう。では次に乳母の孫娘……アリーシャの経験を聞いたままに話します」

数分後、同じ出来事を違う視点から辿った羊皮紙が2枚完成した。4人はそれらを無言で見比べ、やがて一様に溜息を吐いた。ザフィエルが眉根を寄せて弟に告げる。

「セルフイエル、何もおかしいところはないぞ。筋は通っているように見える。お前の勘違いではないのか？」

「いえ……」

曖昧に否定しながらも、セルフイエルも自信を失くし始めていた。食い違いや矛盾があるような気がしたのは全自分の直感だ。何の根拠もない。論理立てて説明できない以上、ただの思い違いという可能性も否めなかった。

セルフイエルが言葉を継げずにいると、ヴァージニアが首をかしげて呟いた。

「……あら？」

「どうかしまして、ヴァージニア？」

義姉に尋ねられ、ヴァージニアは躊躇いながらも口を開いた。

「ええ……というか、そんなに重大なことでもないのかもしれないが、ちよつと気になることが」

口籠る妹に、セルフィエルは真剣な眼差しを向けた。

「言ってくれ、ジーナ」

兄の眼を見つめ、ヴァージニアは神妙な顔で話し出した。

「……そのアリーシャという娘は父上を一撃で殺したのでしょうか？
なのにどうして、母上が発見した時の父上の身体には複数の刺し傷
がありましたの？」

「……あ」

言われてみればおかしい。セルフィエルは胸の動悸が速まるのを感じた。自分の感じた違和感の正体はこれだろうか。
ザフィエルも眉根を寄せて顰め面を作る。

「……脇腹と胸、そして喉に一突き、だったか？母上の記憶によると」

ジャクリーンが驚いたように夫を見返す。

「王太后さまは、どこを刺されていたかも覚えていらつしやつたの？
お辛かったですように……気丈な方でしたものね」

義母の心中を想像するように顔を悲痛に歪めた。ザフィエルがその
纖手の上にそつと自分の手を重ねる。

「母の国は当時のエストレア以上に戦の絶えない国だったからな……。嫁いでくる前には母も負傷兵の治療に参加していたというから、どこに何箇所、どう刺されていたか目に焼き付いたそうだ。だから思ったらしい。ああ、おそらく少女は不意をついて脇腹を刺したあと、倒れた父上の胸と喉に止めを刺したんだと」

兄の言葉を聞きながら、セルフィエルの頭にも母の言葉が蘇る。……めった刺し。きつと怖くて、胸だけじゃ安心できなくて喉にも刺したのね……。

背筋を冷たい汗が伝う。

黙っていたヴァージニアがやや青白い顔をして恐る恐る口を開いた。

「……ということは誰かが……娘が気絶してから乳母に見えさせるまでの間に、父上に近付いて止めを刺した……ってこと？」

セルフィエルは冷たくなっていく両手を握りしめながら兄に問う。

「……城の内部の者で、10年前父と対立していた者などはいなかったのですか？」

「俺は城を離れていたからな……当時の細かい力関係などは……」

「では俺たちが不在だったあの時、もし父がいなくなったら誰が実権を握ることになったんですか？」

「それは宰相のノーワンだろう。……まさか」

ザフィエルは即答したが、すぐに戸惑いの表情を浮かべて考え込む。

「いや……そういえば俺が王位に就く前、あいつは父と意見が対立して宰相職を下ろされそうになっていたという話を聞いたことがある。かなり父の政治に不満を持っていたようだ。……でもまさか、そんなことがあるだろうか」

セルフィエルはこめかみを指で押さえながら低い声で兄に答える。

「しかし、想像してみてください。……彼は王の考えと違うせいで今にも職を追われそうだった。何とかして留まらなければいけないと考えたでしょう。そんな状況の中、偶然にも王の育てていた暗殺者が王を刺して気を失っているという事態に遭遇した。王は気絶はしているようだが誰も見ていない。ここで王に止めを刺しても、犯人は暗殺者の娘。……彼にとつては千載一遇の、それこそ神の与えた機会に思えたかもしれない」

「落ち着け、セルフィエル。確かに辻褄が合わないが、ノーワンが関わっているというのは我々の推測に過ぎない。それにこの想像が間違っているか正しいか、確かめる術はもうない。この件はすでに……10年前に決着がついてしまっている。……たとえ濡れ衣だったとしても、一人の人間が処刑されているんだ」

苦しげに顔を歪める兄を見つめ、セルフィエルは落ち着いた声で言った。

「……俺がノーワンと話をしてみます。もし無関係であっても、当時のことを一番よく知っているのは彼です。何か有益な情報が得られるかもしれない」

第33話 窮追

「……殿下、お話とは何でしょうか？」

翌日の昼過ぎ、セルフィエルは宰相のノーワンを王の執務室に呼び出した。ザフィエルとジャクリン、ヴァージニアは、隣室の居間で待機している。

セルフィエルはノックと共に入室した宰相を固い表情で見つめると、わずかに口角を上げて声をかけた。

「仕事中にすまなかった。……座ってくれ」

そう言つてソファを指す。やや戸惑つた顔のノーワンが腰を下ろすと、自分もその向かいに腰掛けた。正面から改めて宰相の顔を見る。意思の強そうなくつきりとした眉はやや訝しげに寄せられているが、その下の青みがかつた黒い瞳は通常通りに落ち着いていた。

セルフィエルはノーワンが先王の寄宿学校時代の学友だったということ进行い出し、その年齢を40代半ばと推測した。顔色はやや不健康に青白いが眼光は鋭く、知性の高さを窺わせる。

父亡き後ザフィエルが王としての信頼と地位を築くまで、この国が諸外国と対等に交流を保つてこられたのはノーワンの功績と言つても過言ではなかった。

いざ本人を前にすると、自分の疑惑がアリーシャへの好意ゆえの不公平なもののように感じられる。セルフィエルは静かに一つ深呼吸をし、極力無心に、私情がこもらないように淡々と告げた。

「……単刀直入に聞きたいことがあるんだ。10年前の、先王崩御の時のことなんだが」

ノーワンの瞳がわすかに細められる。

「……ずいぶん唐突ですな。何でしょうか」

「実は先日、王太后が他界する直前に言い遺したんだ。先王を殺したのは乳母ではなく、実は乳母の孫娘で、その娘はまだ生きている。彼女を保護し、国外に逃がしてやって欲しいと。俺は彼女に会い、10年前何があつたのか、その娘の口から聞き出すことができた。しかし昨日兄と妹と話していて、母上の話とその娘の話に食い違いがあることに気付いたんだ」

セルフィエルは一度言葉を切り宰相の反応を見たが、彼は無表情でセルフィエルを見返している。セルフィエルは続けた。

「……そのため昨夜、納得のいく説明を探して議論したのだが我々だけで埒が明かない。何せ当時俺と兄は寄宿学校に入っており、王宮を空けていた。父の訃報を聞いて慌てて戻った時にはもう全てが終わっていたんだ。妹のヴァージニアは当時4歳。何も覚えていなかった。そこでお前に聞きたいんだ。当時のことを一番よく知っているのはおそらく10年前も宰相位に就いていたお前だ。……当時何か不審に思ったことはなかっただろうか」

口を閉じて向かいの男の目を見つめる。ノーワンは瞼を閉じて一つ大きな溜息を吐いた。

「……突然言われましても……これと言って、思い出せませんが。先王様が見罷られてからこの10年、実にたくさんの方がありましたので、それらに埋もれて正直なところ記憶があまり定かではないのです。当時わたしは事態の收拾に努めるのが精一杯で、亡くな

られた先王を拝見したのも葬礼の際が最初で最後でしたから……しかし、何が問題なのですか？その娘が殺したのだと、王太后さまが言われたのでしょうか。まさか、その娘は自分ではないと言っているのですか？」

「いや、その娘……アリーシャは自分が先王を刺したのだと認めている。……しかし母上は実際に彼女が刺したところも、父が絶命した瞬間も見えていない」

ノーワンがあからさまに眉を顰め、首を傾げる。

「わかりませんが、殿下。何が矛盾しているというのですか。現にその娘は自供しているのでしょうか。自分がやったと」

「ああ……しかしアリーシャの話によると、彼女は小刀で父に一撃しか与えていない。なのに母上の話では、父の身体には複数の刺し傷があつたらしい。……これでは辻褃が合わない。この疑問を解決するべく、昨夜から話し合いを続けているんだ」

「……その娘が嘘を吐いているのでは？」

「……そうかもしれない。でも理由がない。……こうは考えられないか？アリーシャは急所を突いたと確信しているが、当時まだ幼かった彼女の技術、そして異常な精神状態の中にあつた混乱のせいで、彼女の攻撃はわずかに父の内臓を逸れ、致命傷を負わせるには至らなかった」

「……………」

「しかし多量な出血に父に気を失い、そしてアリーシャも気絶して

しまった。母上が逃げるアリーシャの後ろ姿を見てから、すぐに庭に出て父上の遺体のそばで小刀と乳母を見つけている。……娘が気を失ってから乳母がアリーシャと父上を発見する間に、誰かが気絶していた父上に近付いて、落ちていた小刀で止めを刺した」

あくまで淡々と話しながら、セルフィエルはノーワンの変化を注意深く窺っていた。ころろなしか、彼の青白い顔からさらに生気が失せ、一層色をなくしたように見える。瞬きもわずかに多くなっているようだった。

「……そんな……その娘が混乱していたと仰るのであれば、それこそ何回刺したかなんて覚えていないでしょう。本人が1度だと言っても、実際は何回も刺したかもしれない」

「しかしアリーシャは生まれた時から父直々に訓練を受けていたんだ。将来、父直属の暗殺部隊の一員になるために。もしも彼女が本当に無意識だったとしたら、急所を一撃で仕留めるように身体が動くのが自然ではないだろうか。なぜ真っ先に心臓を狙わなかったんだろう」

ノーワンが口許を歪めてわずかに笑み、早口にした。

「それこそ咄嗟の出来事に錯乱していたんですよ。その娘は当時まだ9歳だったのでしょうか？身長が届かなかったんじゃないですか。だから脇腹を」

瞬間、セルフィエルは身体が強張るのを感じた。聞き違いだろうか。……いや。

一拍置いて、手足の先からじわじわと絶望感が這い上がってくる。一気に汗ばんできた両手を、膝の上で痛いほどに握りしめた。そし

て自分に言い聞かせる。……落ち着け、冷静になるんだ。
俯いたまま動かないセルフイエルに、ノーワンが不審げに声をかける。

「……殿下？どうかされましたか？」

「今、何て言った？」

「は？」

「身長が、届かなくて……だから？」

「ですから……心臓には手が届かなかったんでしょう。それで……」

唐突に言葉が切れる。口を開いたまま目を見開く。

空気が凍りつく。セルフイエルはゆっくりと立ち上がった。その動作に怯えたように、ノーワンもソファから腰を上げる。

「……！」

「……母上によれば、父上が身体の数箇所を受けていた刺し傷は、全て小刀によるものと見受けられたらしい。正面から胸と喉、そして……脇腹。母上は思ったらしい。ああ、おそらく少女は不意をついて脇腹を刺したあと、倒れた父上の胸と腹にとどめを刺したんだと。でもアリーシャは一回しか刺していないらしい。そのあと泣いて、気が付いたら祖母に抱きかかえられていたそうだ」

「……その者が嘘をついているのではないですか」

ノーワンが絞り出すように言う。その表情にはもはや余裕は微塵も

なく、顔は苦しげに歪んでいる。セルフィエルは厳しい声で続けた。

「俺にはそうは思えない。それにたとえそうだとしても、お前がなぜアリーシャの刺した場所を知っているかの説明にはならない。アリーシャは夜のうちに逃げ、アーシエは王妃と出会ってから一晩幽閉され、翌朝処刑された。お前は先程、父の遺体を見たのは棺の中が最初で最後だと言った。葬礼の時には衣服も整えられ、傷口は見えなかっただろう。……お前に、アリーシャがどこを刺したか知る機会などなかったんだ。……アリーシャと父が気絶している最中に、2人の傍に近寄らない限り」

「——っ！」

ノーワンが顔を上げた。よろよろと数歩後ずさると、ぱつと身を翻して駆け出す。セルフィエルが咄嗟に腕を掴もうとするが間に合わない。

「待て！」

制止の声も無視し、ノーワンは勢いのままに執務室の扉に体当たりするように開け、室外に走り出た。部屋の外に立っていた衛兵が、転がるように出てきた宰相を見て驚きと困惑の表情を浮かべる。

「捕らえてくれ！城の外に逃がすな！」

セルフィエルが声を張り上げると、衛兵は動揺しながらも我に返りノーワンを確保しようと追いつがる。

騒ぎにザフィエルとジャクリーンも廊下に飛び出してくる。

しかしノーワンはすでに廊下の角を曲がろうとしていた。

と、偶然向こうから別の衛兵が曲がってきた。衛兵が宰相の体当た

りを受けるような形で2人は衝突するが、体格差から尻餅をついたのはノーワンの方だった。

「うわつと……、……ノ、ノーワンさま！？申し訳ありません、大丈夫ですか？」

若い兵士は慌てて手を差し伸べる。が、

「捕まえてくれ！」

「え？殿下！？……へ、陛下と王妃さま、それにヴァージニアさまも！？」

駆け寄ってくる3人に混乱し彼の動きが止まる。その隙を突き、ノーワンが懷から護身用の刀を抜いて目の前の兵士に切りかかった。

「ちょ、ど、どういふことですか！」

兵士も動揺しながら自らの剣を抜き応戦する。しかし文官と武官では勝負にならない。瞬く間にノーワンは峰打ちにより気絶し、床に崩れ落ちた。

「陛下……これは……」

追いついた国王を見上げ事態が把握できない若い衛兵に、ザフィエルは告げた。

「……ご苦労だった。悪いが宰相に縄をかけて、地下の尋問室に運んでくれないか。舌を噛まないように口に布を咥えさせるのを忘れるな。わたしも すぐに行く、それまで見張りを頼む」

ぐったりと意識を失った宰相が兵士に担がれていった。ザフィエルは傍らの弟を見やる。

「……俺が話を聞いてくる。お前は休んでいる。……」ご苦労だった、セルフィエル」

ザフィエルは労いの言葉をかけながらも、苦々しい表情を崩さなかった。セルフィエルは兄の顔を見つめ、顔を歪めると小さく頷いた。

第34話 最後を選ぶのは

セルフィエルとヴァージニアは居間のソファに腰掛けていた。

一点を見つめたまま動かない兄を気遣うように見やりながら、ヴァージニアはセルフィエルの真向かいに座っていた。

しばらくそうしていると扉を開ける音がし、ザフィエルと妻のジャクリーンが姿を現す。

「……ノーワンに話は聞いた。10年前、奴が倒れている2人に近づいた時、父上は一瞬意識を取り戻したそうだ。……それで自分が止めを刺したと、自白したよ。極刑にはできないが……おそらく、一生牢から出ることはないだろう」

ザフィエルが静かに告げる。セルフィエルは溜息を吐くと、両手で顔を覆って俯いた。

「……俺はどうしたら良いんでしょうか……」

ザフィエルはわずかに微笑むと、弟の隣に腰を下ろした。

「……娘のことか」

問うと、セルフィエルがわずかに首肯する。

「……お前がここを出るときにも言ったと思うが。お前がしたいように、すればいい」

「それがわからないから聞いているんです……」

拗ねたようにセルフイエルが返す。

ザフィエルは驚いた。こんな弟の声を聞くのは何年振りか。しばらく思案し、ザフィエルは言った。

「……じゃあ、こう考える。もうその娘の祖母が大逆罪で処刑されている以上、彼女を罪には問えない。我々に残された選択肢は、国外に逃がすか、そのまま村で生活するのを許すか、それとも殺すか……お前がそうしたいのなら命を奪っても良いが、あまり意味のあることには思えない……。すると逃がすか現状を維持するかだが、どちらの選択肢を選んでも結末はあまり変わらないと、俺は思う。……お前の話では、彼女は明るく性格もいい器量良しなのだろう？ ならば国の外でも中でも、いずれは相思相愛の相手を見つけ一緒になり、子供をもつけて幸せに暮らすだろう。……だが」

「……？」

言葉を切った兄を、セルフイエルは顔を上げて不思議そうに見つめた。

「ここで問題なのは、だ。セルフイエル。お前がそれを許せるかどうかということだ」

「……………」

言われてぼんやりと想像する。

彼女が他の男と。

どこの誰とも知れない男にあの可愛らしい笑みを向ける。

恥ずかしそうに口付けを受け入れ、柔らかな体を抱きしめることを許し、その男の前でだけ艶やかに乱れてみせ——。

そこまで考えて思考を無理矢理に止めた。もう充分だ。答えはとっくに出ている。

「……………兄上」

「ん？」

「嫌です。無理。我慢できない。絶対に許せません」

ザフィエルは微笑んだ。…………このひと月で、随分と人間らしくなったものだ。

「そうか。だったら、お前の好きにしたらいい。もし将来侯爵の地位が邪魔になったら返上してもいいよ。王室師団長は続けてもらわなくてはならないが」

「兄上…………」

「セルフイエル、俺は嬉しいんだよ。俺のことばかり気にかけて自分のことはずいぶんとおざなりにしてきたお前が、初めて他人に興味を持った。お前が心から愛し、また愛されることができるかもしれない女性が現れた。俺にはそれが、奇跡のように思える。もうお前にそんな相手、現れないかも知れないと思っていたから。……………そうしてしまったのは俺だ。ずっと申し訳ないと、礼がしたいと思っていた。今まで俺のために、ありがとう、セルフイエル。…………俺は大丈夫だ。お前はもう、お前自身の幸せを考えていいんだよ。だから、もしお前が幸せになれる相手が見つかったのだとしたら、彼女にどんな過去があろうと、俺は応援する」

セルフフィエルは胸が詰まって声が出なかった。まさか兄がここまで自分のことを考えていてくれたとは。

「……………あの」

暖かな沈黙を、ジャクリーンの遠慮がちな咳払いが破った。

「…………セルフフィエルさん、決心したのなら早く戻って差し上げなさいな。彼女、きつと、今頃一人で泣いていますわよ」

唐突な言葉に思わず声が漏れた。

「…………え？誰が？」

「その娘に決まっていますでしょう」

焦れたようにジャクリーンが言う。

一瞬想像するが、あまりの現実感のなさにセルフフィエルは苦笑した。

「いや、それはないと思います。義姉上もお会いになったらわかると思いますが、精神的に強い娘なのです。自分の感情を抑制する術を知っているというか、常に理性でものを考えて動くタイプの人間です。それに10年前から覚悟したと言っていましたからね…………今は大人しく、沙汰が下されるのを待っていますよ」

ジャクリーンは額を押さえてよろめいた。すかさずフィエルが支える。

「大丈夫か、ジャクリーン」

「ええ、あなた……セルフィエルさんの発言に少し目の前が暗くなっただけですわ」

兄に睨まれ、セルフィエルは思わず心中で突っ込んだ。

（俺のせいなのか！？）

ジャクリーンが真剣な顔でセルフィエルに向き直る。

「……いいですか、セルフィエルさん。あなたの気持ちはともかく、その娘の気持ちはどうなんですの？」

……と言われても。

「いや……聞いていませんが、俺に好意を持っているとは考え難いですね。一目顔を見た時から俺の素性に気付いていたと言っていましたから。明らかに自分に恨みがあるはずなのに笑顔で近づいてくる相手に対して、恋情を抱く馬鹿はいません」

「馬鹿はあなたです」

「え……」

「今まで何人もの女性と浮名を流してきた癖に、女心を欠片も理解していませんのね！いいこと、あなたに触れられたり甘い言葉をかけられた時の彼女の反応はどうでしたの？」

「えーと……顔を赤くして慌てていました。まあ、だから俺も自信があったんですけどね、これはいけるって。でも、あれも演技だったのかと思うと女性の底知れなさを再確認して落胆したというか、

恐怖を覚えたというか」

「なんで演技なんかする必要がありますの！！本当に何とも思っていないかったのなら、笑って受け流せばいいことですわ！それともその娘は戦闘技術だけでなく男女関係にも百戦錬磨の性悪女だともいうのですか！」

「いえ、そうですね、さすがにそれはないかも……あの、義姉上、話が見えないのですが、もう少しわかりやすく言っていただけかもしれませんか」

ジャクリーンは深呼吸して静かに告げた。

「……その娘も、あなたのことが好きなんですわ」

「……………は？」

妹に目をやれば、彼女は当然だと言わんばかりに大きく頷いている。ジャクリーンが続ける。

「本当に……何でわかりませんか？その娘の胸中を想像するとぞつとします。自分を殺したいほど憎んでいるはずの男が、何故か優しく甘い言葉を掛けてくる。嘘だとわかっていても、駄目だとわかっていても好きになるのを止められない。あなたと一緒にすわ、セルフィエルさん。でも、……ええ、そうね、あなたの言った通り、きっと理性で動く娘なのでしょう。そんな自分を恥じて、穏やかな笑顔の下にあなたへの想いを隠し続けていたのですわ。……あなたに優しくされる度、嬉しい反面それが嘘だとも知っている。苦しかったでしょうね。……あなたが村を去る時、その娘はどんな様子でしたの？」

「……………覚えて、いません」

ヴァージニアが焦れたように口を挟む。

「……………セフィ兄さま、……………好きな男の人に冷たくされて平気な女なんていないのよ。……………それくらい、わからないの？」

「でも……………アリーシャは、今までの相手とは、全く違う」

彼女は嫉妬や媚、自己顕示欲といった、セルフフィエルがこれまで付き合ってきた女性たちが当たり前前に持っていたものとは無縁に見えた。

ジャクリーンが溜息を吐く。

「……………一緒ですわ。いくら強くても、感情の抑制に長けていても、傷つかないわけじゃありません。……………普通の、女の子なんですのよ」

セルフフィエルの脳裏に、夕日の中で見たアリーシャの笑顔が蘇った。最後に彼女に言った言葉が、どうしても思い出せない。ジャクリーンが心配そうに呟く。

「泣いているだけならまだいいですわ。でも……………思い詰めて、最悪の事態になっっていないかいいのですが」

最悪の事態。それはつまり。

「……………っ！」

考える前に身体が動いた。

気が付くとセルフイエルは部屋を飛び出していた。

遠ざかっていく足音を聞きながら残された3人は顔を見合わせ、誰からともなく苦笑する。

「まったく、しょうがない兄さまね」

義妹の言葉に笑って頷き、ジャクリーンは夫を見上げた。

「……いつもあなたを見ていましたから、セルフイエルさんは器用なのだと思いますけど……案外そうでもないんですのね」

「そうだな、あいつは今まで他人のことばかり気にかけてきたからな……自分のことに関しては、意外と不器用だよ」

そう言って、ザフィエルは愛おしそうに微笑んだ。

第35話 未来のない想い

——ジャクリーンの懸念は、見事に的中していた。

(……なぜ、もっと早くこうしなかったのだろう)

淡々と薬草を調査しながら、アリーシャは心底不思議に思っていた。そろそろ日が暮れる頃だ。2日間を抜け殻のように過ごした。

ここ10年欠かさずこなしてきた仕事にも出ず、心配して見に来てくれた村長やメリーベル、町の人々にもどう対応したか記憶にない。かつて感じたことのないほどの無気力感。全てがどうでも良く、セルフィエルが村を出てから一度も食事と睡眠を摂っていなかった。涙も出ない。全ての感情が麻痺し、ただぼっかりと絶望だけが残った。

そして先程、唐突に思い立って毒薬を調査することにしたのだ。腕を動かしながら鈍麻した頭で考える。

なぜ、今まで生き延びてきたのだろうか。

何度か死を考えたことはあった。

自分が生きていることが無意味どころかどうしようもなく罪深く思えて。

しかし、その度死を思い止まったのは祖母の最期のおかげだった。祖母が自分の罪をかぶってまで逃がしてくれた、つないでくれた命を自分から捨てるのは、どうしてもできなかった。

もう永遠に孝行はできない。ならばせめて、これ以上祖母を悲しませるようなことはしたくなかった。

自分では死ねない。でも誰かがこの命を奪いに来たら、その時は。そこまで考えてため息をつく。

（本当に、呆れるほど他力本願な性格だな……）

生まれた時から王のために仕えることが決まっていた、当たり前のように訓練を受け、期待に応えられるように努力して、……そして

（……たぶん、最初で最後、自分で判断して動いたのは……あの方を刺した、あのときだけ）

まあ あれは、判断というより勝手に身体が動いただけだから、数に入らないかもしれない。

ニース村に行くように指示してくれたのも祖母だし、仕事だって選んだというよりも他にできることが思い浮かばなかった。

思わず自嘲の笑みが漏れる。なんだか、泣きたい気分だった。

（……お祖母さま、ごめんなさい。お祖母さまが生かしてくれた命だったけれど、結局わたしはわたしのすべきことがわからなくて、ぼんやりとここまで来てしまいました）

毒薬の調査が終わる。出来上がった粉末を対角線に折り目を付けた半紙の上に移し、水瓶から水を汲んでくる。準備は整った。

（お祖母さま、グリエルさま、ようやくお会いできます。……ほんとうはずっとずっと、お二人に会いたかった）

脳裏にふと、あの第二王子の顔が浮かんだ。胸が苦しくなり、振り切るように目を閉じる。左手で半紙を支え、唇に持っていていき、右手でグラスを掴んだ、その瞬間だった。

—— バァン——！

家の扉が、ものすごい勢いで開いた。思わずびくりと硬直し、そちらに視線を向ける。
そこには、髪を乱し肩で息をしながら目を見開いたセルフィエルが立っていた。

「……………」

何が起こったか把握できないでいるアリーシャの顔をまじまじと見つめ、セルフィエルは安堵の溜息を吐いた。

（…………泣いてないじゃないか）

しかし、アリーシャの手元に目をやり彼女が何をしていたかを理解すると、セルフィエルはたちまち怒りの表情を浮かべて ずかずかと上がり込み、彼女の前に立った。

そして未だに硬直しているアリーシャの手から半紙を払い落とすと、その勢いのまま彼女の腰を引き寄せ、力任せに抱き締めた。

床にずると座り込むセルフィエルに引き摺られるようにして、アリーシャも膝をつく。

「…………なに、してるんだ……………！！」

耳元で怒鳴られ、アリーシャはようやく我に返った。そして激しく混乱する。

なにつて。決まっているのに。もっと早くこうするべきだったのだから。

なのに、なんで。……邪魔するの。

目の端が、床に散らばる粉を捉える。

白い粉末とこぼれた水がゆっくりと混じり合っていくのを見ながら、アリーシャは唐突にセルフィエルの怒りの理由に気が付いた。唾を呑みこんでから、おそろおそろ口を開く。

「……すみません。軽率でした」

「……？」

肩口から聞こえた小さな声に、セルフィエルはアリーシャの頭を自分に押しつけていた力を緩め、彼女の顔を覗き込んだ。

アリーシャは至近距離にあるセルフィエルの目をしっかりと見つめ、続けた。

「……お父上の仇を討ちに戻られたのでしょうか？10年前に先王殺害の件は終わっていて、今更わたしを裁くことはできない。ならばご自身の手で、と思われたのですね。……それなのに自分で命を絶とうとするとは、非常に軽率でした。止めて下さって本当に良かったです。わざわざ戻ってくださったのに、無駄足を踏ませてしまうところでした。……どうぞ、本懷を遂げて下さいませ」

「……………」

セルフィエルの瞳が、わずかに陰を帯びて細められる。

アリーシャは目を閉じ来るべき時を待った。

ほんの少し恐怖はあったけれど、それよりも感じたのは圧倒的な安堵だった。

これで終わる。

やっと、……やっと。

「……………確かに」

「……………」

しかしアリーシャの予想に反し、長い沈黙の後、セルフィエルは口を開いた。

アリーシャは怪訝に思いながら瞼を開く。

セルフィエルは続けた。

「……………確かに、俺は君に、復讐のために近づいた。国外で自由に生きていけるように取り計らってくれという母の遺言を無視して、君と親しくなつて、信頼させて、そして思い切り裏切ってから殺してやるつもりだった」

アリーシャは驚かなかった。しかし改めて告げられると、やはり胸が痛む。

（……………でも……………わかっていても、避けられないことってあるんだな……………）

しみじみと思う。

彼の思惑に何となく気付いていながら、アリーシャはセルフィエルの策に見事に嵌ったのだ。2人の友人に語った彼への好意は本物だ

った。

彼への気持ちはぼんやりと自覚していたし、だからといって抑える必要も感じなかった。

なぜなら自分は彼とどうこうなりたいと考えていたわけではない。絶対に未来のない想い。

彼がいくら自分への好意を示しても、一瞬たりともそれが本心からだと思ったことなどない。

だから彼との将来など想像したこともなかったし、いつか必ず彼に命を奪われるものだと思わなかった。

「……そのつもり、だったのに」

感情を押し殺したような声がゆっくりと続く。

セルフィエルは深呼吸をして、アリーシャの目をまっすぐに見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0508x/>

アリーシャ ～王殺しの娘～

2011年10月23日22時26分発行